う（ヴ）

う ㊀五十音圖「あ行」の第三の音。㊁咽喉から鼻腔への通路を閉ち、上齒と下齒とを接近させ、脣を圓く尖らせ、舌の後部を高めて發する母音。㊂「宇」の草體。

う【兎・兎】(名)【動】うさぎ。

う【卯】(名) ㊀十二支の一。㊁方角の一。東方。㊂昔の時刻の一。今の午前六時。あけむつ。

う【鵜】(名)【動】鵜鳥科の鳥類の總稱。形、鳥に似て大きく、色黑く、背と肩とは紫綠・青綠色の光澤を有する。嘴長く末端曲る。河海・潮沼に棲息し、能く水を潛って魚を捕へ、ろくしまつどり。

〔鵜〕

うの眞似する鴉(句) 鵜の眞似をして水をくぐる烏は、能く溺れるものであるとの義から、自分の働を知らずに、徒らに人の眞似をする人は必ず失敗するに譬へた語。

う【羽】(名) ㊀五音の一。最も遲んで高い音。㊁つばさ。はね。㊂鳥類。㊃【地】羽前國。羽後國。

う【竽】(名)【音】支那の樂器の一。管を參差し、鳥翼に象どって排列し、管毎に簧あがある。形は笙に似てゐる。昔は三十六管であったが、後、二十三管又は十七管となった。

う【禹】(名)【人】支那夏の始祖。支那上代の聖主。堯の時、洪水を治め、十三年を經て功成る。舜崩じて後、舜(ゆづ)を受けて位に即き、安邑(今の山西省解州夏縣)に都し、國を夏と號した。會稽で崩御。

う【有】(名) ㊀【哲】有ること。天地間の實在。㊁【佛】生死の相續。又、十二因緣の一。愛慾の煩惱に依って善惡の行業を後生に續生させること。

う【得】(他動、ア下二)㊀我が物とする。手に入れる。受ける。㊁出來る。よくする。㊂成し遂げる。㊃捕獲する。㊄さとる。

う【得】(自動、ア下二)㊀あふあたる。㊁足る。安んじる。㊂巧みである。

う【宇】(名)㊀のき。やれ。㊁天地四方。

う【宇】(接尾) 建物の數をあらはす語。「一」。

う【諾】(感) うべなふ意。うん。(古語)

う【憂】(名)「憂しの」の略。(古語)

う【助動】未來・推量の意を表はす口語の助動詞。

ヴァージル [Virgil] (名)【人】ローマの叙事詩人。アウグスタスの寵を得、その詩は詩形の美しさと生彩とに富み、ホーマーと並び稱せられる。其の著作に「グレグス」「牧歌集」「エニヤス物語」「ジオルギカ」等がある。(前七〇)

ヴァージン [Virgin] (名) 處女。未婚の女。

ヴァイオリン [Violin] (名)【音】洋樂器の名。首のくびれた楕圓形の胴に四絃を張り、弓で摩って鳴らすもの。表情に富み、人聲に近く、強弱・自由な點が特色である。提琴。

ヴァイオレット [Violet] (名)【植】すみれ(菫)。

うあいさ[鵜秋沙](名)【動】あいさがも」の一種。鴨に似て嘴が長い。

ヴァイタフォン [Vitaphone] (名) 發聲映畫。

ヴァガボンド [Vagabond] (名) 猶なし。漂泊者。ごろつき。

ヴァスコ・ダ・ガマ [Vasco da Gama] (名)【人】ポルトガルの航海者。印度航路の開拓を企畫し、一四九八年及び一五〇二年に印度に渡り、又、アフリカの東岸モザンビク・ソファラに植民地を起こし、一五二四年、ポルトガル領アジヤ大守となった。(一四五九—一五二四)

ヴァティカン [Vatican] (名) ローマ市の西北隅にある法王の宮殿。ローマカトリック教の大本山。聖ピエトロ寺の北に連り、ヴァチカノ丘をおほふ世界最大の宮殿。一時はカトリック庇びに世界文化の中心と稱せられた。殿内にはラファエル・ミケランジェロ等巨匠の名畫がある。

ヴァニティー [Vanity] (名) 虛榮心。虛榮。

ヴァニティー・ケース [Vanity-case] (名) 化粧箱。

ヴァニティー・フェア [Vanity-Fair] (名) ㊀流行界。㊁【文】イギリス人バンヤンの小說「天路歷程」の一節「虛榮の巷」。㊂サッカレーの小說の名。

ヴァリュー [Value] (名) ㊀價値。㊁繪畫に於ける明暗の效果。

ヴァルヴ [Valve] (名) ㊀液體やガスの流れる通路に插入されて、その流量を加減するもの。弇。㊁眞空球又は眞空管。

ヴァレー・ボール [Volley-ball] (名)(はいきゅう)排球。

ヴァンクーヴァー [Vancouver] (名)【地】カナダ太平洋岸にある良港で、英領コロンビヤ州の港市。ヒューゼット灣を距てヴァンクーヴァー島に對し、北太平洋鐵道の終點で、東亞・米國との通商が隆盛で、わが國との間に定期船が往復する。

ヴァンテージ・アウト [Vantage-out] (名) 蹇球で、サーヴでない側がデュースの後、最初の一點を得た時にいふ。アドヴァンテージ・アウト。アドヴァンテージ・レシーヴァー。

ヴァンテージ・イン [Vantage-in] (名) 蹇球で、サーヴの方がデュースの後に、最初に一點を得た時にいふ語。アドヴァンテージ・イン。アドヴァンテージ・サーヴァー。

ヴァンパイア [Vampire] (名) 吸血鬼。妖婦。

ヴァンプ [Vamp] (名) (Vampire の略)男をたぶらかす妖婦。吸血鬼。

ういう【雨意】(名) 雨模樣。あめもよひ。

ういう【雨衣】(名) 雨天に着る衣。あまぎぬ。

ういう【羽衣】(名) 天人の着る衣。はごろも。

ういう(形)(連體形のみ活用)愛らしい。神妙な。殊勝な。けなげな。(不完全形容詞)

ういう…る【有爲】(名)【佛】(梵 Asravaśa) 因緣和合の生滅無常なる現象。**—てんぺん**【有爲轉變】(名)【佛】此の世は因緣によって假に出來てゐるから、うつりかはって、しばらくも定住せぬこと。世事の移りかはりやすくはかないこと。**—ほう**【有爲法】(名)【佛】因緣によって生滅する萬有一切の法。**—の奥山**(句) 移りかはり易く、はかない世を脫することの、むづかしい事を深山に譬へていった語。

ういう【初】(接頭)或語に冠して「始めの」「初めて」等の意をあらはす語。**—げんざん**【初見參】(名) 初對面。**—ご**【初子】(名) 始めて生まれた子。うひざんの子。**—こうぶり**【初冠】(名) 元服して初めて冠を着けること。(古語)

ごと【初事】(名) 始めてすること。(古語)

ごと【初言】(名) はつ・こうじやう。(古語)

ざん【初産】(名) 初めての出産。**—じん**【初陣】(名) 初めて戰場に出ること。**—だち**【初立】(名) 初めて出で立つこと。(古語)

—だつ【初立つ】(自動、タ四) ㊀初めて出で立つ。(古語) ㊁蹇が初めて立つ。(古語) ㊂初めて巢立をする。(古語)

—たび【初旅】(名) 初めての旅行。はつたび。

—ちぎょう【初知行】(名) 初めて貰ふ知行。初任の時に給される俸祿。

—に【初に】(副) 初めて。(古語)

—ばな【初花】(名) はつはな。(古語)

—まくら【初枕】(名)(はつまくら)×新枕。

—まご【初孫】(名) 初めての孫。

—まなび【初學】(名)【佛】週刊新聞。週刊雜誌。

ウィークリー [Weekly] (名) 週刊新聞。週刊雜誌。

ウィーナス [Venus] (名) ㊀【神】希臘神話の美と戀とを掌る女神。㊁【天】金星。

ウィーピー [Weepy] (名) 感傷的な映畫。

ウィーン [Wien] (名)【地】オーストリヤの首府。ドナウ川の右岸にある。市街は二十一區に分れ、ゴシック式の市議事堂、ルネサンス式の博物館・近代ゴシック式のヴォチーブ寺院等は同市の偉觀である。

ウィウィきょう(同同教)(名)【宗】(ウキ は「同」の字の唐音)(フイフイきょう)(同同教。

ういういし(形シク)[初初し](形シク)

物事に馴れぬさま。恥づかしさうなさま。(古語)**！い**〔ひ〕[初初しい](形)(ういういしの口語。**—げ**〔ひ〕[初初しげ](名)うひうひしい樣子。**—さ**〔ひ〕[初初しさ](名)うひうひしいこと。又、その程度。

ういき…ゐき[禹域](名)禹が洪水を治めて經營した地域。支那本部の異稱。

ういーきょう…やう[茴香](名)【植】茴の字の唐音。繊形科の多年生草本。莖、宿根より發生し、高さ二米位。莖は直立し、葉は多數の絲狀に分裂せる羽狀複葉。特異な香氣がある。夏五瓣の小黃花を開き、複繊形花序をなす。果實はほぼ圓筒形で、長い毛茸がある。茴香油を製し、藥用・香料とする。くれのを。**—あぶら**〔茴香油〕(名)揮發油の一種。茴香の種子から採ったもの。

〔香茴〕

ヴィクトリア[Victoria](名)❶【人】イギリス女王。印度女帝。ジョージ三世の第四子ケント公エドワードの女。一八三七年ウィリアム四世に次いで即位した。女王天資聰明、イギリスの憲政は此の時代に模範的發達を遂げ、國力增進し、その植民地は世界各地に跨がるに至った。(一八一九)❷地①雨米フラジル、エスピリトサント州の首都。②カナダ、英領コロンビヤ州の首府。ヴァンクーヴァー島の東南端に位する。③アフリカの東部ケニヤ及びタンガニイカ英國委任統治區域の境にある湖。海拔一一三四米、面積六八、八〇〇平方粁。**ヴィクトリヤ・ニャンザ**。

ヴィクトリヤ・くんしょう……ゐ……(名)イギリスの金鵄勳章。青銅のアルタ十字形で、陸軍は紺、海軍は藍の綬を附する。「た。

ヴィクトリヤス[Victorious](英、形)勝利を得

ヴィジョン[Vision](名)❶まぼろし。幻影。❷映畫で、劇中の夢の場・幻の場・想像の場面等に用ひる絞り法。

ウィスキー[Whisky](名)大麥・小麥・玉蜀黍等の穀類を原料とし、麥芽を加へて精製した洋酒で、多量の酒精分を含む。

ヴィダム[Wisdom](名)❶智慧。❷格言。

ヴィタミン[Vitamin](名)食物中の一成分で、從來知られた榮養素以外の生命素。(1)ヴィタミンA(之を缺けば、夜盲症・せむし症等を起こす)(2)ヴィタミンB(之を缺けば脚氣を起こす)(3)ヴィタミンC(之を缺けば壞血症を起こす)(4)ヴィタミンD(之を缺けば、齒痛・せむし病を起こす)(5)ヴィタミンE(高等脊椎動物の生殖作用に必要)の五種。

ウィッケット[Wicket](名)❶窓口。受拂口。出札口。❷クリッケットで、木製の小さい三脚門。❸木戸。

ウィッセンシャフト[獨 Wissenschaft](名)學術。科學。

ウィッテ[Sergei Julievitch Witte](名)【人】ロシヤの政治家。露土戰爭に際しては軍隊輸送の任に當って手腕を認められ、一九〇五年總理大臣となり、同年六月日露戰爭の終局に際して、我が小村・高平全權と米國ポーツマスに講和條約を締結した。(一九一五)

ウィット[Wit](名)頓智。機智。洒落。

ヴィニング[Winning](名)勝點。勝點。得點。

ヴィヴュー[View](名)意見。考察。景色。

ウィル[Will](名)意志。遺言狀。

ウィルソン[Thomas Woodrow Wilson](名)【人】アメリカ合衆國第二十八代の大統領。歐洲大戰には、一九一七年、聯合國に加擔して對獨宣戰を布告し、一九一九年一月の講和會議には盟主となって、海洋の自由・民族の自決・關稅障壁の撤去を骨子とする十四箇條の敎書を提出し、且國際聯盟の基礎を確立した。(一九二五)

ウィルヘルム[Wilhelm](名)【人】❶一世。ドイツ皇帝・プロシヤ王。フリードリッヒ・ウィルヘルム三世の子。ビスマルクを宰相に任じて、大いに軍備を擴張して普墺戰役を決行し、一八六七年北ドイツの盟主となり、一八七〇年—一八七一年の普佛戰役には、自ら兵を率ゐて出陣し、一八七一年一月ヴェルサイユに於いてドイツ皇帝宣言式を擧行、ドイツ統一の大業を成した。(一八七七)❷二世。ドイツ皇帝・プロシヤ王。一世の孫。ビスマルクを斥けて自らドイツ國策の中心となり、ドイツ第一主義をモットーとして軍備を整へ、銳意植民地の獲得と貿易市場の擴大に力め、一九一四年、英佛露等と歐洲大戰の戰端を開き、對戰五年、敗北の結果、一九一八年十一月、帝位を退き、オランダに隱遁した。ドイツ皇帝の時代にカイゼルと稱せられた。(一八五九)

ウィルヘルム・テル[Wilhelm Tell](名)【人】スウィスの傳說的愛國者。時の代官ゲスレルの暴威に反抗し、遂に之を射殺し、スウィスをオーストリヤの桎梏から解放した。この傳說を材料とした文學にシルレルの「ウィルヘルム・テル」(一八〇四年作)がある。

ウィルヘルム・マイステル[Wilhelm Meister](名)【文】ゲーテ作の小說。主人公ウィルヘルム・マイステルと女優マリアンネとの情事と、その間に出來たフェリックスの敎育法とを描寫したもので、第一部は修行時代であり、第二部は遍歷時代で、氏の生涯を通じての大作である。一七九五—一七九九年の作。

うい-ろう…ろう[外郎](名)(「外」の字の唐音)❶(ういろうくすりの略。❷(ういろうもち)の略。**—うり**[外郎賣](名)小田原名物の外郎賣の物眞似や官位立を演ずる歌舞伎の惡。歌舞伎十八番の一。**—ぐすり**[外郎藥](名)【藥】元の人、醫師良外耶陳宗敬が、我が國に歸化して創製した藥で、江戸時代に、小田原から賣出したもの。痰の妙藥。又、髮の臭氣を去るに用ひる。とうちんかう(透頂香)。**—まめ**[外郎豆](名)【糧】たんきりまめ。**—もち**[外郎餅](名)藥子の名。米の粉を黃に染め、砂糖を加へて蒸し四角に切ったもの。外郎藥に似た形と色とを有する。山口縣山口の產。「ながしめ。

ウィング[Wing](名)❶翼。❷舞臺の兩側に立てた張物。

ウィンク[Wink](名)戀愛信號のまばたき。秋波。

ウィンター[Winter](名)❶冬。❷晩年。老年。**—スポーツ**[Winter-sports](名)冬季に行ふ運動競技、卽ちスキー・スケートなどの類。

ウィンチ[Winch](名)卷揚機械。水平軸に搖胴を取附け、この軸を滑して索又は鎖を捲き、重量物を結束して揚卸する機械の總稱。

〔チンィウ〕

ウィンドー[Window](名)窓。陳列窓。**—グラス**[Window-glass](名)窓硝子。**—ディスプレー**[Window-display](名)陳列窓に商品や廣告效果のあるやうに並べること。**—トリミング**[Window-trimming](名)店頭廣告、店頭裝飾。

ウィンド・ミル[Wind mill](名)風力を羽根車に作用させた原動機。翼を裝置した驅(ゑ)を有する羽根車を高い建物の上などに取附け、齒車などによって車の風を受けて起こす運動の原動力を諸機械に傳へるもの。ふうしゃ。

〔ルミ-ドンィウ〕

うう[ふふ]〔ふふ〕[飢う・餓う](自動、ワ下二)食物がなくて腹がへる。飢食に乏しい。

うう[ふふ]〔ふふ〕[植う・栽う](他動、ワ下二)❶種子を蒔きつける。植物の根を地に埋めて生長させる。❷はめこむ。いれこむ。❸物を地に埋め立てる。

ウースン[呉淞](名)【地】(Woosung)支那江蘇省上海市の東北にある都市で開港場。上海の附屬港。昭和七年一月、上海事件に際し、我が軍の占據した處。

ウーチン[魚辰](名)(支那語)支那料理の一。さかた鮫の軟鰭を乾燥したもの。

ウーピー[Whoopee](名)米國の流行語)歡樂の意。朗かな映畫・ダンス・ジャズ・痛飲・情人とのドライヴの如き類。底拔騷ぎの愉快な遊び。

ウー・ボート [獨 U-boot](名) ドイツの大型潜水艦。ウンテル・ボートの略。

ウーマン [Woman](名) 女。婦人。既婚の婦人。

ウーマン・サフレージ・ムーヴメント [Woman suffrage movement](名) 婦人参政運動。

ウーラン [Ulan](名) ⊖槍騎兵。ドイツの槍騎兵。

ウール [Wool](名) ⊖羊毛。綿毛。⊖羊毛製の一種。

ウーロン・ちゃ [烏龍茶](名) 支那産の茶。多く青心種から採取する。紅茶と緑茶との中間の如きもの。独特の強い芳香がある。

うえ [雲](名) ⊖鳥の如くに集まり、雲の如くに散ること。⊖鬱形極まりない陣法。⊖黒黒と重なる雲。⊖女の黒髪の形容。

うえ [上](名) ⊖高い所。かみ。(下の對) ⊖おもて。表面。⊖かしら。いただき。⊖ほとり。かたはら。⊖すぐれること。たふといこと。⊖加へること。添へること。(古語) ⊖将軍。公方。⊖主上。至尊。(古語) ⊖朝廷。殿上。(古語) ⊖政府。官廳。⊖門・車などの屋根。⊖貴人の御座に近い處。**—には上がある** (句) 上には際限がない。**—の女房** (句) 主上の御座の近くにある奥向の室。**—見局** (句) 主上の御座の近くにある奥向の室。**—見ぬ鶯** (句) 上を長れぬ傲慢の人を、鶯が他の鳥を恐れずに空を見あげぬ習へていふ。**—より下よ** (句) 上になったり下になったりするにいふ。又、混雑するさま。**—を下へ** (句) 上のものを下へ、下のものを上へおいて混雑するさま。

うえ [上](接尾) ⊖貴婦人の名の下に添へる語。「奥の—」。⊖目上の人の稱の下に添へる語。「母—」。

うえ [筌](名) 魚を捕へる具。細い竹を編んで、筌無し繊利のやうに造り、水中に沈めて入るに易く出るに難いやうにしたもの。うけ。うへや。

うえ [飢・餓・餓](名) うゑること。ひもじいこと。

ウェイスト [Waist](名) ⊖腰部。⊖胴着。チョッキ。⊖船上部甲板。

ウェイター [Waiter](名) 給仕人。ボーイ。

うえうえ [上上](名) 高貴な身分の人。「と。

ウェーヴ [Wave](名) ⊖波。⊖頭髪をうねらすこと。

ウェーティング・ルーム [Waiting-room](名) 待合室。應接室。

ウェートレス [Waitress](名) 女給仕人。女給。

ウェーファー [Wafer](名) アイスクリーム等にあしらって食べて、又、離乳期後の小兒や病人に適する輕く消化のよい洋菓子。材料にはバター・砂糖・鶏卵牛乳・メリケン粉・燒粉・鹽・香料等を用ひる。

ヴェール [Veil](名) 顔帔。面帕。

ヴェールス [Veils](名) 【地】イギリス大アリテン島の西に突出した大半島で、山多く、一つの歴史的區劃をなす。面積二萬方粁。

うえかみ [植髪](名) いれげ。つけげみ。かつら。

うえき [植木](名) ⊖植ゑた木。⊖鉢植にした小さい木。ぼんさい(盆栽)。⊖地名。播本縣鹿本郡にある町。西南戦役の激戦地。**—だな** [植木店](名) うゑ木を賣る店。**—ばち** [植木鉢](名) うゑ木をうゑる鉢。**—むろ** [植木室](名) 冬季に寒さを長れる花木又は花を早く咲かせようとする花木を入れて置く暖室。**—や** [植木屋](名) 植木の栽培・庭園植物の手入・庭つくりなどを業とするもの。園丁。

うえこすり [植こすり](名) 樹木をしげく植ゑ込んだ所。

うえこみ [植込](名) 樹木をしげく植ゑ込んだ所。

うえこむ [植込む](他動・マ四) 草「木をしげく植ゑつける。

うえさざき [上樣](名) ⊖高貴な人の尊稱。⊖江戸時代の將軍の尊稱。

うえざま [上樣](名) 上の方。上部。

うえじ [植字](名) ⊖活字。⊖活字を組立てること。しゅじ。**—ばん** [植字版](名) 活字版。

うえした [上下](名) ⊖かみとしも。⊖朝野。官民。⊖上と下との顛倒すること。

うえじに [餓死](名) うゑて死ぬこと。

うえしろ [上白](名) ⊖蹠かさの色目。表の白いもの。**—むつぎぬ** [上白六衣](名) 昔の女官の服裝。上衣に白を用ひ、下衣に濃紅・淡紅・濃青・淡青・濃薄色・淡薄色の六枚を重ねたもの。

ヴェスヴィオ・かざん [Vesuvio, Vesuvius]—[火山](名) 【地】イタリー南部にある活火山。カンパニヤ平原に聳え、ナポリ灣の東側、ナポリ市の東一六粁の處にある。海拔一三〇〇米。古来厳・大活動をなし、殊に西暦七九年八月には有名なポンペイ市等を火山灰の大泥流で埋めてしまった。其の後二十七回以上の爆發があった。

うえすがた [上姿](名) 殿上にある時の姿。

うえすぎかげかつ [上杉景勝](名) 【人】戦國時代の武將。長尾景虎の子。上杉謙信の養子。父の死後、豐臣秀吉に仕へ、五大老の一に列し、會津百二十萬石に封ぜられたが、秀吉の歿後、慶長五年石田三成と結んで關ヶ原役に徳川家康に叛いたので、米澤三十萬石に移された。元和九年(一六二三)卒。年六十九。

うえすぎけんしん [上杉謙信](名) 【人】戦國時代の武將。長尾爲景の子。初の名は景虎。後、輝虎と改め、髭髪して謙信と號した。兵略に長じ、慶・武田信玄と馳ふ。天正六年(一五七八)越後國春日山城に歿。年四十九。

うえすぎようさん [上杉鷹山](名) 【人】米澤藩主。名は治憲。上杉重定の養子。老後隠退して鷹山と號した。徹底的節儉を厲行し、行政の刷新産業の奬勵に努め、荒地開墾、百姓の救恤に盡瘁した。文政五年(一八二二)卒。年七十二。

ヴェスト [Vest](名) ⊖チョッキ。又、婦人洋服の上半身に著用して、その上にスカートを重ねるもの。⊖小型寫眞器。**—スウェーター** [Vest sweater](名) 袖・襟共になく、前でボタンをかけるスウェーター。

ウェストミンスター [Westminster](名) 【地】ロンドン市主要の一部で、テームス河の左岸に位し、河岸からハイド公園にかけての地域で、バッキンガム宮殿を始め、國會議事堂等があって政治の中心地域をなし、ウェストミンスター寺院・同名のホール等がある。**—じいん** [—寺院](名) 西暦六百年代の始、東サキソン王セベルトの創建の英國皇帝・皇后の外、著名の政治家・文學者・軍人もここに葬られた。會堂の形狀はラテン十字架で、全長一七一米。高さ三七米。塔の高さ七五米。

うえた [植田](名) 苗代に仕立てた苗を植ゑた田。

うえだ [上田](名) 長野縣上田地方から產する紬の綿織物。

ヴェダ [吠陀・韋陀](名) 【宗】梵 Veda) 印度婆羅門教の最も古い經典で、アーリヤ族が中央高原を出て、ガンジス河邊に移住した間の、讃美歌を集めたもの。

うえだあきなり [上田秋成](名) 【人】國學者。通稱は東作。大阪の人。博覽強記、文章に長じ、又、茶器を製し、粟田燒を發明した。文化六年(一八〇九)歿。年七十八。「雨月物語」「藤簍冊子」等の著がある。

うえだし [上田市](名) 【地】長野縣の北信盆地。

うえだ・ぶん [上田敏](名) 【人】英文學者・譯詩家・審美批評家。笹川臨風・戸川秋骨と號す。東京高等師範學校教授を經て、京都帝國大學・文學部教授となった。詩壇に於いては明治の象徴主義者であり、文壇に於いては、明治末期享樂派の創成者であった。大正五年歿。その著に、「海潮音」「みをつくし」「伊曾保物語考」「民俗傳説」「現代の藝術」「詩聖ダンテ」等があり、「上田敏全集」に收められてゐる。

うえつ・がた [上つ方](名) 官位高き人。貴人。貴神。

うえつき [植月](名) 苗や植物を植ゑるべき

うえ-つ-く〔植付く〕(他動、カ下二)草木を移し植ゑておひ立たせる。

うえ-つ-け〔植附〕(名)❶うゑつけること。❷たうゑ。**—半作**〔—はんさく〕(名)田植がすめば、収穫の半分は保證されたも同様である意。

うえ-つ-ける〔植附ける〕(他動、カ下一)(うゑつく)の口語。

ウェッディングリング〔Wedding-ring〕(名)

うえ-つ-ぼね〔上局〕(名)❶宮中の女房の詰所。(以上古語)

うえ-な-し〔上無し〕(形、一)❶まさるものがない。最上である。❷限がない。「る縄。

うえ-なわ〔植縄〕(名)移植の時に、照準に用ひ

ヴェニス〔Venice〕(名)【地】イタリー北部の要塞市で、ヴェニス灣に臨む。町は百十七の小島の上にあって、百五十の運河が四通八達してゐる。市内の交通は主として小舟と小蒸氣船により、小舟はゴンドラと呼ばれ、荷客を運ぶ。市内にサンマルコ寺院・ナポリ寺・サンエルモ城・國立博物館等がある。**—はけんちく**〔—派建築〕(名)【建】イタリー國ルネサンス建築の一派で、ヴェニスを中心として起り、初めはゴシック式であったが、後、正面が平坦で凹凸のないものが用ひられ、優美・輕快・華麗な美術的建築となった。

ヴェニス-の-しょうにん〔—の商人〕〔Merchant of Venice〕(名)【文】シェークスピヤ作の喜劇。アントニオと守錢奴シャイロックとの訴訟事件の中にシャイロックの奇智に富む若い女ポーシャの性格描寫が最も巧みにあらはれ、觀文と散文、夢幻と現實とを融縁して、漠然たる劇を構成してゐる。一五九四年頃發刊。坪内逍遙の邦譯がある。

うえの〔上野〕(名)【地】東京市下谷區にある公園。大正十三年、帝室から東京市に御下賜となった。櫻花の名所。寛永寺・東照宮・帝室博物館・帝國學士院・東京美術學校・東京音樂學校・東京科學博物館・東京府美術館等がある。又、公園の北側には東北・信越・常磐・山手線等の鐵道驛がある。**—せん**

そう〔—将〕(名)【歴】明治元年四月、將軍徳川慶喜の恭順を悔ばぬ輩が、上野公園に輪王寺宮を奉じて、彰義隊と稱して官軍に反抗した職。

うえの-きぬ〔表衣〕(名)(ほう)〔袍〕。(古語)

うえの-はかま〔表袴〕(名)束帯の時に大口の上にはく袴。色は表白、裏紅で、地質は平絹・綾で、表に紋樣がある。

うえ-ひげ〔植髭〕(名)能の假面などに毛を植ゑて作った髭。

うえ-びと〔上人〕(名)(てんじょうびと)殿上人。(古語)

うえ-びと〔飢人〕(名)ひもじがってゐる人。

うえ-びと〔植人〕(名)植物をうゑつける人。

うえ-ぶ〔—ぶ〕〔上ぶ〕(自動、バ上二)上品になる。上つ方らしくなる。(古語)

うえ-ぶし〔上臥〕(名)殿中の宿直。(古語)

ウェブスター〔Webster〕(名)【人】(Noah Webster)〔英國の劇作家。シェークスピヤに比肩する作家。「白鬼」「モルフィの公爵夫人」等の著がある。(一五七〇?—一六三五?)〕アメリカの辭書編纂者。一八二八年辭書を編纂した。これが有名なウェブスター辭典である。又、氏の作ったスペリング・ブックも好評を博した。(一七五八)

うえ-ほうそう〔植疱瘡〕(名)【醫】しゅとう(種痘)。

うえまち-もの〔上町者〕(名)堅氣者。

うえ-みだい〔上御臺〕(名)嘗婚となった御臺

うえ-め〔植女〕(名)田に苗を植ゑる女。さなとめ(早少女)。

うえ-もの〔植物〕(名)❶しょくぶつ。❷野菜。

うえもの〔右衛門〕(名)(うえもんふ)。**—の-かみ**〔右衛門督〕(名)右衛門府の長官。**—の-じん**〔右衛門尉〕(名)(うえもんじょう)(宜秋門)。**—の-だいぶ**〔右衛門大夫〕(名)右衛門の尉(じょう)で五位のもの。**—の-ふしょう**〔右衛門府生〕(名)右衛門府の下官。**—ふ**〔右衛門府〕(名)(うえもんふ)衛門府。

ヴェランダ〔Verandah〕(名)張出し縁。廊下。

ウェリントン〔Arthur Wellesley Wellington〕(名)【人】イギリスの名將・政治家。印度・ポルトガル・スペインに活躍して職功を樹て、一八一五年聯合軍總帥として、再墺のナポレオンをウォーターローに破り、英名を世界に轟かした。功を以て公爵となる。後、政界に入って保守派の首領となり、内閣を組織した。(一七六九—一八五二)

うえる〔—える〕(自動、ワ下一)(うう)の口語。

うえる〔飢える〕(自動、ワ下一)(うう)の口語。

うえる〔植える〕(他動、ワ下一)(うう)の口語。

ウェルカム〔Welcome〕(名)歡迎・歡待・挨拶。

ヴェルサイユ〔Versailles〕(名)【地】フランス、セーヌ・エ・オアス縣の首都。パリの南西一六粁にある。**—きゅうでん**〔—宮殿〕(名)ヴェルサイユにある著名の大宮殿。ルイ十四世の計畫で、ルーヴェ・マンサール・ガブリエール等の建築家の努力・經營によるもので、一六六四年著手し、一七一四年完成した。豪壯・華麗の意匠裝飾は、ルイ十四世式と稱せられる。その、鏡の間には講和會議が行はれたことによって名高い。**—へいわ-じょうやく**〔—平和條約〕(名)【歴】歐洲大戰は一九一八年十一月休戦となり、翌年一月、ヴェルサイユに於いて講和會議が開かれ、四箇月の討議の後、遂に平和條約案を作成し、六月二十八日ヴェルサイユ宮殿で、日・米・英・佛・伊・外二十二箇國とドイツとの調印を終った。同條約は十五篇四百四十條と十八の附屬書とから成り、ドイツに對する平和條約のみならず、恒久平和の策を企圖してゐる。

ウェルズ〔Herbert George Wells〕(名)【人】イギリスの小説家・評論家・歴史家。文學者たるは勿論、他面生物學者・物理學者・哲學者・社會學者・歴史學者で、その知識の上にローマンスを敍し、評論の筆を執り、近代科學上の理論と機械發明の進歩に基礎を置く科學小説を書き、且物理的機械科學と經濟學との利用によって社會改良の理想地に至らうとしてゐる。その著に「タイム・マシーン」「空中戰爭」「世界文化史大系」「生命の科學」等がある。(一八六六)

ヴェルダン〔Verdun〕(名)【地】フランスの要塞市で、ミューズ地方の首府。歐洲大戰に際し、一九一六年二月からの獨佛兩軍の激戰地として有名である。**—じょうやく**〔—條約〕(名)【歴】西暦八四三年、チャールス大帝の孫ロタール・ルイ・チャールスが、この地に會して遺領を三分する事を定めた條約。

ウェルテル〔Werthers〕(名)【文】「若きウェルテルの悲しみ」(Die Leiden des jungen Werthers)作の書簡體の小説。情熱的なドイツ文學の假面を世界的とした尊い史的意義ある作で、主人公若き貴家ウェルテルと處女ロッテとの悲戀物語。一七七四年刊。

ヴェルハーレン〔Emile Verhaeren〕(名)【人】ベルギーの詩人。マーテルリンクと共にベルギー新興文學を代表する人で、プロレタリヤ詩人。現實的傾向を有したが、後、神祕主義に入り、又、厭世思想を有してゐたが、漸次光明的人生觀に向かった。代表的作品に「フラマンド雜詠」「午後」「黎明」「修道院」等がある。(一九一五—八)

ヴェルモット〔佛 Vermouth〕(名)葡萄酒の原料に香料を加へた酒で、味醂に似た苦みがある。イタリー産及びフランスで製造せられる。

ヴェルレーヌ〔Paul Marie Verlaine〕(名)【人】フランスの詩人で、象徴詩派の柱石。其の作品に「野の調」「華やかな饗宴」等がある。(一八四四—九六)

ヴェロナール〔Veronal〕(名)【藥】催眠鎮靜藥。無色の結晶、無臭で稍ゝ苦味を呈し、水に僅かに溶解する。一回量は0.五五以下。

うえ-わらわ〔—わっぱ〕〔上童〕(名)宮中や貴族に召使はれる童子。(古語)

うえん〔有縁〕(名)【佛】佛に縁のあること。

うえん〔烏焉〕(名)(兩字の字形が似てゐて誤り易いからいう)文字の誤。

うえん〔迂遠〕(名)(ゑん)❶まはりどほいこと。❷ていねいこと。へたなこと。❸道路の曲ってゐて遠いこと。

うおうを【魚】(名)【動】魚類の總稱。脊椎動物の一綱。すべて水中に生活し、體は水の抵抗を少くするやうに多少側扁な紡錘形のもの。鰭は背鰭・臀鰭・尾鰭・胸鰭・腹鰭がある。胸鰭・腹鰭は體の平衡を保つ爲のもので、運動には尾鰭を用ひる。又、鰾があって皮膚を保護してゐる。呼吸には鰓(えら)を用ひ、又、體内に浮囊を具へ、水中に於ける體の浮力の調節を司る。**—いち**【魚市】(名)うをいちば。**—いちば**【魚市場】(名)魚を賣買する市場。**—がし**【魚河岸】(名)魚市場のある河岸。**—ぎれ**【魚切】(名)不漁の爲、魚の品切となること。**—ざ**【魚座】(名)❶鎌倉時代に起こった、魚商人の同業組合。❷【天】北天の星座で、獸帶十二星座の十二番目。**—ようゆ**【魚醤油】(名)魚類を原料として製した醬油。「いかなご醬油」「いわし醬油」の類。**—せんべい**【魚煎餅】(名)魚の肉を原料として煎餅の形に製したもので、吸物などの材料に用ひる。**—だな**【魚棚】(名)❶魚類を載せて置く棚。❷魚類を賣る家。さかなや。**—つなぎ**【魚繋】(名)魚が串にさしたやうに續いて並ぶこと。**—にかわ**【魚膠】(名)魚類の骨・皮などから製した膠。**—のめ**【魚目】(名)手足なく魚の目のやうに見えるかいふ。**—ひしお**【魚醢】(名)漢字の偏の一。鯛・鯉などの左方にある魚の字。**—み**【魚見】(名)魚の所在又は魚の群り來る狀況を見分けること。又、其の人と其の場所。**—みそ**【魚味噌】(名)魚類を加へて製した味噌。**—や**【魚屋】(名)魚を賣る人。又、其の家。**—心あれば水心**(句)他人が己に親切であれば、我も亦他人に親切を盡くすなり。**—と水**(句)親密な間柄。**—の釜中に遊ぶが如し**(句)資治通鑑・漢願帝紀の句。滅亡の近きにあるを知らずして徒らに生を偷(ぬす)むことの譬。**—の目に水見えず**(句)わが身に關ふかねことの譬。**—は江湖に相忘る**(句)(莊子、大宗師篇の句)悠悠自適して

てその境遇に心づかねことの譬。**—は鯛**(句)魚類中で旨いのは鯛である。**—を得て筌(せん)を忘る**(句)(莊子、外物篇の句)その意を得たる後、その語を忘るることの譬。

ヴォーカル[Vocal](名)(英、形)聲の。聲樂の。

ヴォーキング[Walking](名)競歩。此の競技は何れか一方の足底が地についてゐなければ反則となる。

ウォーク[Walk](名)歩行。散歩。歩道。遊歩道。

ウォーク・スペース[Work-space](名)充漫な配事で紙面を埋めること。

うおうさおう[右往左往](名)不規律に逃げるさま。

ウォーター[Water](名)水。**—クレーン**[Water-crane](名)給水管。直接、機關車に給水する爲に設置する直立した太い管。**—クロセット**[Water-closet](名)便所。W.C.**シュート**[Water-chute](名)水邊に橋を作り、そこから斜面の板上に軌道を設け、ボートを斜面に滑走させ、その末端で水煙をあげて水上に浮かばしめる壯快な遊戯。**—プレーン**[Water-plane](名)水上飛行機。**—ボール**[Water-ball](名)ウォーターポロ。**—ポロ**[Water-polo](名)陸上のバスケットボールに似た水中遊戯。

ヴォードヴィル[Vaudeville](名)流行唄。踊や唄入の喜劇。諸藝大寄せ。

ウォーミング・アップ[Warming-up](名)野球用語。試合開始前の練習運動。整備運動。

ウォール・カラー[Warm colour](名)暖い色。赤・黄・オレンジ色の類。

ウォール・がい[—街][Wall Street](名)【地】紐育に於ける金融の中心地。

うおたかうを…[魚鷹](名)【動】みさご(鶚)。好んで魚を捕へ食ふからといふ。

ウオツカ[露 Vodka・Wodka](名)燕溜酒の一種。ライ麥を糊化醗酵せしめ、之を蒸溜して製する。酒精四〇乃至六〇%を含む。おもにロシヤに產する。

ウォッシュ[Wash](名)❶洗濯用の鹼狀粘液。❷洗濯。❸汽船などの走った跡に立つ波。

ウォッシュ・スタンド[Wash-stand](名)化粧臺。便所。手洗臺。

ウォッチ[Watch](名)懷中時計。**—カメラ**[Watch-camera](名)時計型の小寫眞器。

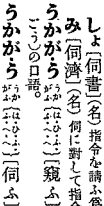
ウォルツ[Waltz](名)舞踊で、二人が一組になって靜かに旋り踊るもの。又、その音曲。ワルツ。二人旋廻舞踊。

ヴォルト[Volt](名)【理】電壓の實用單位。一オームの電氣抵抗を有する導體に、一アムペヤの不變電氣を發生せしめる爲に要する不變電壓。

ウォルフラム[Wolfram](名)【化】金屬元素の一。重石又はウォルフラム鐵鑛となって產する。硬度高く熔解し難い。鋼に加へると、硬度を增すから特殊鋼を製し、又、電球内の纖條とし、或はタングス酸ナトリウムとして染色に用ひる。タングステン。**—こう**[—鋼](名)(Wolfram steel)ウォルフラムを加へた鋼。**—てっこう**[—鐵](名)【鑛】(Wolframite)ウォルフラムの重なる鑛物。板狀・柱狀・葉狀・塊狀をなし、暗褐色又は黑色金屬光澤を有する。顏料製造に用ひられる。

うか…か[羽化](名)❶幼蟲が蛹となり、後羽を生じて成蟲となること。❷人間に羽が生えて空中を飛ぶ樣子。仙人となること。**—とうせん**[羽化登仙](名)人間に羽が生えて仙人となって天に登ること。

うかい…かい[鵜飼](名)❶鵜を飼ひならして鮎をとらせること。❷鵜飼の業とする人。❸【文】語曲の名。甲斐の石和(いさ)川の鵜飼の幽靈が、日蓮上人の濟度によって成佛する といふ筋。**—び**[鵜飼火](名)鵜飼する時に焚く篝火。**—ぶね**[鵜飼船](名)鵜飼をするに用ひる船。**—べ**



(一)飼鵜

[鵜飼部](名)上古、鵜を使用して魚を捕へ、朝廷に奉ることを世職とした部族。

うかい[有涯](名)【佛】輪廻變遷して常住ならぬ世界。

うがい[嗽](名)水などを含んで口をすすぐこと。含嗽。**—ぐすり**[嗽藥](名)うがひに用ひる水藥。がんをうがいす(含嗽劑)。**—じゃわん**[—碗茶碗](名)うがひに用ひる茶碗で、飯茶碗より大きい。銅・眞鍮製などのもある。

うかいこつ[烏啄骨](名)【生】たいこつ。

うかがいい[伺](名)❶うかがふこと。❷下級官廳から監督官廳に、人民から政府に指令を仰ぐこと。❸神佛に託宣を乞ふこと。**—あし**[伺足](名)しのびあし。ぬきあし。**—しょ**[伺書](名)指令を請ふ爲に出す文書。**—み**[伺濟](名)何に對して指令を受け終ったこと。

うかがう[浮浮](名・副)❶心の落ちつかぬさま。❷思慮のないさま。

うかがう[伺](他動、ハ四)❶うかがふこと。❷下級官廳から監督官廳に、人民から政府に指令を仰ぐこと。❸神佛に託宣を乞ふこと。

うかがう[窺](他動、ハ四)❶のぞく。のぞいて見る。❷ひそかに時機の至るを待つ。❸ひそかに得ようと望む。ねらふ。

うかがう[伺ふ](他動、ハ四)❶尋ねる。「問ふ」の敬語。❷「訪ふ」の敬語。何候。參上。❸しらべる。ためす。❹神佛に託宣を請ふ。

うかがう[伺ふ](他動、ラ下二)❶しらべる。ためす。❷ひそかに得ようと望む。ねらふ。

うかがう[窺ふ](他動、ハ四)❶尋ねる。「問ふ」の敬語。❷「訪ふ」の敬語。何候。參上。❸しらべる。ためす。❹神佛に託宣を請ふ。

うかがう[浮かがう](自動、ラ下二)(いかがう)[浮ふ](他動、ハ四)❶浮かぶ。❷「浮ふ」の敬語。

うかがう[羽客](名)【動】仙人。

うかがく[羽翮](名)【動】(「翮」は羽の本ぐれ)つばさ。

うかがく[有學](名)【佛】聲聞修行上に於いて、聖者の位地に達しながら、なほ學修を必要とするもの。小乘教の預流果・一來果・不還果の類。

うかがく[右樂](名)右方で奏する樂。

うかがく[窺ふ](他動、ハ四)❶のぞく。のぞいて見る。❷ひそかに時機の至るを待つ。❸ひそかに得ようと望む。ねらふ。

うかがく[伺ふ](他動、ハ四)❶尋ねる。「問ふ」の敬語。❷「訪ふ」の敬語。何候。參上。❸しらべる。ためす。❹神佛に託宣を請ふ。

うがじん〔宇賀神〕(名)【神】祭財天の寶冠中にある白蛇を神として祀ったもの。

うかす〔浮かす〕(他動、サ四)❶うかばせる。❷うきだせる。

うかすす〔浮かす〕(他動、サ下二)前「うかす」の口語。

うかせる〔浮かせる〕(他動、サ下一)「うかす」の口語。

うかたま〔宇迦魂・倉稻魂〕(名)【神】うかのみたま。

うかつ〔迂闊〕(名)まはりどほいこと。事情にうといこと。注意の足らぬこと。—に〔迂闊に〕(副)うっかりと。深く考へずに。

うかつ〔窒つ〕(他動、タ四)❶孔をあける。ほる。❷つきぬく。❸せんさくする。きはめる。

うかぢ〔窒〕(名)うかつこと。

うかつく〔浮かつく〕(自動、カ四)❶貫き着る。はくる。❷あばくる。❸押分けて進む。「かうかする。

うかと〔浮と〕(副)心づかずに。うっかりと。

うかねろう〔浮かつく〕(自動、カ四)うかがひもとめる。(古語)❶窺狙ふ。❷〔跡見〕の枕詞。

うかのみたま〔宇迦御魂・倉稻魂〕(名)【神】「食物の神。稻荷の神。素盞嗚尊の御子。

うかびあがる〔浮かび上る〕(自動、ラ四)うきあがる。

うかぶ〔浮かぶ〕(自動、バ四)❶沈まずに水の上にある。❷動いて定まらぬ。❸志を得て世に出る。❹思ひ出す。❺七盤が解脱して成佛する。—せ〔浮瀰〕(名)❶安樂になる機會。❷出世する機會。

うかぶ〔浮かぶ〕(他動、バ下二)❶水の上にうかばせる。❷出世させる。❸思ひ出す。❹諸誦する。❺亡靈など成佛させる。

うかべる〔浮べる〕(他動、バ下一)「うかぶ」の口語。

うかみ〔窺見・間諜〕(名)しのび。ものみ。かんて。

うかむ〔浮む〕(他動、マ下二)うかぶ。

うかむ〔浮む〕(自動、マ四)うかぶ。

うがじん〔宇賀神〕(名)【神】祭財天の寶冠中にある白蛇を神として祀ったもの。

うかす〔浮かす〕(他動、サ四)❶うかばせる。❷うきだせる。

うかすす〔浮かす〕(他動、サ下二)前「うかす」の口語。

うかせる〔浮かせる〕(他動、サ下一)「うかす」の口語。

うかたま〔宇迦魂・倉稻魂〕(名)【神】うかのみたま。

うかつ〔窒〕(名)うかつこと。

うかつ〔迂闊〕(名)まはりどほいこと。事情にうといこと。注意の足らぬこと。—に〔迂闊に〕(副)うっかりと。深く考へずに。

うがつ〔窒つ〕(他動、タ四)❶孔をあける。ほる。❷つきぬく。❸せんさくする。きはめる。❹貫き着る。はくる。❺あばくる。❻押分けて進む。

うかと〔浮と〕(副)心づかずに。うっかりと。

うかねろう〔浮かつく〕(自動、カ四)うかがひもとめる。(古語)❶窺狙ふ。❷〔跡見〕の枕詞。

うかのみたま〔宇迦御魂・倉稻魂〕(名)【神】「食物の神。稻荷の神。素盞嗚尊の御子。

うかびあがる〔浮かび上る〕(自動、ラ四)うきあがる。

うかぶ〔浮かぶ〕(自動、バ四)❶沈まずに水の上にある。❷動いて定まらぬ。❸志を得て世に出る。❹思ひ出す。❺七盤が解脱して成佛する。—せ〔浮瀰〕(名)❶安樂になる機會。❷出世する機會。

うかぶ〔浮かぶ〕(他動、バ下二)❶水の上にうかばせる。❷出世させる。❸思ひ出す。❹諸誦する。❺亡靈など成佛させる。

うかべる〔浮べる〕(他動、バ下一)「うかぶ」の口語。

うかみ〔窺見・間諜〕(名)しのび。ものみ。かんて。

うかむ〔浮む〕(他動、マ下二)うかぶ。

うかむ〔浮む〕(自動、マ四)うかぶ。

うかめだて〔浮立〕(名)知ったふり。

うがも〔鵜鴨〕(名)【動】鴨科の鳥。鳩より大きく、嘴は黑くして尖り、羽毛は夏は黑褐色であるが、冬は白色が加はる。脚は灰白色。

うがやふきあえずのみこと〔……鵜鵜葺不合尊〕(名)【神】彥火火出見尊の御子。御母は豐玉姬。五瀨尊・神日本磐余彥尊の御父。

うから〔族〕(名)血縁の人。みより。親族。やから。(古語)—やから〔親族〕(名)同族。一家親族。一門。(古語)

うかり〔浮〕(名・副)物事に心づかず、茫然としてゐるさま。—ほうう〔浮坊〕(名)茫然としてゐる人を罵ていふ語。

うかる〔浮かる〕(自動、ラ下二)❶浮いて處が定まらぬさすらふ。❷心が落ちつかぬ。❸心が他にうつる。❹心が定まらぬ。❺うっかりしてゐる。

うかる〔受る〕(自動、ラ四)試驗に及第する。

うかれいず〔浮かれ出づ〕(自動、ダ下二)❶目あてもなく家を出る。何心なく家を出る。❷面白さにうきたつ。

うかれお〔浮男〕(名)浮かれて遊びあるく男。

うかれがらす〔浮鳥〕(名)月夜にうかれて時ならず鳴く鳥。❷夜うかれあるく人。

うかれごころ〔浮心〕(名)うきうきとした氣もち。

うかれさんじゅう〔浮三重〕(名)三重の一。芝居で、幽靈などを出す時、淒みを添へるに用ひる鳴物。

うかれずま〔浮妻〕(名)うかれめ(浮女)。

うかれぞめき〔浮素見〕(名)遊郭の店先をひやかして歩きまはるもの。

うかれちょうし〔浮調子〕(名)心の浮立つ調子。うはつてゐる(上調子)。

うかれだ〔浮男〕(名)浮かれ男。

うかれびと〔浮人〕(名)❶浪人。一處に落ちつかぬ人。❷道樂者。

うかれびょうし〔浮拍子〕(名)人の心を浮き立たせる三味線などの拍子。

うかれぶし〔浮節〕(名)(なにわぶし)〔浪花節〕。

うかれぶね〔浮船〕(名)❶遊覽の漕船。遊船。❷處定めずただよふ船。

うかれめ〔浮女〕(名)娼妓・娼妓などの總稱。遊君。遊女。

うかれめゆかた〔浮浴衣〕(名)浮かれた人の着るゆかた。はでなゆかた。

うかわ〔鵜川〕(名)(うかい)〔鵜飼〕。—の小鮎(句)過れる道のないものの譬。

うがん〔烏桓〕(名)【歴】前漢の頃、東蒙古にあた部族。昭帝の時、強大となり、魏の曹操に滅ぼされる。

うがんむり〔ウ冠〕(名)漢字の冠の一。「宇」「家」などの字の上にある宀の字の稱。

うき〔右岸〕(名)下流に向かつて右手の岸。

うき〔泥〕(名)どろ。(古語)

うき〔憂〕(名)うれへ。悲しみ。心配。

うき〔浮子・泛子〕(名)❶魚の餌にかかつたのを知る爲に、釣絲につけて水に浮かす小さい木片。❷網を水中に敷いて、その所在を明らかにする爲に、網網につける木片。❸流の速度と方向とを測定する爲に水面に浮かべる具。❹水泳場などで、水の深さを知らす爲に水面に浮かべる具。❺うきぶくろ。

うき〔雨季・雨期〕(名)一年中で、雨の最も多い時季。我が國では梅雨の時季。

うき〔于歸〕(名)(詩經周南桃夭篇「之子于歸」(にのごとく)に基づく)嫁入すること。

うき〔雨揆〕(名)(書經舜典「納于百揆」に基づく)(右大臣の唐名。

うき〔羽儀〕(名)❶(易經漸卦に「其羽可用爲儀」)儀表となること。❷近衛兵。

うき〔雨儀〕(名)往古、宮中の儀式を雨天の時は略して雖があつてゐること。

うきあがる〔浮上がる〕(自動、ラ四)❶底から浮び出る。❷苦しい所をたすかる。❸立身する。「を物の面の上に高く彫りあげた彫刻。

うきあげぼり〔浮上彫〕(名)種種の模樣や形像

うきあし〔浮足〕(名)❶足の指だけが地面について

うきあし〔浮足〕(名)❶足の指だけが地面について踵があがつてゐること。❷一所におちつかないこと。にげごしとなること。❸相場の下落傾向。—立つ(句)逃げ腰になる。

うきあしば〔浮足場〕(名)水中に結船を浮かしてその上に組立てた足場。「きぶり。

うきあぶみ〔浮歩〕(名)足を浮かせてあるくあるき

うきいし〔浮石〕(名)【鑑】溶岩の冷却した塊。冷却の際、瓦斯や水蒸氣が逃出した爲に多くの小孔があつて、面は組糙である。輕くて水に浮くもの。かるいし。

うきいわ〔浮石〕(名)❶うきいし。かるいし。(古語)❷水面に半ばあらはれて浮いたやうに見える岩。

うきうき〔浮魚〕(名)【動】常に水の上層に生活する魚。

うきうお〔浮魚〕(名)【動】鰹・鰯・鯖・鮪・鰤・鰹・鰯・鯖・鮪・鰤・鰹・鰯・鯖・鮪・鰤・

方官の俗稱。**―の**〔浮草の〔枕〕〕浮き」「根を絶えて」の枕詞。

うき・ぐつ〔浮沓〕(名)浮靴の古語。水泳の時、身を浮かせる爲につけたもの。木製筒形、長さ六〇糎のものと長さ三六糎のものを各布囊に入れて縫めつなぎ、紐で身體につける。大筒を背に、小筒を右の乳にあてて結べば、水心なきものも、立身で自由に泳がれる。うきぶくろ。(古語)

うき・くも〔浮雲〕(名)㊀空中に漂うて風に從って動く雲。㊁物事の落ちつき定まらぬこと。㊂〔文〕長谷川二葉亭の小説で明治文學初期の寫實主義の代表的作物。坪内逍遙の「小説神髓」に啓發され、明治二十年發刊したもので、主人公内海文三に關する精細を極めた心理描寫は巧妙である。

うき・くろう〔憂苦勞〕(名)憂苦。心配。

うき・こ〔浮粉〕(名)米をこまかくしたもので、菓子を製し、又は紙を凝結せしめるに用ひる。

うき・ごけ〔浮苔〕(名)〔植〕地錢類の苔類。多肉で叉狀に分岐し、多數密集し、淡綠色を呈する。濕地又は水中に自生し、前者は扁平で假根があり、後者は萬角狀で假根がない。

うき・ごし〔浮腰〕(名)㊀腰に力のこもらぬこと。

うき・さんばし〔浮棧橋〕(名)河・海の岸に箱船を浮かして棧橋としたもの。

うき・しお〔浮潮〕(名)潮の流。潮流。〔め。

うき・しお〔憂潮〕(名)つらい場合。苦しいは

うき・しずみ〔浮沈〕(名)㊀浮くと沈むこと。㊁榮えると衰へること。

うき・しま〔浮島〕(名)㊀植物或は植物遺骸が塊になって湖上に浮かび島のやうに見えるもの。㊁水面に浮かんだやうに見える島。**―にんぎょう**〔浮島人形〕(名)蠟を引いた厚紙に練絹で髣髴、人物・鳥などの形を造り、針金を芯として水に浮かべるもの。

うきしまがはら〔浮島原〕(名)〔地〕靜岡縣駿(イ)東郡沼津市と富士郡鈴川との間で、浮島沼のある平原。愛鷹山の麓。「浮島沼」は周回約一六粁。宮士八湖の一。

うき・しろ〔浮城〕(名)〔軍〕軍艦の異名。

うき・す〔浮洲〕(名)沼或などに、浮木・泥炭・材木などが集まって、自然と土を載せ、草木が生えて浮かんだ洲のやうに見えるもの。

うきす〔浮巣〕(名)㊀葦の枯葉などでできて水に浮いて見える鳰(にほ)鳥の巣。㊁定めなき住處の譬。㊂船。**―どり**〔浮巣鳥〕(名)㊀浮巣をつくって棲む鳥。㊁所定めず住まふもの。

うき・すけ〔浮助〕(名)色めいた男。うかれ男。

うき・すまい〔憂住〕(名)心配の多い住居。

うき・せ〔憂瀬〕(名)苦しい處。苦しい時。

うき・せい〔浮勢〕(名)遊軍。

うき・せっけん〔浮石鹼〕(名)石鹼の一種。普通の石鹼と同じ成分であるが、多くの氣泡を含む爲に輕くて水上に浮かび、白色で品質は一般によい。

うきぞうす〔浮藏主〕(名)浮かれた藏主。馴驅(くく)な藏主。藏主は禪宗の僧侶の職名で、經藏を掌る者。

うき・ぞなえ〔浮備〕(名)うきぜい。遊軍。

うき・た〔浮田〕(名)浮洲に作った田。

うき・たから〔浮寶〕(名)船の異稱。(古語)

うき・だし〔浮出〕(名)紙の表面に文字或は模樣など浮出し表す法で、浮出した模樣部を表面から見る時凹んだものと、模樣部のみ高く盛り上って裏面に凹凸のないものとある。**―いんさつ**〔浮出印刷〕(名)文字・模樣などを浮き出さるる印刷。

うき・だす〔浮出す〕(他)㊀浮き出さるる印刷。㊁浮かれ始める。

うき・た・つ〔浮立つ〕(自動)夕四心が落ちつかず、騷ぎ立つ。

うきたひでいえ〔浮寺喜多秀家〕(名)【人】直家の子。豐臣秀吉の養子。八郎と稱す。秀吉に仕へて片諱を賜ひ、「家氏」を「秀家」と改む。後、五大老の一人となる。慶長五年、關ケ原役に大阪方の元帥となり、敗れて八丈島に流され、明暦元年(一六五五)卒。年八十三。

うき・ち〔浮地〕(名)封建時代の慣用語。農民の課稅の苦痛を免れん爲に妻を離ました者の殘した土地。

うき・つ〔浮津〕(名)天の川にあるといふ渡場。(古語)

うき・つち〔浮土〕(名)泥ぶかい土。(古語)〔語)

うき・ど〔浮戸〕(名)閘門又は船渠の入口を閉鎖するに用ひる戸。

うき・どうだい〔浮燈臺〕(名)燈臺の一種。洲の附近に碇泊した船舶の檣上などに燈火を設け、航路を示すもの。

うき・ドック〔浮船渠〕(名)(Floating dock)船渠の一種。船體を載せ、水上に浮かばせて作業する裝置のもので、主として船の修繕用のもの。

うき・とうだい〔浮燈臺〕(名)燈臺の一種。洲の附近に碇泊した船舶の檣上などに燈火を設け、航路を示すもの。

うき・とり〔浮鳥〕(名)㊀水に浮かばす玩具。

うき・な〔浮名〕(名)噂の評判。男女間の情事のうはさ。艶聞。

うき・な〔浮菜〕(名)〔植〕かぶら」の異稱。

うき・なみ〔浮浪〕(名)うき立つなみ。(古語)

うき・に〔浮荷〕(名)打荷(にに)の爲に海中に投棄せられ、又は風波の爲に船中からさらはれて海中に漂ってゐる貨物。

うき・にんぎょう〔浮人形〕(名)玩具の一。壺の上に杓子を持った人形を立て、壺の下部にさしこんだ笛を吹けば、上の人形が踊るもの。

うき・ぬ〔浮沼〕(名)うきぬま。泥の深い沼。(古語)

うき・ぬま〔浮沼〕(名)泥深い沼。うきぬ。

うき・ね〔浮根〕(名)水に生えた草の浮かんだ根。

うき・ね〔浮寢〕(名)㊀船中に寢ること。㊁寢ても心の落ちつかぬこと。㊂かりそめの添寢。㊃〔舊〕上方地歌(だうた)の曲名。朝妻捨按の作曲で、三味線・箏にあはせて歌ふ。うきとり。**―どり**〔浮寢鳥〕(名)水上の鳥。みづとり。

うき・は〔浮葉〕(名)水に浮いてゐる葉。

うき・はえなわ〔浮延縄〕(名)海の表面又は中層に浮かべおろして、上の人形を流水する「まぐろ」「かじき」「ふか」「さより」などを捕へるに用ひる縄。

うき・ばかり〔浮秤〕(名)〔理〕比重計の一。目盛をした硝子管の下端の球形部に水銀又は鍾を入れ、これを液中に投ずる時は、水銀の重さによって直立し、液體の比重小なる程、沈下することの多くなるやうにしたもの。

〔うきばかり〕

うき・はし〔浮橋〕(名)多くの舟を浮かべて其の上に板を渡した橋。(古語)

うき・ひと〔憂人〕(名)自分につらくあたる人。

うき・ひょうし〔浮拍子〕(名)うかれびやうし。浮いた拍子。

うき・ぶくろ〔浮嚢〕(名)㊀〔動〕魚のふえ(鰾)。㊁水泳に溺れぬ爲につける具で、多く防水布で作り中に空氣を滿たして使ふ。㊂船に備へる救命具。胴に捲きつける救命帶・救命胴衣・背に負ふ救命袋・環狀體の救命浮環等の種類がある。

うき・ふし〔憂節〕(名)つらいこと。悲しいこと。

―の里〔句〕悲しい事の多い里。色里。「こと。

うき・ふしょう〔憂不祥〕(名)つらく迷惑な

うき・ふね〔浮舟〕(名)㊀水上に浮いてゐる舟。㊁〔文〕能の謠曲の名。源氏物語の浮舟の君のことを描いたもの。**―の**〔浮舟の〔枕〕〕「漕ぐ」の枕詞。

―のきみ〔浮舟君〕(名)「源氏物語」宇治十帖中の女主人公の一人。

うき・ぼうず〔浮坊主〕(名)うかれ坊主。色

うき・ぼうだい〔浮砲臺〕(名)港灣の防禦・砲臺攻擊の爲に堅牢な覆蔽を設け、多くの砲を備へた職艦。現今は使用されない。

うき・ぼうはてい〔浮防波堤〕(名)防波の爲に港內一定の場所に繫いだ箱船又は筏。

うき・ぼり〔浮彫〕(名)うきあげ彫。

うき・みぶくろ〔浮枕〕(名)㊀うきね。㊁悲しいひと。

うきみ〔憂身〕(名)悲しい事の多い身。**―をや**

つす〔句〕或事に熱中して心配が多い。みなりを構はず或事に熱中する。

うきみ〔浮身〕(名)❶游泳法の一。體の力を抜いて仰向になり、靜かに水面に浮かぶ方法。❷遊女の一種。旅商人などの滯在中、妾のやうな勤をするもの。

うきみどう〔……〕〔浮御堂〕(名)【佛】滋賀縣滋賀郡堅田町琵琶湖の水面に浮かんだやうに造った御堂。海門山浦月寺と稱する。慧心僧都の開基で、同僧都作の千體阿彌陀佛と聖德太子作の觀世音とを本尊とする。

うきみみ〔憂耳〕(名)かなしい物語。つらい話。

うきむしゃ〔浮武者〕(名)遊軍に屬する武士。

うきめ〔憂目〕(名)つらい。こと。〔どざえもん〕。

うきもの〔浮物〕(名)❶水上に浮いてゐる物。❷

うきもん〔浮紋〕(名)浮織にした紋。(固紋の對)

うきやく〔浮役〕(名)江戸時代の稅名。年貢以外の臨時雜稅。

うきやく〔雨脚〕(名)あまあし。

うきよ〔憂世〕(名)つらい世。此の世の中。

うきよ〔浮世〕(名)❶定めない世。無常の世。此の世の中。當世。當世風。❷好色。**—え**—〔浮世繪〕(名)寛文の頃、菱川師宣によって創始せられた風俗畫。俳優・武者の似顔やその當時の民衆生活を描いたもの。その樣式に肉筆と版畫とがある。土佐・狩野・谷れたものの、此の派の名家に喜多川歌麿・安藤廣重・歌川豐國・葛飾北齋などがある。**—おとこ**〔浮世男〕(名)好色の男。色男。遊治郎。**—がさ**〔浮世笠〕(名)浮世ぐるひする者などのかぶった笠。**—がたり**〔浮世語〕(名)うきよばなし。**—がわ**〔浮世川〕(名)戀の道。流の道。**—ぎんちゃく**〔浮世巾著〕(名)遊郭で売なとの持つ巾著。**—ぐら**〔浮世藏〕(名)遊女からの贈物などをしまひ込む藏。**—ぐるい**〔浮世狂〕(名)❶浮世の事に心を奪はれること。❷遊女や酒色に耽ること。❸名利に熱すること。**—こころ**〔浮世心〕(名)浮世のちまた。世の中。**—ごころ**〔浮世心〕(名)現世に執著する心。**—ごさ**〔浮世莫蓙〕(名)石疊に似た模樣を織り出した莚。**—ことば**〔浮世言葉〕(名)俗對などにつかふ愛想のある言葉。**—こもん**〔浮世小紋〕(名)流行の小紋形。**—し**〔浮世師〕(名)世事に通じた人。通人。粋人。**—じん**〔浮世人〕(名)うきよびと。**—すがた**〔浮世姿〕(名)當世風の姿。**—せつ**〔浮世說〕(名)うきよばなし。**—ぞうし**〔浮世草子〕(名)【文】江戸時代に行はれた小說の一種。當時の世態・風俗を寫したものので、西鶴物・八文字屋物などがある。**—たき**〔浮世叩〕(名)俗謠の一。もと胸叩から起つたもの。**—でら**〔浮世寺〕(名)世間ずれのしぬ寺。俗僧のゐる寺。**—どこ**〔浮世床〕(名)❶かみゆひどこ。❷【文】江戸寛文三馬の滑稽小說。髮結床に來た客の滑稽を書いたもの。三篇八册。文化八年刊行。**—にんぎょう**〔……〕〔浮世人形〕(名)婦女の風俗をあらはした人形。裾がまくれるやうになって、陰部を具へてゐる。**—ばなし**〔浮世話〕(名)世間話。俗談。**—びと**〔浮世人〕(名)うきよびと。**—ふう**〔浮世風〕(名)

〔形人世浮〕

ぶくろ〔浮世袋〕(名)江戸時代に、浮世狂をうれ、上の角に絲を附けた袋。後には玩具となった。**—ぶし**〔浮世節〕(名)當世流行の世俗の唄。**—ぶろ**〔浮世風呂〕(名)❶入りこみの錢湯。❷【文】式亭三馬の滑稽小說。錢湯での話を描寫したもの。四篇九册。文化六年刊行。**—ぼん**〔浮世本〕(名)(うきよぞうし)。**—もとゆい**〔浮世元結〕(名)裝飾を施したはでな元結。**—の網**〔句〕浮世の迷の迷ひの逃れ難いこと。**—の色**〔句〕此の世のありさま。**—の海**〔句〕此の世の煩惱の深きを海に譬へいふ。**—の風**〔句〕思ふに任せぬ世の中。**—の絆**〔句〕義理人情の關係で、浮世を捨て兼れるきづな。**—の闘**〔句〕浮世を逃れ出ふに邪魔になるもの。**—の塵**〔句〕此の世の名利のけがれ。世間の俗事。**—の情**〔句〕現世をつないでゐる弦。俗の綱。**—の波**〔句〕浮沈喜憂の極まりない世の有樣。**—の習**〔句〕人世の免れ難い習慣。**—は夢**〔句〕浮世の物事のはかないこと。**—絲瓜の革頭巾**〔句〕此の世の何のへちまとも思はぬといふ風に、此の世を馬鹿にしたやうに見える革頭巾。絲瓜といふ語から「革」を引き出したのである。

うきょう〔……〕〔右京〕(名)昔、平安京(京都)を朱雀大路を界として東西に分けた西の方の稱。西の京。(左京の對)**—しき**〔右京職〕(名)昔、右京の事を司つた役所。**—のだいぶ**〔右京大夫〕(名)右京職の長官。

うきょく〔紆曲〕(名)❶うねりまがること。❷とうきょく〔……〕〔浮く〕(自動、カ四)❶水上にあつて沈まぬ。❷水中から水面にあられる。うかぶ。❸落ちつかない。❹動いて定まらぬ。❺心が酒色などに奪はれて仕事が手につかぬ。興に乘じて浮かれる。❻酸味又は不快な感振音などの爲に、齒の浮上がる感を起こす。❼揺かれた物體が浮いて見える。❽剩餘がある。

うきん〔烏金〕(名)影金に使ふ黑色の金屬。赤銅。

うく〔……〕〔浮く〕(他動、下二)〔うかせる〕。

うく〔……〕〔受く・承く・請く〕(他動、カ下二)❶受取る。與へられる。❷受取る。❸容れる。❹請ける。❺迎へる。❻迎へる。防ぐ。❼容れる。❽うけ出す。❾あがなふ。❿承はる。奉ずる。⓫きき入れる。うべなふ。⓬むかひある。⓭「受」はうけとる。⓮「享」は天命をうける。封土などをうける。⓯「承」は心にうけいれる。⓰「請」は受願をうける。神が供物をうける。⓱「禀」はうまれつきにうける。⓲「菱」は菱廻をうける。

うく〔……〕〔請く〕(他動、カ下二)價を償つてとりかへす。うけだす。「賣る—」。

うく〔……〕〔穿く〕(他動、カ下二)穴をあく。

うぐ〔雨具〕(名)あまぐ。

うぐ〔迂愚〕(名)愚かなこと。

うぐい〔石斑魚〕(名)【動】鯉科の淡水硬骨魚。體は狹長・側扁。鱗は鼠褐で細かい。頭部は黑色で綠を帶び、唇は帶紅色。背部は暗褐色で淡黑色の斑紋がある。腹部は白色を帶び、雄は産期に紅色を帶びる。腹は白く、大なるものは約三〇糎に達する。あかはらう。まるた。

うぐいす〔……〕〔鶯〕(名)❶【動】燕雀類の鳥形は「めじろ」に似て肥え、背部は橄欖褐色で、腹部は灰白色。眼・嘴共に細い。鳴聲殊にうるはしく、初春より囀る。人家に飼つて其の聲を珍重する。鼓などに住んで小蟲を捕へ食ふ。叢は洗粉の原料となる。❷(ぜっぱい)〔切戀〕の異稱。❸組香の包紙を刺し、又は火加減を見るに用ひる具。長さ一〇種餘。形は串に似る。金・銀・赤銅で作る。❹鶯色。❺鶯茶。**—あわせ**〔……〕〔鶯合〕(名)飼養せる鶯を持寄つて、鳴聲の優劣を競ふこと。鶯會。**—いろ**〔鶯色〕(名)(うぐいすいろ)。**—がい**〔鶯貝〕(名)【動】あこやがひの一種。殼は鳳翅の形をしてゐる。**—がき**〔鶯垣〕(名)黑文字(くろもじ)の木で編目こまかに作つた柴垣。茶室の庭に珍重せられる。**—かん**〔鶯羹〕(名)羊羹の一種。燒栗をまぜて鶯色にしたもの。**—ごえ**〔鶯聲〕(名)鶯の鳴聲によくまねる辯舌。**—すな**〔鶯砂〕(名)鶯石の破片を多量に含有する綠灰色の砂。壁を塗るに用ひる。**—そう**〔鶯草〕(名)【植】(ろりそう)〔瑠璃草〕。**—そで**〔鶯袖〕(名)袖の脇を縫つた小袖。**—ぞめ**〔鶯染〕(名)鶯茶の色に染めること。又、其の色。**—だけ**〔鶯茸〕(名)【植】高等菌類の一。傘の表面は紅く、裏面と柄部は白い。食用となる。**—ちゃ**〔鶯茶〕(名)染色の一。綠茶と黑月との交つた色。鶯の羽色に似てゐる。うぐひす。うぐひす色。**—な**〔鶯菜〕(名)【植】❶油菜の變種。葉は食用とし、種子から油を採る。❷こまつな(小松菜)。**—のみ**〔鶯呑〕(名)二人が、十杯づつの酒を五杯づつ二組とし、梅花五瓣に擬して竝

べ、早く呑み終ったのを誇とすること。―**ばり**[鶯張](名)廊下などの板を踏めば、鶯の鳴くやうな音を發するやうに張った板。―**ぶえ**[鶯笛](名)子供の吹き遊ぶ笛で、鶯の囀る音を出すもの。―**まゆ**[鶯眉](名)古昔、奥女中の描いた眉。眉を細く剃りつけて、中に二本墨をさしたもの。十六七歳から行なった。―**もち**[鶯餅](名)餅菓子の一種。餅に餡を包み、青粉をまぶしたもの。―**鳴かせた事もある**(句)女の若い時に容貌美しくて多くの人の心を引きつけたこともある。又、鶯の一種の鳴聲。

うくうちゅう[有空中](名)【佛】佛教で有教・空教・中道教に分ち、中道教を最も優秀とする法相宗の佛典批判説。

うぐもつ[…もつ](自動、タ四)うごもつ。(古語)

うぐら[椎](名)【植】むぐら。(古語)

うぐら[動]…ぐら。

ウクライナ[Ukraine](名)【地】ロシヤ・ソヴェート社會主義共和國聯邦に加盟せる共和國。歐洲大戰後の新興國。首府はキエフ。ロシヤの西南部を占め、西北はポーランド、西南はルーマニヤ、南は黑海及びアゾフ海によって境ぜられる。面積四十五萬平方粁。

うぐらもち(名)【動】むぐらもち。

ウクレレ[Ukulele](名)【音】ギターに似た四絃樂器。ハワイ土人の音樂に用ひる。

うけ[食](名)くひもの。食物。け。(古語)

うけ[泛子・浮子](名)うき。(古語)

うけ[受・請](名)㊀受けること。㊁面すること。㊂受ける器。㊃つっぱり。さまへ。㊄評判。人望。㊅答へること。㊆領承すること。㊇おもはくこと。㊈うけ。

うけ[有卦](名)陰陽家が、五行の生尅の理により、人の生年を干支に配して定めた幸運の年まはりで、この年まはりに當った人は、吉事が七年續くといふ。(無卦の對)―**ぶるまい**[…まひ][有卦振舞](名)有卦に入った時の祝宴。―**に入る**(句)よい運に廻りあふ。

うけ[槽](名)大きな桶。うけぶね。(古語)

うけあい[…あひ][請合](名)請けあふこと。ひきうけ。保證。

「けおうの口語。

うけあう[…あふ][請合ふ](他動、ハ四)(うけあ

うけあみ[受網](名)引網の一。中央に網があって、魚を網の中に追ひこめて捕へるもの。

うけあみ[浮歩](名)音のせぬやう極めてしとやかにあるくこと。

うけあゆみ[…ゆみ][浮歩](名)音のせぬやう極めてしとやかにあるくこと。

うけい[雨霽](名)降雨の時、砂地の水の溜り流れ去ること。

うけい[誓約・祈](名)㊀誓約。㊁のろひ。(以上古語)

うけい[…がり][祈狩](名)神に祈って事の吉凶を獲物で知らうとする狩。(古語)

うけい[右傾](名)㊀政治的には保守主義。㊁革命運動から脱して反動化すること。㊂國粹主義的思想。(左傾の對)

うけいだす[…だす][請出す](他動、サ四)うけいる[…だす][受入る](他動、ラ下二)受けて收める。「けだす。

うけいれ[受入](名)うけいれること。收入。

うけいれる[受入れる](他動、ラ下一)「うけいれる」の口語。

うけう[…けう][誓ふ](他動、ハ四)㊀ちかふ。㊁のろふ。(以上古語)

うけうた[受歌](名)代作の歌。

うけうと(名)【植】紅藻類の海草。「こうてんぐさ」に似て細長く、紫色。「ところてん」の知くに製して食用に供する。

うけうら[受裏](名)兜の名所。うけはり。

うけうら[請賈](名)㊀問屋から買受けて賣捌くこと。㊁他人の意見や學説をそのまま自分の説の如くにして述べること。

うけお……を[受緒](名)㊀鎧の縅上の袖附緒に繋ぐ緒。㊁箙・数・空穂などに附ける緒。

うけ・おい……[請負](名)㊀うけあひ。㊁ひきうけ。㊂建築・土木等に於いて、或仕事を完成せん事を約し、相手方が其の結果に對して報酬を與へることを約すること。―**きょう**[…けう][請負業](名)請負なする商賣。―**きん**[請負金](名)請負人が報酬として受ける金。―**こさく**[請負小作](名)【農】一定の年限を限って請負仕事を職業とする人。―**し**[請負師](名)請負仕事を職業とする人。―**ちょうしゅうほう**[…しゅうはう][請負徴收法](名)【經】租稅徴收法の一。政府が國民から直接に租稅を徴收せず、別に請負人があって、一定の手數料を受取って、政府所要の金額を納め、その納めた金額を國民から徴收すること。―**ちんぎん**[請負賃銀](名)仕事の出來高の多寡に應じて賃銀を支拂ふこと。―**にん**[請負人](名)【法】請負契約によって、仕事を完成する義務を負ふ人。―**ほしょうきん**[請負保證金](名)【法】官廳又は會社が、請負人に請負の契約履行の保證として差出させる金。

うけ・おう……[請負ふ](他動、ハ四)身に引受けて責を果すことを約束する。間違ひないことを保證する。

うけ・おう……[請負ふ](他動、ハ四)㊀うけあふ。ひきうける。㊁請負仕事を引受ける。

うけおり[浮織](名)うきおり。―**もの**[浮織物](名)うきおりもの。「ること。承諾。

うけがい[…がひ][請書](名)うけしょ。うけぶみ。

うけがき[請書](名)㊀受ける方法。㊁受ける人。

うけ・かた[受方](名)㊀受ける方法。㊁受ける人。

うけ・ぎ[受方・受け方]たって勢の劣って見えること。

うけぎ[受木](名)史記陳餘傳の語。〈昔支那で、至急を要する場合に、雞の羽を附けて、そのしるしとしたからいふ。至急の徴兵の檄文。

うけく[憂けく](名)憂きこと。つらさ。(古語)

うけぐち[受口](名)㊀物品の受入口。㊁下顎の上顎よりも突き出た口。

うけ・ぐつ[穿沓](名)やぶれた靴。(古語)

うけ・ごう[…ごふ][肯ふ・諾ふ](他動、ハ四)うけひく。承諾する。うなふ。がへんする。

うけ・ごし[受腰](名)【經】清算取引で、買方が株を引受けてする取引。

うけごし[受腰](名)【經】清算取引で、買方が株や米などの賣物を受取らうとする態度。

うけこたえ[…たへ][受答](名)問をかけられて答へること。言をかけられて返辭すること。應答・挨拶。受返答。

「のみこみ。

うけこみ[受込](名)うけこむこと。ひきうけ。

うけこむ[…こむ][受込む](他動、マ四)ひきうける。うけいれる。

うけざかや[受座](名)開閉する扉の軸のはまる金物。

うけざや[請酒屋](名)請賃をする酒屋。うけざけを賣る店。

うけさく[請作](名)……さく(小作)。

うけさけ[請酒](名)請賃する酒。

うけし[…けし][憂けし](形、一)うし(憂し)。

うけしばい[…ばい][請芝居](名)興行主が役用を請負ってする芝居。

うけしょ[請書](名)承はった旨を記して差出す文書。うけがき。

うけぶみ[請書](名)「て文書。引請證書。

うけじょう[…じょう][請狀](名)引請をした旨を記し

うけじょうぎ[…じょうぎ][受將棊](名)遊戯の名。將棊の駒を隨意の方法で配當し、その中の一人が、自分の思ふ駒を出し、若し他の人が同一の駒を持たぬ時は他の駒を出す。又、若し其の駒を他の人が持ってゐる時には、その人が代って之を出し、早く駒を出し切った人を勝とする。

「浮かばせる。(古語)

うけすう[…すう][浮据う](他動、ワ下二)

うけずつ[…ずつ][受筒](名)鎧の背部の腰のあたりに付て、指物をさしこむ用に供する筒。

うけそう[…そう][請奏](名)昔、公事の日に、所要の品の下附を朝廷に申請すること。

うけそなえ[…そなへ][受備](名)敵の襲來に備へる

うけだす[…だす][受出す](他動、サ四)㊀預かる我が物とする。

うけだち[受太刀](名)㊀切りつけられた太刀を受止める太刀。㊁議論をしてまけいろになること。

うけたまわり[…まはり][承](名)うけたまはること。命令を受けてゐるもの。―**ごと**[承事](名)承る

値値のあること。拝聴すべきこと。

うけたまわる〔承はる〕(他動、ラ四)㊀仰を承ける。㊁謹んで承諾する。㊂様子を聞く。傳聞する。

「稱。

うけつ〔雨月〕(名)㊀雨夜の月。㊁陰暦五月の異

うけつぎ〔受継〕(名)うけつぐこと。

うけつ・く〔受附く〕(他動、カ下二)㊀申込を受ける。引受ける。㊁取りつぎを承諾する。用事をうけつぐ。

うけつ・ぐ〔受継ぐ〕(他動、ガ四)㊀うけとって引きつぐ。㊁あとを引受ける。

うけつ・つけ〔受附〕(名)㊀受けつけること。とりつぐこと。㊁官署などで、訴訟・請願等を受入れること。又、來人の用件をまづ受け聞くこと。又、その場所、その人。**—がかり**〔受附掛〕(名)受附の擔任者。**—ちょう**〔受附帳〕(名)受附掛で受附けた書類・事項・氏名・年月日などを書き込む帳簿。**—ばんどう**〔受附番號〕(名)受附けた書類の順位を追うて附ける番號。

うけつ・ける〔受附ける〕(他動、カ下一)〔うけつく〕の口語。

うけつ・ぼ〔受壺〕(名)掛金をはめる戸締用の

うけつ・もの〔受物語〕(名)【文】上田秋成の小説。明和五年(一七六八)作者三十五歳の時の作で、日本及び支那の古典から脱化した妖怪・變化に關する材料を取扱つたもの。五卷三冊。

うけどころ〔請所〕(名)鎌倉時代以後、莊園に置いた職掌で、莊園管理の費用を負擔し莊司に對して一定の年貢を納めた職。

うけとり〔受取、請取〕(名)㊀うけとること。㊁うけとった、ことをしるした文書。領收書。㊂ひきうけた仕事。**—かんじょうそうば**〔受取勘定相場〕(名)【經】外貨建爲替相場。對米二十五ドルといふ類。**—けいさん**〔受取計算〕(名)【經】外國爲替相場の計算法の一。自國の貨幣を標準として計算すること。**—しごと**〔受取仕事〕(名)うけおうてするしごと。**—そうば**〔受取相場〕(名)【經】外國爲替相場の一種で、邦貨一定額に對して、外貨幾何といふ如くいひ表はされた相場。**—てがた**〔受取手形〕(名)㊀江戸時代に切米又は御借米を受取る際に用ひた手形。㊁〔法〕自分が受取るべき權利のある手形。**—ぶしん**〔受取普請〕(名)請負とする工事。**—わたし**〔受取渡〕(名)受取をして渡すこと。うけわたし。㊂請負師が請負つた仕事を更に他の者に請負はせること。

うけ・とる〔受取る・請取る〕(他動、ラ四)㊀手に收める。領收する。㊁うけあふ。ひきうける。㊂信ずる。合點する。

うけながし〔受流〕(名)うけながすこと。

うけなが・す〔受流す〕(他動、サ四)㊀柳りこんで來た刀を輕く受けて他へかはす。㊁ほどよくあしらふ。さりげなくあしらふ。

うけなわ〔浮子縄〕(名)うけ(浮子)につけて水に投入れておく網綱。餌をつけた釣のある幾條かの釣絲を取りつけて魚を捕るに用ひる。

うけ・に〔請人〕(名)引請に立つ人。保證人。

うけ・の・おの〔泛子絡の〕(枕)「浮かびの枕詞。

うけ・のく〔穿除く〕(自動、カ四)穴があく。

うけ・のみたま〔倉稲魂〕(名)【神】うかのみたま(宇迦御魂)。(古語)

うけ・はな〔建墓〕(名)【建】墓の上の露盤の上、九輪の下にある花形の飾(多く八葉)の上を向いてゐるもの。「ふこと。

うけ・はらい〔受拂〕(名)受取ることと支拂

うけ・ばり〔受張〕(名)敵より攻撃を受ける時、その力の頭部に及ぶを避ける爲、兜の鉢裏を革又は布で張り、頭の直接に當にあたるを防ぐもの。

うけ・ばり〔浮張〕(名)うけばこ。ひきうけ。

うけ・ばる〔受張る〕(他動、ラ四)㊀引受其の他を浮かせて張ること。

うけ・ばる〔受張る〕(他動、ラ四)㊀存分にして憚らぬ。晴れやかに振舞ふ。(古語)

うけ・はん〔請判〕(名)請人の證としての判。保證の判。

うけ・ひ〔受樋〕(名)〔受引く〕(他動、カ四)承諾する。うべなふ。うけがふ。

うけ・ひく〔受引く〕(他動、カ四)承諾する。うけがふ。

うけ・ぶね〔浮子船〕(名)網の所在を知る爲に、うけ(浮子)として網綱につける船。(古語)

うけ・ぶね〔請文〕(名)承はった旨を記した文書。「うけしょ。

うけ・ぶみ〔受返答〕(名)(うけ・こたへ。

うけ・へんとう〔浮彫〕(名)うきあがり。

うけ・ぼり〔受身〕(名)㊀他より動作を受けること。㊁他より攻撃を受けること。所相。動詞に助動詞「る」「らる」を添へてあらはす。

うけ・もち〔受持〕(名)うけもつこと。擔當。擔任。

うけ・もち・の・かみ〔保食神〕(名)【神】五穀を司る神。豐受姫神。又、大気津比賣(おほけつひめ)姫神。

うけ・もつ〔受持つ〕(他動、タ四)㊀身に引受けて事を行ふ。ひきうける。擔當する。㊁手に受けて持つ。

うけ・もどし〔請戻〕(名)負又は抵當の差入物を取

うけ・もどす〔請戻す〕(他動、サ四)うけだす。「返すこと。

うけ・もん〔浮文〕(名)浮織物の古名。浮織或は浮織。

うけ・やど〔請宿〕(名)奉公人の身元を引受ける家。雇人口入所。

うけら〔威衣〕(名)鎧の裏に貼つた織物又は革。なめし。

うけら〔朮〕(名)【植】おけら。

うけら・が・はな〔朮花〕(名)【文】加藤千蔭の歌文集で、享和二年(一八〇二)刊行。和歌には四季・戀・雜歌・雜體・長歌の部を立て、文章は二十五章を載せてゐる。七卷。

うける〔受ける・請ける〕(他動、カ下一)〔うけ・く〕の口語。

うけ・わし〔詛しげ・しげ〕(形、二)のろはしさ。

うけ・わしげ〔詛しげ〕(名)うけはしい樣子。**—さ**〔詛しさ〕(名)うけはしいこと。又、その程度。

うけ・わたし〔受渡〕(名)受けると渡すこと。うけとりわたし。**—せめ**〔受渡攻〕(名)【經】賣方が賣方に手持品の無いのを看破して現品の引渡しを要求して賣方を苦しめる相場戰法。**—だいこうきかん**〔受渡代行機關〕(名)【經】株式短期取引で、賣買兩者に對し代受渡を行ひ、取引の圓滑を期する機關。即ち東株及び大株代行會社の類。

うけん〔右舷〕(名)船首に向かつて右の方のふなば。**—ちょく**〔右舷直〕(名)右舷の當直。

うけん〔辻言〕(名)時世や事情に疎い言。

うけん〔襁綱〕(名)「うんげんし」の訛。(古語)

うこ〔烏滸〕(名)(おこ)。

うこ〔雨後〕(名)雨の降つた後。雨あがり。**—の筍**(句)相繼いで發生する物事に譬(ていふ。

うご〔海髪〕(名)【植】おこ。

うご〔烏江〕(名)【地】Wu Kiang支那安徽省和州城の東北。揚子江左岸の古蹟。項羽の敗戰して自ら刎ねた所。

うごう〔禹貢〕(名)【文】書經中の一篇。支那上古の名君禹が洪水を治めて九州を分ち、貢賦を定めたことを記したもので、夏書の始におかれてゐる。

うごう〔烏合〕(名)不規律に集まること。**—の衆**(句)規律統一なき群集。

うごう・うが〔嗽ふ〕(自動、ハ四)うがひをする。くちそそぐ。(古語)

うごう・ご(名・副)うごめくさま。うざうざ。

うごう・しゅんすう〔禹行舜趨〕(名)(荀子非十二子篇の句)表面の威儀は聖人のやうであるが、これにかなふ德のないこと。

うごかす〔動かす〕(他動、サ四)㊀動くやうにする。㊁感動させる。

うごぎ〔五加〕(名)【植】五加科の落葉灌木。高さ約二米。小刺を逆生し、葉は互生し、五片又は七片の掌狀複葉。小葉は倒卵形で、基部は楔形に細まり、鋸齒を有する。冬、繖形花序に小黄綠色花を簇生し、

花後、黒色の漿果を結ぶ。繖葉は食用となる。

うごき〔動〕(名) ㊀動くこと。㊁人員の異動。**—げ**〔動げ〕(名) 動く様子。**—が取れぬ**(句) 場所が狭くて儘な動かすことができない。

うごく〔動く〕(自動、カ四) ㊀位置をかへる。㊁動揺する。㊂感動する。㊃心がかはる。㊄驚く。聽く。聽く。㊅動搖する。**—かいが**〔動繪書〕(名)【美】音樂の原理に基づき、動的な形と色彩の變化との相互關係を現はさうとする繪畫。**—かべ**〔動壁〕(名) 芝居の舞臺装置に車輪を備へ、臨時、舞臺の場面を變化させるしかけ。

うごつく〔動きつく〕(自動、カ四) うごく。

うこっけい〔烏骨雞〕(名)【動】おこっけい。

うごなわる〔集侍はる・集はる〕(自動、ラ四) より集まる。(古語)

うこま(名)【植】:まる。

うごめき〔蠢〕(名) うごめくこと。

うごめく〔蠢く〕(自動、カ四) もぞもぞと動く。やや動く。

うごもつ〔埋つ〕(自動、タ四) 土が高くなる。

うごろもる〔埋る〕(自動、ラ四) うごもる。

うごろもち〔鰐〕(名)【動】むぐらもち。

うこん〔鬱金〕(名) ㊀【植】薑黄科の多年生草本。根莖は肥大して樹黄色を呈し、葉は莖生し、形芭蕉に似る。夏秋の候、葉叢の中心に花穗を生じ、卵形白色苞内に三四箇づつの黄色筒斗狀脣形花を開く。根莖を醫藥・香料又は染料とする。江戸時代に支那から渡來したもの。㊁うこんいろ。**—いろ**〔鬱金色〕(名)「うこん」の根莖で染めた黄色。**—こ**〔鬱金粉〕(名)「うこん」の根莖を粉末にした黄色の染料。**—ぞめ**〔鬱金染〕(名)「うこん」の黄色で染めたもの。

ばな〔鬱金花〕(名)【植】樟科の落葉喬木。高さ三米餘に達し、葉は卵形又は楕圓形をなす。尖端淺く分裂し、裏面に淡褐色の長毛茸を密生する。二三月の頃、葉に先だつて黄色の小花を圓錐花序に綴り、花後、球果を結ぶ。だんこうばい。**—もめん**〔鬱金木綿〕(名) うこん染の黄色の木綿。

うこん〔右近〕(名) 右近衛府の略。**—えふ**〔右近衛府〕(名) 右近衛の官廳で、左近衛府とともに、禁兵を統率し、宮闕に奇侍し、禁中を警衛し、朝儀に威儀を備へ、行幸に際し供奉警護の任に當ることを掌つた役所。昔、上西門の側にあった。**—しょうげん**〔右近將監〕(名) 右近衛府の職員。少將の下、將曹の上。**—にんぎょう**〔右近將人形〕(名) 木又は紙等でつくり、黄色の衣紋を冠つた人形。江戸時代に右近源左衛門の造り始めたもの。**—のじん**〔右近陣〕(名) 昔、宮中の儀式の時、右近衛が月華門内に警衛をした所。**—のたいふ**〔右近大夫〕(名) 右近將監の五位に進んだもの。**—のたちばな**〔右近橘〕(名) 紫宸殿の階下の西方に植ゑた橘で、昔、右近衛府で、その培養を擔當したからいふ。**—の司**〔右近司〕(名) ㊀(うこんえふ)。㊁御座所近く侍して警衛に當った近衛府の武官。

うさ〔憂さ〕(名) ういことをいふ。

うさい〔于思〕(名) 髮の多いこと。自分髮のあること。

うさいがき〔有財餓鬼〕(名) ㊀【佛】餓鬼の中で、果報稱、すぐれ、時としては飽食し得るもの。㊁慾深い人を罵つていふ語。けちんぼ。守錢奴。

うさいかく〔烏犀角〕(名)【藥】黑色の犀角。子供の熱さましに用ひる。

うさいたい〔烏犀帶〕(名) 裝束の腰帶の一種。「烏犀角を飾にしたもの。

うさいうさい(名・副) 小さいものが集まって、うごめくさま。

うさぎ〔兎・兎〕(名) ㊀【動】齧齒類の獸。耳長く、前脚短く、後脚は長く。上唇は缺けて、長い髭がある。暴動は敏捷活潑で、繁殖力は頗る大である。肉は美味で、毛は筆につくる。家兎(かとう)と野兎とある。㊁江戸時代に遊郭に通った遊客の稱。人目を忍ぶ爲、羽織をかぶつたる姿が兎のうぐいすったのに似てゐるからいふ。㊂紋所の名。**—うま**〔兎馬・驢〕(名)【動】馬の屬の屬。形、馬に似て小、耳長く兎のやうである。全身暗褐色で背に黑いすぢがある。性溫順で鈍いが、よく物を負ふ。ろば(驢馬)。**—がり**〔兎狩〕(名) 野兎を狩りとること。**—とび**〔兎飛〕(名) 兩足を縛りあはせ、兩手を地につけて飛ぶ遊戯。**—ばね**〔兎跳〕(名) 足に力を入れて、兎のやうに前へ飛ぶこと。**—びょうほう**〔兎兵法〕(名) つまらぬ謀略を施して却つて失敗すること。**—まま**〔兎馬・驢〕(名)【動】うさぎうまの古語)。**—みみ**〔兎耳〕(名) ㊀耳の長いこと。㊁よく人の隠事を聞き出すこと。又、その人。**—むすび**〔兎結〕(名) 紐の結び方。兎の耳のやうに長いわなを左右に結び出したもの。**—死すれば狐之を悲しむ**(句) 同類に不幸があれば、緣者が之を悲しむ。**—の登坂**(句) 巧みに坂を登る譬。**—の書**(句) イソップ物語にある兎と龜との話。**—の養**(句) 物事のほつぽつ切れて續かぬこと。

うさじんぐう〔宇佐神宮〕(名)【神】天分縣宇佐郡宇佐町にある官幣大社。祭神は應神天皇・神功皇后及び比賣神。宇佐八幡宮。

うさずかい〔宇佐使〕(名) 昔、天皇の御即位及び國家の大事に、宇佐神宮に幣帛を奉らせられた勅使。

うさぞつく〔群きつく〕(自動、カ四) 細かい蟲などが「群り動く。

うさぎらし〔憂晴〕(名) 鬱氣を散ずること。きばらし。きさんじ。

うさる〔失さる〕(自動、ラ四) 失せる。なくなる。

うさん〔胡散〕(名)(字の廣東音)怪しむべき事。ふしん。うろん。**—がお**〔胡散顔〕(名) ふしぎらしい顔つき。**—くさし**〔胡散臭〕(名)(字の廣東音)茶家に用ひる天目茶碗。

うさん〔烏散〕(名)(字の廣東音)怪しむべき事。ふしん。うろん。**—がお**〔烏散顔〕(名) ふしぎらしい顔つき。**—くさし**〔烏散臭〕(形、二) 疑はしい。怪しくて油斷が出來ない。**—もの**〔胡散者〕(名) あやしい人。いかがはしいもの。**—らし**〔胡散らし〕(形、二) うさんくさい。怪しい。

うし〔牛〕(名) ㊀【動】反芻類の獸。脚短く體肥えて兩角を有し、尾は長くて細い。皮膚に短毛密生し、黑・白・褐等の諸色がある。性質は遲鈍だが、力強く田を耕し車を牽くに使役し、肉及び乳は食用とし、皮・骨・角なども種種の用に供せられる。㊁うしばり・牛綱。㊂昔、戦陣に用ひた掩護物で、竹木でつくられた。不必要な諸勞を買ふ人。**—驚くばかり**(句) 物の黑いさま。**—つかむばかりの暗がり**(句) 非常に暗い闇夜。**—に汗し棟に充つ**(句)(柳宗元の陸文通墓表の句) 藏書の多いことにいふ。汗牛充棟。**—に經文**(句) いくら說き聞かせても、何の效もない譬。**—に對して琴を彈ず**(句)(祖庭事苑の句) 前條に同じ。**—にひかれて善光寺參り**(句)(昔、信濃の善光寺の近くに老婆があつたが、嘲して置いた自分の布を隣家の牛が角にかけて走つたのを追ひ、知らぬ中に善光寺に駈け込んで其の參詣なることを知つたと云ふ故事)他人に誘はれて偶然に或所に行くことにいふ。**—にも馬にも踏まれず**(句) 無事に成長して一人前になる。**—の歩**(句) 歩みのおそく、ぎゅうのほ牛歩。**—の一散**(句) 歩みのおそく、鈍な人の、動もすれば直ちやり進むにいふ。**—の小便**(句) 長き に過ぎることの譬。**—の涎**(句) 單調で長長しいことの譬。**—は嘶き馬は哮え**(句) 常に騒がしいことの譬。**—を馬に乘りかへる**(句) にぶい者を捨てて はしこい者にかへることの譬。又、劣つてゐるものを捨てて勝れたものにとりかへることの譬。**—を食ふの氣**(句)(子の句)幼にして非凡の志のあること。

うし〔大人〕(名) 領主・貴人・師匠・學者の敬稱。

うし【齵歯】(名)(正しい字音は「くし」)むしば。

うし【丑】(名)㊀十二支の一。㊁方角の一。北と東との中間。㊂昔の時刻の名。今の午前二時。**—おき**【丑起】(名)丑の刻に起きること。

うし【雨師】(名)【神】雨を降らす神。雨を掌る神。

うし【憂し】(形シク)思ふままにならぬものうい。悲しい。つらい。心苦しい。いやである。

うし【蛆】(名)蠅類の幼蟲。腐敗物・排泄物を食して生育する。體形圓筒狀で、多くの關節よりなり、脚を有せず、蠕動する。

うじ【氏】(名)㊀昔、家家の血統に從って朝廷から賜はった苗字。家筋を分つ符の名目。㊁家の筋目。㊂家がら。家系。**—無くして玉の輿**(句)婿入は家柄が賤しくても、容貌が美しくて貴人の目にとまって誂を得れば貴い地位になる。**—よりそだち**(句)姓氏の貴さより人格的教養が大切である。

うじ【氏】(接尾)苗字に添へて敬意をあらはすに用ひる語。

うしあぶ【牛虻】(名)【動】虻の類。體・黑色で、胸背に五條の縱列褐線、腹背には一條の灰線があり、帶黃褐色の翅を有する。夏、林の中に多く棲息する。きあはせて戰はせその勝負を觀る戲。闘牛。

うしい……う【雲林院】(名)(うりんいん)(雲林院)。

うしうし(名・副)ためらふさま。もぢもぢ。

うしうしど【氏人】(名)(うじびと)。

うしうしま【牛馬】(名)㊀牛と馬と。牛又は馬。㊁【動】馬科の獸。鹿見島縣種子島に產する。毛細く短く、少しちぢれたもの。

うしお【潮】(名)㊀海水が日月殊に月の引力によって、時を定めて或は高くなり或は低くなること。高潮するものを「あげしほ」「さしししほ」「みちしほ」といひ、低落するものを「ひきしほ」「さげしほ」「おちしほ」といふ。㊁海水。㊂(うしおに)(潮煮)で—**かぜ**【潮風】(名)(しおかぜ)(潮風)。**—ぞめ**【潮染】(名)浴衣の中形染の一。帶紫色の鮮美な青色。**—に**【潮煮】(名)鯛などの肉又は骨を水で煮て、鹽で味をつけた吸物。

うしおうもの……う【牛追物】(名)小牛を追うて馬上より射る鎌倉時代の騎射の一。

うしおに【牛鬼】(名)牛の形の妖怪。**—じま**牛鬼島(名)牛鬼が住んでゐるといふ想像上の島。

うしかい(いう)【牛飼】(名)㊀牛を飼ふ人。牛をつかふ人。㊁(うしかい)わらわ)。**—わらわ**【牛飼童】(名)牛車の牛をつかふ人で、頭を垂髮にして狩衣を着、童體をなすもの。

うしかけ【牛駈】(名)昔、陰暦五月五日、大阪北野邊で、野飼の牛を放つて遊ばせた行事。うしのやぶいり。

うしかた【牛方】(名)牛を使ふ人。牛車を扱ふ人。

うしかだゆう【宇治嘉太夫】(名)【人】三絃の名人。上方淨瑠璃軟派の代表者。古淨瑠璃嘉太夫節の祖。和歌山の人で、伊勢島宮內の門人。加賀掾を稱した。竹本義太夫の先輩で、井上播磨の藝風を範とし、之に謠曲・狂言・小歌などを加味して一流を開き、優美・豐麗を生命とした。當時の太夫中で、自作の淨瑠璃があるのは此の人のみである。正德元年(一三七一)沒。年七十七。

うじがみ【氏神】(名)㊀氏の祖先として祭る神。㊁氏に由緣ある神。藤原氏の春日の類。㊂人人の住む土地の鎭守の神。うぶすながみ(產土神)。

うしがやつり【牛莎】(名)【植】莎草科の草本。葉は劍狀で、花穗に小擔圓狀の小穗を著け、茶褐色の花を開く。

うじかわ【宇治川】(名)【地】京都府南部の南部を流れる川。源を琵琶湖に發し、上流を瀨田川といひ、宇治に入つて宇治川といひ、久世郡淀町に至つて淀川と稱する。流程八〇粁。元慶元年正月、佐佐木高綱・梶原景季の先陣爭が宇治橋の近くの水上であつたので名高い。

うしくさ【牛草】(名)【植】禾本科の一年生草本。高さ二〇糎位。莖は叢生して纖長、葉は線形。花は淡綠色で、八九月頃開き、葉腋に小穗狀花序をなす。

うじくさ【蛆草】(名)【植】蓼科の蓼本。高さ約八〇糎。葉は羽狀複葉で、小葉は長楕圓形で先尖。夏の末、梢頭・葉腋から花莖を抽き、蝶形で、淡黃暈を帶びた白色の小花を總狀花序に綴る。花後、莢を結ぶ。

うじくらい【氏位】(名)門地と位階。

うじぐるま【牛車】(名)㊀牛に挽かせる荷車。㊁牛に挽かせる屋形車。

うじくろうど【氏藏人】(名)氏氏に屬する六位の藏人の第三席のもの。藤藏人・源藏人など、その氏の名を冠らせて稱する。

うじくわ【牛鍬】(名)ちからすき。犂。

うじけいず【氏系圖】(名)家筋。家がら。

うじこ【氏子】(名)㊀氏神の末裔。うぢびと。㊁ぶすな神鎭守の地に住む人。**—じゅう**【氏子中】(名)同一の氏神を祀る人人。**—そうだい**【氏子總代】(名)氏子中から總代に選ばれた人。

うしこでい【牛健兒】(名)(こでい)は「こんでい」(健兒)卽ち年若の人の意。(うしかいわらわ)。

うじこのかみ……う【氏子上】(名)外部に對する氏の代表者で、又、內部に於ける氏の統率者。宗家の長として氏神の祭祀を司り、氏人の諮詢・斷罪・氏內の庶政を專行し、職時には氏人を率ゐて出征の事に當つたもの。

うしころし【牛殺】(名)㊀牛を屠殺する職業のもの。㊁【植】蕊微科の落葉小喬木。葉は菱狀倒卵形で先尖、緣邊に鋸齒がある。四五月の頃、厚狀圓錐花序を枝端に頂生し、白色五瓣の花を綴る。花後、小豆大の果實を結び紅熟する。材は堅く、鑑の柄とし、又曲げて牛の鼻木とするから、「牛殺」の名が生じたかまつか。

うしさき【牛裂】(名)昔の極刑の一。罪人の手足を二頭の牛に繫ぎ、牛を左右に駈けさせ、罪人の身體を引裂かせた慘刑。

うしじゅういものがたり……う【宇治拾遺物語】(名)【文】鎌倉時代に出た傳說物語。建保年間に成立。著者不明。物語の說話は百九十六篇で、卷談・奇聞をそのままに書いてゐる。文章に一種の新味があり、語彙用語に著しく近世的のものが加はり、近世語への過渡時代を示してゐる。十五卷。

うじじゅうだいよう……う【宇治十帖】(名)【文】源氏物語五十四帖の後續半帖で、八の宮が山城國宇治に住んでゐたことから書き始めた橋姫・椎本・總角・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉の十帖。

うじすじょう……う【氏素姓】(名)身の素姓。家柄。

うじだいなごんものがたり……う【宇治大納言物語】(名)【文】こんじゃくものがたり(今昔物語)の異名。

うしち【烏髭】(名)【佛】(梵 Usnisa の略)佛の三十二相の一。頂骨隆起して髻のごとき肉髻。

うしち【氏地】(名)氏神の鎭守なさる領地。

うしちゃ……【宇治茶】(名)京都府宇治地方から產出する茶。

うしつかい……っ【牛使】(名)(うしかい)〈牛飼〉。

うしつき【牛附】(名)(うしかい)〈牛飼〉。(古語)

うしつく【自動、カ四】うじうしする。ためらふ。

うじでら……う【氏寺】(名)中古、諸名家が、一族の「氏福と榮達とを祈る爲に歸依した寺。

うしとら【丑寅・艮】(名)東と北との中間に當る方角。鬼門。**—よけ**【丑寅除】(名)きもんまよけ(鬼門避)。

うじな【宇品】(名)【地】廣島市の外港。昭和七年、廣島港と改稱。廣島市の海は太田川が流して來る土砂の爲に淺海となり、船舶の碇泊地として不便が少ないので、明治十七年、宇品築港工事を起こした。瀨戸內海の商船港地であり、日清・日露戰役の際、ここから軍隊を輸送した。

うじな【貉】(名)【氏名】(名)【動】むじな。(古語)

うしな【失】(名)(他動、四)(うしなう)の口語。

うしない……う【失ない】(名)失ふこと。損害。

うしなう……う【失ふ】(他動、四)(うしない・はひ・はふ・二)失ふ。

うしにんぎょう〔宇治人形〕(名) 京都府久世郡宇治町から製出する人形。茶の木を材料とし、刀法・彩色共に素良人形に似て、多く茶摘女のやうな形に造られてゐる。

うしぬすびと〔牛盗人〕(名) ㊀牛を盗む賊。㊁無口で動作の遲鈍な人を罵っていふ語。㊂〔動〕いしもち(石持)。㊃〔文〕能の狂言。大名の牛を盗んだ父を訴へた子供が、その賞として父の生命を許されるといふ筋。

うしのあじろのしょうじ……〔宇治網代障子〕(名) 平安大内裏、清涼殿内の弘徽殿の上局の前にあった網代を張いたついたて。

うしのあゆみ〔牛歩〕(名) 牛があるくこと。轉じておそくあるくこと。

うしのう〔失ふ〕(他動、ハ四) ㊀ものなくなる。㊁にがす。㊂殺す。死なす。㊃落す。忘れる。

うしのおさ〔氏長〕(名) 氏のかみ。

うしのかみ〔氏上〕(名) (うじのちょうじゃ)。

うしのきさき〔氏墓〕(名) 往古、祭召除目(まつりめしのだめく)の際、氏の長者がその氏人の任官を申請したこと。(古語)

うしのけ〔牛毛〕(名) ㊀牛の體にはえた毛。㊁數の多いことに譬へる。

うしのこずの〔牛小角〕(名) 牛の骨の中にある堅い骨。藥用とする。

うしのした〔牛舌〕(名) ㊀〔動〕したびらめ(鞋魚)。㊁〔植〕(いぬびわ)天仙果。

うしのしるし……〔氏印〕(名) 氏の上御印ち族長の證として朝廷から賜はった刀。(古語)

うしのすけ……〔氏助〕(名) 氏上の副。(古語)

うしのそう……〔氏宗〕(名) 同じ氏の嫡統の家。本家。(古語)

うしのそうめん……〔牛索麵〕(名) 【植】(くれなかしかうち)(根無葛)。

うしのたま〔牛玉〕(名) ㊀牛の額に生じた毛のかたまったやうなもの。その中に固まったしんがある。形は圓い。牛玉を牛王と誤って寺院などの寶物とする。㊁(ごおう)(牛黄)。

うしのちち〔牛乳〕(名) 牛の乳房から出る乳汁。ぎうにう。

うしのちょうじゃ……〔氏長者〕(名) 氏上の別稱。宗家として同族を率ゐて朝廷に仕へる者。後には宣旨を賜はって氏の上又は氏の長者と稱し、藤原・橘の諸氏に賜はった。源・平・藤・橘の諸氏に賜はった。源氏の攝關となったもの及び源氏の征夷大將軍となった者のみが之を稱した。

うしのつのつき〔牛角突〕(名) (うしあわせ)。

うしのつのつきあい……〔牛角突合〕(名) ㊀牛が角をつきあふこと。㊁人の互に相爭ふこと。

うしのつのもじ〔牛角文字〕(名) (其の形、牛の角に似たるなるからいふ)「いしの字の異稱。延政門院の御歌に「二つもじ、牛のつのもじ、すぐなる文字、ゆがみ文字とぞ君はおぼゆる」(徒然草。

うしのときまいり……〔丑時參〕(名) 嫉妬深い女が、嫉ましく思ふ人を詛ひ殺さうとて爲に、丑の時(今の午前二時)に頭上に蠟燭を點して異形の姿をなし、詛ふ人の横形を神木に打附けること。七日目の滿願の日には、其の人が死ぬと信ぜられたのときまいり。

〔詣時丑〕

うしのとき〔丑時〕(名) 午前一時。

うしのとき〔牛時〕(名) 【植】(ぎうしべ)の實。

うしのはなぎ〔牛鼻木〕(名) 牛の鼻に通す木。

うしのはね〔牛骨〕(名) 素性のわからぬ人。

うしのわきいらつこ……〔菟道稚郎子〕(名)【人】應神天皇の皇子。仁德天皇の御弟。博く典籍に通じ、兄君に帝位を讓る爲に遂に自殺遊ばされた。

うしはえ……〔牛蠅〕(名) 【動】雙翅類の昆蟲。虻と同じく全身に黑毛密生し、晝晝に黃白色の毛がある。牛の皮膚に產卵し、又、その血を吸ふ。

うしはく〔領く〕(他動、カ四) 我が有とする。土地を領有する。(古語)

うしばくろう……〔牛博勞〕(名) 牛のよっあしを相し、又は牛の仲買をする人。

うしはこべ〔牛蘇蘭〕(名) 【植】石竹科の越年生草本。莖は軟かで、基部は横臥する。葉は鋭頭全緣の卵形で、脇、聚繖花序に白色の五瓣花を開き、花後、蒴果を結ぶ。はこべ鹽の原料・小鳥の飼料とする。

〔べこはしう〕

うしばし〔宇治橋〕(名) ㊀【地】三重縣宇治山田市の今在家町から皇大神宮の境内に架けた橋。㊁京都府久世郡宇治町にある橋。大化二年(一三〇六)道登が勅を奉じて架設したもの。「ひきばり。

うしばり〔牛梁〕(名) 重いものを受ける梁。うしびと……〔氏人〕(名) 氏を構成する人的要素。氏(今の家)を形成して生活し、氏神の祭祀に奉する物品を給付し、戰時には兵士として氏上に從ひ出征するもの。

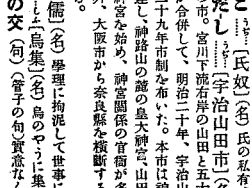
うしぶみ……〔氏文〕(名) 氏の出處や祖先の功績中のあれを防ぐといふ。

うしべや〔丑紅〕(名) 寒の丑の日に買ひ紅で、口

うしべや〔牛部屋〕(名) 牛を飼っておく室。

うしほとけ〔牛佛〕(名) 佛がかりに牛の形になったもの。(古語)

うしまつり〔牛祭〕(名) 京都市右京區太秦廣隆寺で陰暦九月十二日の夜(今は十月十二日)に行ふ行事。承和十四年(一五〇七)、慈覺大師歸朝の時、海路の平安を祈ったと傳へられる摩多羅神を祭る神事で、寺中の行者が異樣の服裝を着して牛に乘りつつ、伺殿をめぐり、上宮王院の前で懺悔と天下安穩・寺家泰平・惡病退散の祭文を讀む。


〔りつましう〕

うしみつ〔丑三つ〕(名) ㊀昔の時刻の名。丑の時を四刻に分ち其の第三に當る時。今の午前三時。(丑一つは午前一時、丑二つは午前二時、丑三つは午前三時、午前四時は寅一つ。㊁よなか。深更。

うしむし〔蛆蟲〕(名) ㊀【動】うじ(組)。㊁他人を罵っていふ語。

うしもの〔鵜自物〕(副) 鵜の知きさまして。鵜は首を水中に入れるから「うなれつく」(頸根突)に冠ちせる。(古語)

うしや〔牛屋〕(名) ㊀うしごや(牛小屋)。㊁牛を飼って賣買する人。㊂牛肉を賣る家。牛肉屋。

うしゃあがる……〔自動、ラ四〕(「失せ上がる」の轉)「居る」「往く」を罵っていふ語。

うしゃうじゃ〔名・副〕 ㊀小さな蟲などが、多くうごめきあるさま。㊁つまらぬことをくどくどしく述べいふさま。

うしゃく〔烏鵲〕(名) ㊀〔動〕かささぎ。㊁〔動〕かささぎ。

——きょう……〔烏鵲橋〕(名) (古語)(神奴・官奴の對)

うしやっこ……〔氏奴〕(名) 氏の私有する奴隸。

うしやまだし……〔宇治山田市〕(名) 【地】三重縣南部の市。宮川下流右岸の山田と五十鈴川左岸の宇治とが合併して、明治二十年、宇治山田町となり、明治三十九年市制を布いた。本市は神宮所在地として繁榮し、神路山の麓の皇大神宮、山田の高倉山の豐受大神宮を始め、神宮關係の官衙が多い。參線・參宮線の外、大阪市から奈良縣を橫斷する參宮急行電車がある。

うじゆ〔汪儒〕(名) 學理に拘泥して世事にうとい學者。

うしゅう……〔烏集〕(名) 烏のやうに集まること。

うしゅう——の交〔朋〕(名) (管子の句)實意なく、利慾の

爲にする圓體的の交遊。

うじゆうじ……【氏人】(名)(うじびと)。

うじゆうきつ……【温州橘】(名)【植】㊀(うんしゅうみかん)。(古語) ㊁橘の變種で、蜜柑より大きく、味の酸くにがいもの。

うしよ【羽書】(名) うげき羽檄。

うしやう……【有生】(名) 生命ある物。生物。

うしやう……【有性】(名)【佛】佛となる素質のあるもの。佛性あるもの。

うしやう……【右相】(名) 右大臣の異稱。

うしやう……【羽觴】(名) さかづき(杯)。**―を飛ばす**(句) 宴會をする。

うじやう……【有情】(名)【佛】此の世に生活して情を有するもの。木石等の非情のものに對し、一切の人間・鳥畜類を含む。

うじやう……【島城】(名)【地】(「島」は「金島」で、日の意。旭川のほとりにあるからいふ)岡山城。

うしやうこく……【右相國】(名) 右大臣の異稱。右相。

うしやうしやう……【右少將】(名) 右近衛府の

うじやうしやう……【右丞相】(名)(うしやう)(右相)。

うじようふくよう……【羽狀複葉】(名)【植】葉柄の左右兩側に二枚以上の小葉が配列して、鳥の羽の狀をなすもの。先端に一小葉あるものを奇數羽狀複葉、無きものを偶數羽狀複葉といふ。

うしようべん……【右少辨】(名)「べん」(辨)の條を見よ。

うじようみやく……【羽狀脈】(名)【植】網狀脈葉の一。一條の主脈の左右に枝脈を出し、更に分れて細脈となつて鳥の羽の狀をなすもの。梅・櫻の葉の類。

うしよく……【廬嚔】(名) 廬嚔の自由を缺くこと。

うしよくとく【有所得】(名)【佛】物事に執著して

うしらん【鳥籠欄】(名) 黑い罫紙。雪・支那で女が艷書を書くに用ひたもの。

うしろ【後】(名) ㊀前の反對。しりへ。背後。あと。㊁せ。せなか。㊂見えぬところ。かげ。㊃下襲(したがさね)。

うしろ【羽狀脈】(名)【植】網狀脈葉の一。一條の主脈の左右に枝脈を出し、更に分れて細脈となつて鳥の羽の狀をなすもの。梅・櫻の葉の類。

「廬嚔の自由を缺くこと。

うしろ【有所得】(名)【佛】物事に執著して

うしろ【後】(名) ㊀前の反對。しりへ。背後。あと。㊁せ。せなか。㊂見えぬところ。かげ。㊃下襲(したがさね)。

ゑぐり凹めたもの。物をその中に入れて杵で搗く。「からうす」「すりうす」「ふみうす」等がある。(春)
㊁上下二箇の凹形の石をあはせ、其の面に齒をきざみ、其處に穀粒を入れて、上の石を回轉して之を粉にするもの。ひきうす(磯日)。陰陽相合ふこと。珍機相合ふこと。**―と杵**(句)前條に同じ。

うす[ウスウスルル]**失す**(自動、サ下二)㊀見えなくなる。なくなる。㊁死ぬ。㊂滅びる。消える。おちる。

うす[薄淡][接頭]うすい意をあらはす語。**―墨**

うず[髻華](名)昔、草木の枝や造花を冠や髪にさして飾としたもの。かざし。(古語)

うず[雲珠](名)㊀唐鞍のしりがいの組金に著く雲珠の形をした飾。㊁うずくち。**―くら**[雲珠鞍](名)雲珠の飾をつけた鞍。からぐら。**―ざくら**[雲珠櫻](名)【植】櫻の一種。淡紅色で單瓣。

うず[烏頭](名)㊀「とりかぶと」の根。有毒で麻醉劑に用ひる。周圍についてゐるものを附子(ぶし)といふ。㊁太刀の柄頭に銀で鴛鴦の頭を作りつけたもの。

うず[渦](名)㊀螺旋形にめぐる水流。㊁渦の形をした模樣。**―しお**[渦潮](名)渦卷く潮。(古語)

うず[珍](名)貴び賞美する意。「―のみてぐら」。(古語)**―はた**[珍機](名)よい織物。美しい織物。(古語)

うず[堆][接頭]うづだかい意をあらはす語。(古語)

うずあお[薄礎](名)精巧でない薄い無文織物の狩衣。表裏共に白。

うすあお[薄青](名)㊀たては白、よこは青の織色。㊁襲(かさね)の色目の一。表裏青、裏は青、又は表裏青、裏は青。若しくは表裏共に薄青。**―の―もんど**[薄青文濃](名)薄青で模樣を織り出した織色。

うすあおげ[薄青毛](名)(みずあお)(水青)。

うすあかり[薄明](名)㊀ぼんやりさす光。㊁日出前・日没後等に天空のあかるいこと。

うすあきない[薄商](名)小額の賣買。

うすあけ[薄緋](名)西蜀で染めたうすい緋の色。五位以上の人の着する袍の色目。

うすあばた[薄痘痕](名)目に立たぬ程のあばた。うすいも。

うすい[雨水](名)㊀あまみづ。㊁二十四氣の一。陰曆で正月の中(ちゅう)。陽曆二月十九日頃。

うすい[薄い][形][うすし]の口語。

うずい[蹲居](名)うづくまってゐること。(古語)

うすいた[薄板](名)㊀うすい板。㊁薄い地合の織物。厚板の對。㊂花瓶の下敷の方形の蓮。㊃經木の巾の廣いもの。

うすい―とうご[白莚](名)【植】すのき。

うすい―とうげ[碓氷峠](名)【地】群馬縣碓氷郡と長野縣北佐久郡との境にある山。舊道に沿ふ碓氷峠は高さ一二〇〇米。中山道の險路。日本武尊が東征の時弟橘媛を追慕せられた處。新道に沿ふ碓氷峠は高さ九五六米で、アプト式鐵道がある。

うすいも[薄痘痕](名)うすあばた。

うすいろ[薄色](名)㊀薄い染色。㊁經(たて)は紫、緯(よこ)の白い織色。㊂薄紫の染色。㊃襲(かさね)の色目。表は赤みを帶びた薄纖(はなだ)色、裏は紫のもの。

うすーうきぼり[薄浮彫](名)生地の面よりも少しく隆起するやうにした彫刻。うちにくぼり。

うすーうす[薄薄](副)ほのかに。うっすり。いさか。間接に。「いらだつさま。

うずーうず(名・副)㊀少しく動くさま。㊁心の動き。

うすーえ[卯杖](名)㊀白を搗きながら歌ふ歌。

うすーえた[卯杖](名)昔、正月上卯の日に、大學寮後、六衛府から朝廷に奉つた杖。桃の木などを五尺三寸に切り、二本又は四本づつ束れて五色の絲で卷いたもの。邪氣をはらふといふ。**―ほがい**(―ほ―)[卯杖祝](名)卯杖を奉る時に奏する詞。

〔杖　卯〕

うすおとしぞめ[薄落染](名)漸次下の方へ薄く染め落した摺模樣。

うずかい[鵜使](名)(うかい)(鵜飼)。

うすがき[薄柿](名)薄柿色。しぶいろ。

うすがき[薄書](名)うす墨で書くこと。

うすがすみ[薄霞](名)うすい霞。

うすがすむ[薄霞む](自動、マ四)うすくかすむ。

うすがみ[薄紙](名)うすい紙。(厚紙の對)。

うすぐ[蹲まる](自動、ハ四)㊀蹲まる。㊁蹲まる。

うずくまる[蹲る](自動、ラ四)㊀蹲まる。㊁蹲まる。

うずくもり[薄曇](名)雲が少したなびいてどんよりした天氣。

うずくもる[薄曇る](自動、ラ四)薄曇になる。

うずぐらい[薄暗い](形)[うずぐらし]の口語。

うずぐらし[薄暗し](形、一)少しくらい。ほのぐらい。光が薄くて物の形色がぼんやりと見える。

うすくりげ[薄栗毛](名)馬の毛色の一。黄色を帶びた栗毛で鬣の黒いもの。

うすくれない[薄紅](名)うすいくれなゐ。「いる。

うすくれしょう[薄化粧](名)あっさりと化粧すること。

うずけ[薄漬](名)うすい塩。

うずけ―こばい[薄紅梅](名)㊀【植】紅梅の花の色のうすいもの。㊁薄紅梅の花の色の如き染色。

うずけ―ぶり[薄漬](名)うすい塩。

うずけ―ぶい[薄紅](名)うすい塩。

うずぐもり[薄曇](名)雲が少したなびいてどんよりした天氣。

うずぐもる[薄曇る](自動、ラ四)薄曇になる。

うずぐらい[薄暗い](形)[うずぐらし]の口語。

うずぐらし[薄暗し](形、一)少しくらい。ほのぐらい。光が薄くて物の形色がぼんやりと見える。

うすくりげ[薄栗毛](名)馬の毛色の一。黄色を帶びた栗毛で鬣の黒いもの。

うすくれない[薄紅](名)うすいくれなゐ。「いる。

うすくれしょう[薄化粧](名)あっさりと化粧すること。

うずけ[薄漬](名)うすい塩。

膝を折り腰を落してゐる。㊁默などが前足を立てて坐る。

うずくもう[蹲まる](自動、ハ四)[うずくまる]の略。

うずくもり[薄曇](名)雲が少したなびいてどんよりした天氣。

うずくもる[薄曇る](自動、ラ四)薄曇になる。

うずぐらい[薄暗い](形)[うずぐらし]の口語。

うずぐらし[薄暗し](形、一)少しくらい。ほのぐらい。光が薄くて物の形色がぼんやりと見える。

うすくりげ[薄栗毛](名)馬の毛色の一。黄色を帶びた栗毛で鬣の黒いもの。

うすくれない[薄紅](名)うすいくれなゐ。「いる。

うすくれしょう[薄化粧](名)あっさりと化粧すること。

うすけ[薄漬](名)うすい塩。

うすけ―こばい[薄紅梅](名)㊀【植】紅梅の花の色のうすいもの。㊁薄紅梅の花の色の如き染色。

うすけ―ぶり[薄漬](名)うすい塩。

うすけ―ぶい[薄紅](名)うすい塩。

うすごおり[薄氷](名)薄く張った氷。

うすごおる[薄氷る](自動、ラ四)薄く凍る。

うすごはく[薄琥珀](名)薄地の琥珀織。

うすさ[薄さ](名)薄いこと。又その程度。

うすさいしき[薄彩色](名)薄く施した彩色。墨繪の上に藍・代赭などで薄く彩色したもの。

うすさくら[薄櫻](名)㊀色の薄い櫻花。㊁襲(かさね)の色目の一。表は白、裏は紅。

うすざくら―もえぎ[薄櫻萌黄](名)襲(かさね)の色目。表は薄青、裏は櫻色。又表は青、裏は薄芳色。

うすさま[烏芻沙摩](名)【佛】(梵 Ucchusma)不淨の意。厠などを用ひて潔淨にまもる德があるといふ。

うすし[薄し][形][うすけし][薄し](形、一)㊀厚くない。㊁濃くない。㊂薄い。㊃少い。淡い。㊄ゆたかでない。

乏しい。㊁愛情が少い。誠意が少い。

うすずじ……ぢ〔薄地〕(名)織地又は金屬などの薄い「もの。

うすずじお……ぢお〔薄鹽〕(名)うすい鹽加減。甘鹽。

うすずじき〔薄敷〕(名)【經】仲買人が註文を受ける際に、取引所規定の證據金より少額の金を敷金として取引すること。

うすしたじ……〔薄下地〕(名)鹽加減を薄くした「すき湯。

うすじり〔薄知〕(名)うすうす事情を知る。

うすしろし〔薄白し〕(形、一)色がさめてしろはけてゐる。

うすすく〔薄すく〕(自動、カ四)驚き疎ぐ。猥狼する。いやがらして疎ける。(古語)

うすすまる〔薄すまる〕(自動、ラ四)群集する。(古語)

うすすみ〔薄墨〕(名)㊀薄い墨色。㊁薄墨紙。(古語)㊂そばかき蕎麥粗。**—がみ**〔薄墨紙〕(名)すくし(宿紙)。**—ごろも**〔薄墨衣〕(名)薄墨の衣。にび色の衣。喪服。**—ぞめ**〔薄墨染〕(名)鼠色。

—の-りんじ〔薄墨綸旨〕(名)薄墨紙即ち宿紙に書いて賜はる綸旨。

うすぞめ〔薄染〕(名)㊀色を薄く染めること。うすぞめごろも。**—ごろも**〔薄染衣〕(名)薄い色に染めた衣服。

うすだかい〔うすだかい〕〔推い〕(形、ウ)「うだかし」の口語。

うすだかし〔うすだかし〕〔推し〕(形、一)もりあがって高い。積って高い。

うすたけ〔臼茸〕(名)【植】菌類の一。茶褐色で柄短く、傘の上面が凹んで臼の狀をなす。

うすぢ……ぢ〔卯槌〕(名)昔、卯杖と同じく、正月初卯の日の祝に用ひたもので、邪氣を拂ふもの。絲所から肉桂一奉り、聲の御座の西南の柱にかけさせられた。又、民間でも互に贈り、身に佩び、室内にかけておいた。桃又は玉・犀角・象牙などで、一寸四方、長さ三寸乃至五寸。廣さ一寸位の立方形を造り、堅に穴があって、五色の組絲を貫き垂る。支那漢代の剛卯(ぼう)に模したものといふ。

うすちゃ〔薄茶〕(名)㊀碾茶(ひきちゃ)の一種。量を少くしてたてる茶。(濃茶の對)㊁うすちゃいろ。**—い**ろ〔薄茶色〕(名)うすい茶色。**—てまえ**〔薄茶手前〕(名)薄茶を出す式。**—ひらてまえ**〔薄茶平手前〕(名)茶の湯の會で會席を設し、なかだて(中立)の後、第一に茶をたてること。

うすちり〔薄塵〕(名)金粉のうすい梨地ぬり。むちなしち。

うすつきうち〔臼搗打〕(名)杵で臼を搗くやうに入れて搗く。

うすつく〔うすつく〕〔舂く〕(自動、カ四)㊀物を臼に入れて搗く。㊁日が山の端に入らうとする。

うすつ-く〔うすつく〕(自動、カ四)(うすくまる)。

うすつ-ぺら〔うすつぺら〕(名)㊀極めて薄いこと。㊁極めて輕佻浮薄なこと。

うすて〔薄手〕(名)㊀淺い手疵。㊁陶器などのこしらへ方の薄いこと。

うすとり〔臼取〕(名)餅搗の時、水に浸した手で一杵おろす毎に餅の杵に粘着するのを防ぐこと。又、其の人。

うすとりひき〔薄取引〕(名)【經】相場で、賣買「者間に賣買成立の機會の少いこと。(古語)

うすない〔薄包〕(名)色を薄くぼかすこと。又、その色。

うすにおい〔薄肉彫〕(名)模樣等を少し板面に浮きあがらせる彫り方。

うすにくぼり〔薄濁〕(名)㊀うすく濁ること。㊁薄い濁酒。

うすにこり〔薄鈍〕(名)㊀うす黒い染色。㊁うす黒「い色の衣。

うすにび〔薄鈍〕(名)㊀うす黒い染色。㊁うす黒い色の衣。

うすにぶ〔薄鈍〕(名)㊀淡く塗ること。又、其の物。㊁漆を薄く塗ること。又、その物。

うすぬり〔薄塗〕(名)㊀淡く塗ること。又、其の物。㊁漆を薄く塗ること。又、その物。

うすねずみ〔薄鼠〕(名)うすい鼠色。

うずのーう〔諸ふ〕(他動、ハ四)承知する。うけひく。(古語)

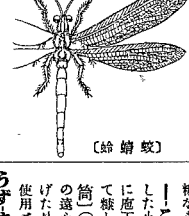
うすのき〔臼木〕(名)【植】石南科の落葉灌木。葉は楕圓形若しくは卵形で無柄、稀逸に微鋸齒を有る。四月頃、新葉と共に鐘狀五裂の帶紅白色の金鈴花を開き、花後、球形の漿果を結び紅熟する。果實の頭部が凹んで形狀が臼に似てゐるから「うすのき」の稱がある。

うすのーろ〔薄鈍〕(名)才能の普通より劣ってにぶいこと。又、その人。

うすば〔臼齒〕(名)中の四んで臼の如くなった齒。

うすばか〔薄刃〕(名)刃をうすくして、こしらへた庖「丁。

うすばーかげろう〔蚊蜻蛉〕(名)【動】脈翅類の昆蟲。長三五粍位、翅の開張約八〇粍。胸部黑褐色で、灰白色の縱走線が頭に一條、胸背に三條ある。前後翅端に近く、各一箇の白斑がある。



〔蚊蜻蛉〕

うすはく〔うすはく〕〔傾く〕(他動、カ四)うしはく。(古語)

うすばた〔薄機〕(名)うすもの。

うすはた〔薄端〕(名)金屬製花器。口廣く開き、廣口の中央にある生け口の筒と瓶形の胴とがつけはづしができるやうになってゐる。

うすはないろ〔薄花色〕(名)うすいはなだいろ。

うすはなごころ〔薄花心〕(名)情淺くして移り易い心。

うすはなざくら〔薄花櫻〕(名)【植】花の色のうすい櫻。㊁蘆(がま)の色目の一。表白、裏紅。㊂うすはなざくら。

うすはなぞめ〔薄花染〕(名)うすいはなだ色に染めたもの。

うすはり〔薄張〕(名)【經】證據金なしに行ふ不正取引。

うすひきーうた〔臼挽歌〕(名)うすうた(臼歌)。

うすびたい……ぢ〔薄額〕(名)冠の一種。絲を低くつくった冠。

うすーふたあい……ぢふ〔薄ふ藍〕(名)うすいふたあい。「ゐいろ。

うすーふたあい〔薄ふ藍〕(名)【動】おすめどり。**—う**〔護田鳥尾〕(名)薄黑い斑(ふ)のある雉の羽。矢の羽に用ひる。「(古語)

うすべーどり〔臼邊鳥〕(名)【動】にはとり(雞)。

うすべに〔薄紅〕(名)㊀うすいべにいろ。㊁うすくつけたべに。

うすべり〔薄緣〕(名)絲をとったござ。

うすべき〔うすべき〕〔渦卷〕(名)㊀うずまく。うづまく水流。㊁前項の狀なす模樣。㊂うどん粉に砂糖をまぜて焼いたものを皮として餡を包んだ菓子。

—こもん〔渦卷小紋〕(名)渦卷の形を模樣とした小紋。**—ずけ**〔渦卷漬〕(名)胡瓜に縦に庖丁目を入れ、中子を取って乾かしたものを卷いて麹と鹽とに漬けた漬物。**—ポンプ**〔渦卷喞筒〕(名)【機】高速度で回轉する車中を流れる液體の遠心力を利用して、低所にある液體を高所に汲上げたり、高速度で一所から他所に送ったりする爲に使用せられるポンプ。

うずまく〔うずまく〕〔渦卷く〕(自動、カ四)渦く卷きめぐる。……う。(古語)

うずまさる〔うずまさる〕〔埋る〕(自動、ラ四)(うずもる)。

うずまる〔うずまる〕〔埋る〕(自動、ラ四)雲などが「群り起こる。(古語)

うずみ〔薄み〕(名)うすいこと。又、その程度。

うずみどうふ……ぢふ〔埋豆腐〕(名)細かく切って蒸た豆腐を椀に入れ、その上に飯を盛った食品。

うずみどい〔埋樋〕(名)土中に埋めた樋。

うずみみどり〔薄綠〕(名)うすいみどりいろ。

うずみ-の〔薄美濃〕(名)すきとほる程薄くすいた美濃紙。

うずみび〔埋火〕(名)灰にうづめた炭火。

うずみ-もん〔埋門〕(名)㊀城の石垣・築地・土塀などの下方に設けた小門。㊁裏口にある小門。

うず-む〔うづむ〕〔薄む〕(他動、マ下二)うすくする。うすくさせる。

うずむ〔うづむ〕〔埋む〕(他動、マ四)㊀土中や物の中に入れて隠す。㊁粗末な器をなる。

うずむ〔うづむ〕〔埋む〕(他動、マ下二)前條に同じ。

うずむ〔うづむ〕〔埋む〕(他動、マ四)うづだ「かく積む。(古語)

うずむし……ぢ〔渦蟲〕(名)【動】扁蟲類の動物。體

軀は細長。皮膚に細毛を有し、體を波紋狀にして游泳する。

うすむらさき〔薄紫〕(名)うすいむらさきいろ。

うすめ〔薄目〕(名)【動】うすめがけ。うすい程合。

うすめる(おろ)〔薄める〕(他動、マ下一)(うすむ)の口語。

うすめる(おろ)〔薄める〕(他動、マ下一)(うすむ)の口語。

うすもえぎ〔薄萌黄〕(名)❶薄いもえぎ色。❷(もえぎ)の色目。表薄青、裏は表より少し濃い薄青。

うすもとて〔薄元手〕(名)手うすい資本。

うすもの〔薄物〕(名)❶薄く織った織物。❷紗・絽の類。うすはた。うすぎぬ。

うすもよう〔薄模様〕(名)うす紫に染めたもの。

うすもる(おろ)〔埋る〕(自動、ラ下二)(うずもる)の口語。

うずも・れる(おろ)〔埋れる〕(自動、ラ下一)(うずもる)の口語。

うず・やくそく〔薄約束〕(名)かりの約束。確かでない内約束。

うすゆき〔薄雪〕(名)❶少しばかり降った雪。❷菓子の名。雛卵と饅餅粉とを炎で製し、砂糖の衣をかけたもの。**—こんぶ**〔薄雪昆布〕(名)最も薄くけづった昆布で、多く吸物に用ひる。**—もの**

のがたり〔薄雪物語〕(名)【文】作者未詳の假名草子。寛永年の作。深草の園部衞門と一條殿の身内薄雪姫の悲戀の物語。二冊。

うすよう(ようし)〔薄葉〕(名)鳥子紙の一種で、薄くすいたもの。〔薄様〕(名)❶うすくすいた鳥子紙又は雁皮紙。❷上方の濃く、下方を次第に薄くぼかし染にした染色。

【(名)うすい衣。(古語)

うすら〔薄ら〕(名)うすらか。**—ごろも**〔薄衣〕

うずら(うづら)〔鶉〕(名)❶【動】鶉(じゅん)。雞類の鳥。形、圓くふくらみ、雉の雛に似、全身赤褐色で、黑白色の縱紋がある。肉は美味。多くは羹とする。原野に棲み、或は人家に畜ふ。❷綜麻の毛と加賀苧とを交へて綯った船綱。❸芝居の下拵數。(東京の方言)**—あわせ**(はせ)〔鶉合〕(名)個餐せる鶉を持寄って、その鳴聲の優劣を定める會。**—いし**〔鶉石〕(名)❶鑛(くわう)穴山の爆發に際して拋出せられる鶉の形の石。硫黃島硫黃の際噴出した。❷小さく圓い瑪瑙の稱。**—がい**(がひ)〔鶉貝〕(名)【動】八代(やつしろ)貝科の大型の卷貝。介殼は大いさ一〇糎許、螺層は六階から成り、外面暗色で、斑紋のさまが鶉の羽に似てゐる。**—かご**〔鶉籠〕(名)蓋根を絲の網で極めて低く張った方形の籠で、鶉を飼ひおくに用ひる。**—ごうし**(がう)〔鶉格子〕(名)遊郭の格子の一で、形、鶉籠に似たもの。**—ごろも**〔鶉衣〕(名)寄子大略篇の語つづきはきした衣。觸衣。**—だち**〔鶉立〕(名)❶用意もなくふと旅立つこと。❷給仕などする時、遲勝なせずに、一足で立つこと。**—ちりめん**〔鶉縮緬〕(名)皺の大きな一種の縮緬。

—なく〔鶉鳴く〕(枕)「いはひもとほり」の枕詞。**—なす**〔鶉なす〕(枕)「ふる」(菅の枕詞。**—の**〔鶉野〕(名)鶉を狩る原野。**—の**〔鶉衣〕(名)(うずころも)。**—のとこ**〔鶉床〕(名)❶鶉の臥す處。❷いぶせき臥床。**—ふ**〔鶉斑〕(名)❶茶褐色に斑紋ある模樣。❷【動】羽の斑文が鶉に似てゐる鷹。**—ふえ**〔鶉笛〕(名)❶鶉狩に鶉を誘ひ寄せる爲に吹く笛。❷笛を調子短く吹くこと。**—まめ**〔鶉豆〕(名)【植】「さざり」の一種。莢なしで、葉は奇數羽狀複葉。花は白色、種子は黑又は赤褐色で白い斑がある。❷鶉豆に砂糖と食鹽とを加へてやはらかく煮詰めた食品。**—もく**〔鶉杢〕(名)❶鶉の羽色の如き木目。❷やくすぎ(屋久杉)。**—やき**〔鶉燒〕(名)食物を油でいりつけて鶉色にしたもの。

うすら・い(ひ)〔薄氷〕(名)薄く張った氷。(古語)

—の〔薄氷の〕(枕)「薄き」の枕詞。

【(語)

うすら・か(ひ)〔薄らか〕(名)薄いさま。あっさり。(古語)

うすら・ぐ(がげ)〔薄らぐ〕(自動、ガ四)❶薄くなる。❷輕くなる。

うする(おろ)〔薄る〕(自動、ラ下二)「うする」の口語。

うすれる(おろ)〔薄れる〕(自動、ラ下一)「薄らぐやうにする。

うすろが・す(がせ)〔薄ろがす〕(他動、サ四)

うすろが・ぐ(がげ)〔薄ろぐ〕(自動、ガ四)うすらぐ。

うず・わ(うづ)〔渦輪〕(名)❶渦を卷いたやうな圓形。❷【動】鞘翅目鰯科に屬する鰹の一種。背部は蒼黑色、後方に雲形の斑紋がある。

うすわた〔薄綿〕(名)薄綿を入れた衣服。

—いれ〔薄綿入〕(名)着物に薄く入れた綿。

うすわらい(ひ)〔薄笑〕(名)うすわらふこと。

うすわらう(ひ)〔薄笑ふ〕(自動、ハ四)少しく笑ふ。ほほゑむ。

うせい(ひ)〔汪生〕(代)自己の謙稱。わたし。わたくし。

うせい〔雨聲〕(名)雨の降る音。あまおと。

うせき〔禹跡〕(名)【地】支那本邦の禹域。

うせつ〔雨雪〕(名)❶雨と雪。❷水雪の降ること。

うせつ〔汪拙〕(代)自己の謙稱。わたくし。わたし。

うせびと(ひと)〔失人〕(名)にげた人。逃亡人。失踪人。

うせもの(ひと)〔失物〕(名)失せた物。なくなった物。

うせる(せる)〔失せる〕(自動、サ下一)「うす」の口語。「來る」、「行く」、「居る」などを罵っていふ語。

うそ〔嘘〕(名)【動】鵜科魚目魚科の美味な小鳥。鳴聲は口笛に似てゐる。頭上・嘴に沿ふ部分と尾・翼の大部は黑色、背は青灰色、腰部及び翼には白色部があり、頰・頸部及び喉は美しい深紅色で、以下の腹面は桃紅色を帶びる。又、青灰色のものもある。腹部の中央と下尾筒は白色、嘴は短大で厚く、脚は褐色である。**—かえ**(がへ)〔嘘替〕(名)

〔嘘〕

岡縣太宰府及び東京市城東區亀戸(かめ)天滿宮で、參詣人が來て選った嘘をかへふ神事。太宰府の嘘は正月七日夜の酉の刻に行ふ。その嘘は神社から出し、中に黃金製のもの一箇あって、之を得る者は、最上の吉皮、好運の兆としてゐる。亀戸の嘘は、一月廿四・廿五日の兩日に行ひ、神主が參詣人の持參した嘘を受取り、別の者と替へ渡す。開運の效ある神事だといふ。

—どり〔嘘鳥〕(名)【動】うそ。**—ひめ**〔嘘姫〕(名)【動】うそ。

うそ〔嘘〕(名)【動】(かわおそ)川獺の別名。をそ。うそぶき。

うそ〔嘘〕(名)❶事實ならぬ言。虛構の言。いつはり。そらごと。❷あやまり。まちがひ。**—じ**〔嘘字〕(名)正しくない字。まちがった字。**—つき**〔嘘吐〕(名)うそをつく人。**—の**(かわ)〔嘘皮〕(名)全くのうそ。あかうそ。**—はっぴゃく**〔嘘八百〕(名)虛言の多いこと。**—ばなし**〔嘘話〕(名)眞實ならぬ話。つくりばなし。**—から出たまこと**(ま)(句)始めはうそであったが、偶然にそれが事實となったこと。**—の世の中**(句)世の中には眞實が少く嘘の多いのが普通であること。**—も方便**(句)方便の爲には、時にうそをつかねばならぬことがあること。

うそ(接頭)〔薄(うす)〕の轉少し。何となく。どことなしに。「—よこれた顏。

うそうそ〔汪更〕(名)世事にうといおやち。又、老年

の男子が自己の謙稱として用ひる。

うそう【有相】(名)【佛】有情・非情悉く形體を具へて凝慟・變容を起こさせること。

うそう【有想】(名)【佛】心中に想念を有すること。

うそうそと(副)きょろきょろ。物を尋ねる樣子。

うぞうむぞう【有象無象】(名) ㊀世の中の有形・無形の一切の物。森羅萬象。㊁澤山に集まったやくざなものども。

うそえむ【薄笑む】(自動・マ四)少しく笑ふ。微笑する。

うそぶき【嘯】(名) ㊀うそぶくこと。㊁うそぶいた姿をした能の假面。

うそぶく【嘯く】(自動・カ四) ㊀口をつぼめて鼠息を吐く。㊁詩歌を吟する。㊂口をつぼめて鼠息を出す。㊃長く大きな聲を出す。㊄吼える。

うそぶるう【振ふ】(自動・ハ四)いとはしき怖しさに身ぶるひする。「くそ。(古語)

うたむく【嘯く】(自動・カ四)うそぶく。

うた【歌・唄】(名) ㊀聲にふしをつけてうたふこと。㊁音律に合はせて歌ふこと。㊂感想を詠歌的にあらはした詞。㊃五七五七七の三十一音から成れる詞。和歌。やまとうた。**—にばかり歌ふ**(句)徒らに嘆かりして實驗しないことにいふ。

うだ【宇陀】(名)【地】奈良縣の郡名の一。往古の菟田縣あがた。猛田縣に當る地。神武天皇御東征の驛跡。

ウダールニキ【露 Udarniki】(名)【軍】衝擊隊。突擊隊。

うたあわせ【歌合】(名)和歌を詠するものが左右に分れて歌の優劣を批判して、左右が勝負を決すること。うたくらべ。

うたい【謡】(名)能の歌曲。(ようきょく)。**—こう**【謡講】(名)人が一定の日に集まって謡をうたふ會。**—ぞめ**【謡初】(名)江戸幕府で、毎年正月三日(始めは二日)に殿中で行った謡曲を謡ひ初める儀式。

うたい【有待】(名)【佛】㊀他と相待って存在する有差別無常の迷界。㊁生滅無常の凡夫の境涯。

うたい【宇内】(名)天地四方の内。天下。あめがした。

【あうて文書などを撃つた官吏。(名古語)【佛】古代、神祇官・太政官に「く。(古語)

うたいし【右大史】(名)古代、神祇官・太政官に

うたいしょう【右大將】(名)右近衛大將。

うたいじん【右大臣】(名)太政官の長官で、左大臣の次に位し、政務を統轄した官。「た歌ふ人。

うたいて【歌手】(名)歌を歌ふ人。巧みに歌

うたいべん【右大辨】(名)「う(ん)」辨」の條を見よ。

うたいまつ【鵜松明】(名)雨後の鵜飼に用ひる國風の歌を歌つた女歌手。㊁藝妓・歌妓。

うたいめ【歌女】(名) ㊀上代、雅樂寮に屬して「たいまつ」で、かがの木の皮でつくる。

うたいもの【謡物・歌物・唄物】(名)節をつけてうたふ詞章の總稱。神樂・催馬樂・朗詠・今樣・謡曲・長唄・清元等の類。(讃みもの・語りものの對)

うたう【歌ふ】(他動・ハ四) ㊀(うたうの)口語。㊁自白する。「た巧みに歌ふ人。

うたうたい【歌唱】(名)歌をうたふ人。歌

うたうたし【轉轉し】(形・二)いよいよ甚だしい。うたてし。(古語)

うたえ【歌繪】(名)文字と繪とを交へて一首の歌をあらはしたもの。

うたえ【詠】(名)(うたえ。(古語)

うたえただすつかさ【刑部省】(名)(「詠」)

昔の八省の一。刑事の事を司つた官廳。

うたうら【歌占】(名)歌で吉凶を占ふこと。(古

うたお【歌男】(名)歌をよく歌ふ男。(古語)

うたかい【歌會】(名)(うたのかい)。

うたがい【歌貝】(名)蛤の貝の內側に歌を書き、歌ガルタのやうに取って遊ぶもの。後、金銀箔を押した將棋の駒の形の厚紙を貝に代へた。

うたがい【疑】(名)ふしん。怪しみ。疑念。

うたかいはじめ【歌會始】(名)新年始めの歌會。席上に和歌三首又は樣々人麿の像を懸ける。(ごう)の口語。

うたがう【疑ふ】(他動・ハ四)(うたがう)

うたがき【歌垣】(名)昔、若い男女が集まって互に歌を詠み、踊を踊って遊んだこと。かがひ。(古語)

うたかた【泡沫】(名) ㊀水の上に浮かぶ泡。(古語) ㊁消ゆるのたとへ。「の【泡沫の枕詞。「消ゆるの枕詞。**—ひと**【泡沫人】(名)生命の常なくして水の泡の如く消え易い人。**—も**【泡沫も】(副)暫くの間。(古語)

うたがたり【歌語】(名)歌についての語。歌についての物語。歌話。

うたガルタ【歌骨牌】(名)骨牌の一種。小さい紙札に、小倉百人一首の和歌の全句を書いたものを讀札、下の句だけ書いたものを取札としたもの。下の句の札を撒き、上の句を讀むに從つてその下の句の札を拾ひ取り、取った札の數の多少によって勝負を決する。

うたがわし【疑はし】(形・二)あやしい。不審である。いぶかしい。**—い**【疑はし】(形・二)

うたがわしよくに【浮世繪師】(名)初代、通稱倉橋藤吉。一陽齋と號した。役者の似顔は此の人から始まる。文政八年(一四八五)歿。年五十七。㊁二代、初代の養子。通稱は源藏。一龍齋と號した。初名は豐重。天保六年(一四九五)歿。年五十九。本所豐國。㊂三代、通稱角田庄藏。初名國貞。一雄齋と號した。初代の高弟。田舍源氏等の草雙紙の挿畫を畫いて名聲が揚がった。元治元年(一八六四)歿。年七十九。

うたがわとよひろ【歌川豐廣】(名)【人】浮世繪師。通稱藤次郎、一柳齋と號した。豐春の門人。浮世草子の插畫を畫く。文化十二年(一四七五)歿。年六十五。

うたかんじん【歌勸進】(名)【佛】佛事供養の爲に歌を募り集めること。「こと。(古語)

うたき【抱】(名)うだくこと。だくこと。かかへること。

うたき【恣】(名)うだくこと。

うたきず【歌疵】(名)非難すべき所のある和歌。

うたきりぎりす【歌蟋蟀】(名)【動】(こおろぎ)(蟋蟀)。

うたぐ【踞ぐ】(自動・ガ下二)【踞ぐ】(自動・ガ下二)

うたく【恣く】(自動・カ四)怒り叫ぶ。「く。(古語)

うだく【抱く】(他動・カ四)いだく。だく。

うたくこつ【烏啄骨】(名)【生】肩胛骨及び鎖骨と共に、肩帶を構成する骨の一。うかい。

うたくさり【歌鎖】(名)文字鎖の一種。歌の下の句の初の字を取って、次の歌の上の句の初において詠みつづけるもの。

うたくず【歌屑】(名)拙い和歌。

うたくせ【歌癖】(名) ㊀和歌を詠むことを好む癖。㊁和歌の詠み方に一種の癖のあること。

うたくち【歌口】(名) ㊀和歌の詠みぶり。㊁和歌を詠むに巧みなこと。㊂笛・尺八などの口を當てて吹く孔。

うたくどき【歌口說】(名)歌曲にあはせて物の「ぶりをなすこと。

うたくらべ【歌競】(名)(うたあわせ)(歌合。

うたぐり【疑】(名)うたがること。うたがひ。

うたぐる【疑る】(他動・ラ四)(うたがう。

うたごう【宴・謡】(名)酒宴。宴會。まかり。(古語)

うたげ【疑ふ】(他動・ハ四) ㊀ふしんに思ふ。あやしむ。㊁決することが出來ない。迷ふ。㊂危ぶむ。恐れる。おそらくは。疑ふに。

うたごえ【歌聲】(名)うたふ聲。

うたごえかい【歌御會始】(名)宮中年始の御歌會。宮中に於ける新年儀式の一。大抵一月十八日に行はれ、前年十一月に御題を仰せ出され、一般臣民の詠進を許されるおうたくわいはじめ。

うたごころ【歌心】(名)和歌の意味。

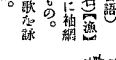
うたことば【歌詞】(名)【文】散文に用ひられず、專ら歌に用ひられる詞。歌に文學としての意識が生ずるやうになると、よりよい表現をなさうとする爲に、詞の選擇の問題が起こり、歌詞の發生を促した。

うたさいもん【歌祭文】(名)一種の俗曲の山伏が鈴杖を振り、法螺を吹きながら神佛の靈驗を唱へたものが、後、世俗の出來事を面白く可笑しく、三味線に合はせる小唄となったもの。

うたざわぶし〔歌澤節〕(名)(うたざわぶし)。**—ぶし**〔歌澤節〕(名)(音端唄の一。安政二年(一八五五)笹本彦太郎(笹丸)・桑屋の虎右衛門・御家人の柴田金助等によって樹立された一流派。虎右衛門の派を寅派といひ、柴田金助の派を芝派といふ。

うたざわやまとだいじょう〔歌澤大和大掾〕(名)【人】歌澤節の元祖。一派を樹立して、本名は笹本彦太郎。笹丸と號する。家元名を授かる。萬延元年(一八六〇)没。年六十三。

うたじょうるり〔唄浄瑠璃〕(名)俗曲の一種。長唄に浄瑠璃節を混じたもの。語物としての浄瑠璃が唄物に比べたもの。


〔みあせだう〕

うたずかさ〔雅樂寮〕(名)(うたりょう)〈雅樂寮〉。(古語)

うたせあみ〔打瀬網〕(名)【漁】引網の一種で、蕈狀の兩方に袖網を附け、船で海底を引廻すもの。

うたぜき〔歌闕〕(名)和歌を詠まなければ通行させぬ關所。

うたせっきょう〔歌說經〕(名)宗門の教義を說き聞かすのに、聲に節をつけてすること。せっきょうさいもん。

うたそうし〔歌草紙〕(名)和歌の書物。歌

うたそらごと〔歌空事〕(名)歌には想像のことが多くて事實が少いこと。

うたた〔轉〕(副)㊀著たしくなって。㊁いよいよ。ますます。㊂怪しくよかろうして。常ならずして。何となく。そぞろに。**—ごころ**〔轉心〕(名)うつり氣。そぞろな心。**—ね**〔轉寢〕(名)、ごろびれ。かりね。思はずうたゝ寢ること。歌寢。

うただいもく〔歌題目〕(名)【佛】日蓮宗で法要又は說法の時、太鼓・鉦・鼓等に合はせて、題目を唱へながら踊ること。

うたち〔梲〕(名)うつぼりの上に立てる短い柱。つか。うだつ。(古語)**—が上がらぬ**(句)不任合である。浮かぶ瀨がない。立身しない。

うだつ〔梲〕(名)うだち。(古語)

うたて〔轉〕(副)㊀ますます。甚だしく。㊁常でなくして。㊂餘りにつれなく。㊃いよいよ疎しく。㊄物憂くして。(以上古語)**—げ**〔轉げ〕(名)いよいよ進んでゆくこと。又、その程度。(古語)**—し**〔轉さ〕(名)うたてきこと。又、その程度。**—し**〔轉さ〕(名)(きけし)。滯惜である。㊁忌むべきことである。うるさい。㊂面白くない。興味がない。(以上古語)**—びと**〔轉人〕(名)うたてき人。厭しい人。(古語)

うだてんのう〔宇多天皇〕(名)第五十九代の天皇。御名は定省(さだみ)。光孝天皇の第七皇子。菅原道眞を登用し給ふ。讓位の後、寛平法皇と申す。承平三年崩御。世に亭子院の帝とも稱する。法皇の稱は天皇から始まった。寛平遺誡は御子醍醐天皇の爲に記されたものである。(五五七一)

うたながめ〔歌詠〕(名)歌を詠むこと。(古語)

うたなし〔歌念佛〕(形、一)疑なし。(古語)

うたねんぶつ〔歌念佛〕(名)俗謠の一。もと念佛に節をつけて歌ふ。こゝから出たもので、ふせがれ(伏鉦)に合はせて、種種の猥褻な文句を念佛の節で歌ふやうになった。

うたのいえ〔歌家〕(名)鎌倉時代以後歌道を傳統的に相續いで聚乳ふ流派し、師匠の家と仰がれた家で、一に師範家といふ。藤原俊成は其の家で、其の子定家、其の孫爲家と相繼ぎ、爲家の子爲氏は二條家を起こし、爲敎は京極家、爲相は冷泉家を起こした。而して二條家は保守的、京極家・冷泉家は新傾向を示した。

うたのかい〔歌會〕(名)集まって歌を作り、短冊や懷紙に書いて披露すること。歌會。

うたのかみ〔雅樂頭〕(名)雅樂寮の長官。

うたのつかさ〔雅樂寮〕(名)(うたりょう)〈雅樂寮〉。

うたのなかやま〔歌中山〕(名)【地】京都市東山。

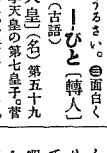
うたびくに〔歌比丘尼〕(名)歌念佛を歌ひ、地獄・極樂の解說し、袖乞をする尼。後には色を賣るものがあるやうになった。

うたびと〔歌人〕(名)㊀歌を巧みに詠む人。うたよみ。㊁雅樂寮で國風を謠ふことを掌った役。

うたひめ〔歌姫〕(名)歌を歌ふ女。女の聲樂家。風俗歌及び東遊などの伴奏に用ひるもの。

うたぶえ〔歌笛〕(名)【音】指孔六つある橫笛で、

うたぶくろ〔歌袋〕(名)㊀和歌の草稿を入れておく袋。紙・錦・緞などでつくり、座敷の柱にかけて飾とする。㊁蛙の咽のふくれあがってゐるところ。


(㊁)ろくぶたう

うたまい〔歌舞〕(名)歌ひ舞ふこと。**—ひと**〔歌舞人〕(名)歌舞する人。樂人。伶人。

うたまくら〔歌枕〕(名)古歌に詠み・こまれた諸國の名所。

うため〔歌女〕(名)歌をよく歌ふ女。うたひめ。

うたよみ〔歌詠〕(名)歌を巧みによむ人。**—どり**〔歌詠鳥〕(名)【動】鶯の異名(古今和歌集の序に「花に鳴く鶯水に住む蛙の聲を聞けば、いづれか歌を詠まざりける」とあるに基づく)。

うたりょう〔雅樂寮〕(名)昔、治部省に屬し、舞樂・音曲の事を掌った役所。

うたる〔(ら)れる〕(自動、ラ四)〈古語〉。

うたるき〔歌論議〕(名)和歌のよしあしを論ずること。うたろんぎ。

うたろんぎ〔歌論議〕(名)うたるき。

うち〔内〕(名)㊀なか。うち。㊁ま。あひだ。㊂くみ。なかま。うちわ。㊃以内。㊄わが家・わが國に關すること。㊅家。へや。我が家。㊆我が夫。我が妻。㊇葉裏。內裏。㊈主上の敬稱。㊉關門。內政。㊊心。心意。㊋われ。自分。**—に省みて疚しからず**(句)(論語顏淵篇の句)自分の心に省み考へても少しも恥づかしいことがない。**—裸でも外錦**(句)家の內では裸でも、世間へ出るには身なりを飾らねばならぬ。**—廣がりの外すぼり**(句)內にゐては威張りちらすが、外に出ては意氣地のないこと。うちへんけい。**—を外にす**(句)遊蕩に他いこと。うちへんけい。**—を出**(句)訪れて來る人と入りちがひに家を出ること。わざと外出して面會を避けること。

うち〔打〕(接頭)動詞に添へて其の意を強める語。

うちあ〔打合〕(名)㊀たがひ。ぶつあひ。

うちあうふ〔打合ふ〕(他動、ハ四)(うちあふ)。(古語)

うちあかす〔打明す〕(他動、サ四)打「包まずに語る。

「ちおうの」の口語。

うちあい〔打合〕(名)㊀銃砲を互に打放すこと。

うちあぐ〔打明く〕(他動、カ下二)(うちあけくる)。(古語)

うちあぐ〔打上げる〕(他動、カ下二)(うちあげる)。(古語)

うちあげ〔內上〕(名)內會。物の代金などの一部。

うちあげ〔打上〕(名)㊀筒からうちあげる花火。㊁たけ。酒宴。㊂興行を終へること。「る話。

うちあけ〔打明話〕(名)包み隱さずに語

うちあける〔打明ける〕(他動、カ下一)(うちあける)。(古語)

うちあける〔打空ける〕(自動、カ下一)すっと淋しくなる。(近松作、卯月の潤色)

うちあけばなし〔打明話〕(名)包み隱さずに語

うちあげる〔內揚〕(名)衣服のあげを內部にすること。(「きてあげ」の對)

うちあく〔打明く〕(他動、カ下二)(うちあけくる)。(古語)

うちあぐ〔打上げる〕(他動、カ下二)(うちあげる)。(古語)

うちあすかす〔內衣〕(名)衣服の裏の赤いもの。

うちあつ〔打上げる〕(他動、カ下二)(うちあげる)。(古語)

うちあつ〔打つ〕(他動、タ四)波が物を漂はして陸へあげる。㊁酒宴をする。(古語)㊂聲を張りあげる。㊃興行を終へる。

うちあつ〔內揚〕(名)衣服のあげを內部にすること。(「きてあつ」の對)

うちあつ〔內上〕(名)內會。

うちあつ〔內上げる〕(他動、カ下一)(うちあげる)。(古語)

うちあつ〔內揚

サ下二）㊀雙方互に打合ふ。㊁前以って相談しておく。

うちあわせ〔打合〕（名）㊀下相談。㊁強め。

うちあわせ……〔内合〕（名）ふたもの。（古語）

うちあわせる〔打合せる〕（他動、サ下一）（うちあわすの口語。

うちあわび……〔打鮑〕（名）鮑の肉を細長く切って干したもの。昔は祝の席などに酒の肴として用ひた。のしあはび。

うちいけ〔内池〕（名）屋敷内の池。庭園の小池。

うちいず……〔打出づ〕（自動、ダ下二）㊀出づ。㊁言葉に出す。口に出す。（古語）

うちいた〔打板〕（名）㊀廊下又は牛車と車寄との間などに渡す歩板。㊁地上に坐する時の敷板。

うちいで〔打出〕（名）㊀うち出ること。㊁うちいでのきぬ。（古語）——**の きぬ**〔打出衣〕（名）牛車等からこぼれ出た女の衣の裾。いだしぎぬ。（古語）

うちいと〔打絲〕（名）竹の筒で打ちかためた組糸。

うちいり〔内入〕（名）㊀攻めいること。

うちいり〔討入〕（名）㊀貢債などの一部を償ふこと。㊁収入。まうけ（儲）。

うちいる……〔討入る〕（自動、ラ四）攻めいる。撃する。

うちうち〔内内〕（名）㊀家の内。㊁ないないの事。うちは。うちまく。内部。裏面。——**に**〔内内に〕（副）ないないに。秘密に。

うちうみ〔内海〕（名）㊀地㊁潮水。㊂いりうみ。㊃陸と陸との間に挟った海。

うちうち〔内裏〕（名）㊀うちうち。うちわ。㊁着

うちうら〔内浦〕（名）海又は湖水の奥入した島。

うちうお……〔打縒〕（名）うちひも。

うちおう……〔打合ふ〕（他動、ハ四）㊀互に打つ。相打つ。㊁互に銃砲などを放つ。

うちおうぎ〔打扇〕（名）舞楽で人を打つしぐさに用ひる扇。

うちおき〔打置〕（名）㊀婚禮の時、廣蓋に載せる小袖をおさへるもので、造花の枝の形に造ったもの。㊁うどんなどを強てかちうっておくこと。

うちおく〔打置く〕（他動、カ四）おく。そのままにしておく。

うちおとす〔打落す〕（他動、サ四）たたきおとす。きりおとす。「賢は劣ってゐちこと。

うちおとり〔内劣〕（名）外見の美なるに似て、内

うちかい……〔打違〕（名）㊀うちちがひ。（古語）㊁ゆきちがひ。（古語）——**ぶくろ**〔打違袋〕（名）種種のものを入れる商形の底なき袋で打ちちがひに帶びるもの。

うちかい……〔打櫂〕（名）船だなの細のなに通して、横に水を掻きながら船を進めやる櫂。

うちかい……〔打飼〕（名）筒になって底のない長い袋で、金錢などを入れて腰に巻くもの。うちちがひ。

うちかえ……〔打違〕（名）（うちかい）。

うちかえし……〔打飼〕（名）（うちがい×打飼）。

うちかえす……〔打返〕（名）うちかへすこと。

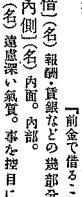
うちかえす……〔打返す〕（他動、サ四）㊀かへすつきもどす。㊁打たれて報として、又、其の人を打つ。㊂くりかへす。反覆する。㊃古い綿を更に綿弓でほどき入れて柔かくする。㊄退いた後に再び寄せて來る。㊅古い金物を打って新しくする。

うちかえる……〔打更へる〕（他動、ハ下一）（うちこうの口語。

うちかぎ〔打鉤〕（名）昔、水戰に用ひた鉤。敵船をひっかけるに用ひたもので、鐵鉤に長い柄をすげた武器。

うちかくし〔内隱〕（名）洋服の内側のかくしこう。

うちかけ〔打掛〕（名）㊀昔、朝廷の儀式の時、武官の裝束の上に着た服で、胸部と背部とにあて



〔㊀けかちう〕

て着る袖なしの如きもの。（補注）。㊁舞樂の裝束の一。その劍は前記のものに似てゐる。㊂婦人の廣服の上に打掛けて着る長い小袖。かいどり。——**えぼし**……〔打掛烏帽子〕（名）烏帽子を頭に押入れて、後の釘のみで留めておいた略儀のもの。——**かたぎぬ**〔打掛肩衣〕（名）肩衣の裾を袴の内に入れないで、肩からうちかけて着ること。——**すおう**……〔打掛素袍〕（名）素袍の裾を袴の内に入れないで、肩より打掛けて着る略式のもの。——**よろい**……〔打掛鎧〕（名）昔の武士が儀式の時鎧の一種で、絹布を鎧の形に裁ち、模樣を畫き、又、漆で塗りなどしたもの。かけよろひ。

うちかけ〔内掛〕（名）相撲の手の一。一方の足を相手の足の内側にかけ吊身（うち）にかかへ込んで、これを倒すこと。

うちかし〔内貸〕（名）前金で、報酬又は賃銀などの一部を拂ふこと。

うちかた〔打方〕（名）㊀銃砲を放射すること。㊁

うちかた〔内方〕（名）㊀他人の妻の敬稱。おくさま。㊁貴人の家に仕へる女。㊂家。うち。家内。㊃耕などのうちのり。

うちかた〔打肩〕（名）【醫】心臟狹窄症。はやうちかた。（古語）

うちかた〔内方〕（名）内裏に仕へる人人。帝の味方。（古語）

うちがたな〔打刀〕（名）刺す刀に對して、鎧

うちかつ……〔打勝つ〕（他動、タ四）「勝つ」の意を強めていふ語。

うちがね〔打金・撃鐵〕（名）銃砲の雷管を打って發火せしめる鐵具。げきてつ。

うちかぶと〔内冑〕（名）㊀冑の裏面。㊁内謀。うちわの樣子。うちまく。——**を見透かす**（句）相手の弱點や內情をよく調べ知ること。

うちがみ〔打紙〕（名）木槌で打固めて、滑かに光澤を出した紙。

うちかり〔内借〕（名）報酬・賃銀などの幾部分を「前金で借ること。

うちがわ……〔内側〕（名）内面。内部。

うちき〔内氣〕（名）遠慮深い氣質。事を控目にする氣質。小心。

うちき〔桂〕（名）㊀昔の婦人の服。重れの上衣で、唐衣の下に着たもの。㊁男子の直衣・狩衣などの下に着た衣服。——**すがた**〔桂姿〕（名）袿のみを着て、男なら烏帽子に直衣・狩衣など、女ならば裳・唐衣などを着ぬ姿。（古語）

うちきき〔打聞・打聽〕（名）㊀ちらと聞いたこと。（古語）㊁聞いて書きつけたもの。ききがき。

うちきず〔打傷〕（名）物に打ちつけ又は打たれて生じた傷。打撲傷。

うちきぬ〔打衣〕（名）昔の婦人の衣服の一。正裝の時、いつつぎぬ（五衣）の上に着た服。砧で打ちなどして光澤を出したもの。

うちぎね〔打杵〕（名）きね。

うちぎみ〔内君〕（名）他人の妻の敬稱。おくさま。

うちきり〔打切〕（名）一先つ終りとすること。㊁切る。強めていふ。

うちきる〔打切る〕（他動、ラ四）㊀なし終る。やめる。「金。

うちきん〔内金〕（名）契約した總金高の一部分の

うちきん〔内金〕（名）【經】原價の品と高價の品とを引替へる時、不足の金を補ふこと。

うちくだく……〔打碎く〕（他動、カ四）「くだく」を強めていふ。こはす。うちわる。

うちくつろぐ……〔打寛ぐ〕（自動、ガ四）くつろぐ。うちとける。「ざんざい（斬罪）。

うちくび〔打首〕（名）罪人の首を切る昔の刑罰。

うちくもり〔内曇〕（名）㊀上に鬱・下に紫なる雲形をすき出した鳥子紙。㊁京都府愛宕郡鳴瀧から産出する匹石で、卵色に紫の紋脈あるもの。㊂かはらけ（土器）の内に淡黑い三つ星のあやのあるもの。

うちくらい〔内藏〕（名）履中天皇の朝、齊藏（いつ）の倍に座して神物以外の官物を納め、阿知使主・王仁等に出納・記錄を掌らしめられた藏。

うちくら〔内倉・内庫〕（名）㊀住宅の軒つづきに設けたくら。（庭倉の對）㊁家の內に設けたくら。

うちぐり〔打栗〕（名）搗栗を蒸し、うちつぶして平たくしたもの。「うちまかする。わたす。

うちくる……〔打呉る〕（他動、ラ下一）

うちくるぶし〔内踝〕（名）內側へ向いたくるぶ

し。(外郎の對)

うちぐるま[内車](名)㊀器械の内部にあって見えぬやうに装置せられた車輪。㊁自家用の人力車。

うちぐるわ[内郭](名)城中の内部にある郭。

うちぐろ[内黒](名)内側の黒いこと。

うちげいき[内景氣](名)取引所で、大引後や日曜日などに、次の立會の相場を豫想して賭をすること。

うちげいしゃ[内藝者](名)料理屋などにかかる藝者。

うちけし[打消](名)㊀うちけすこと。㊁〔文法〕事物の動作又は存在を否定すること。動詞の未然形の下に「す」「じ」「まじ」(文語)、「ない」「ぬ」(口語)等の助動詞を添へてあらはす。

うちけす[打消す](他動、サ四)さういふことはないときめる。否認する。

うちけつ[打消つ](他動、タ四)「消す」の古語。

うちけんかん[内玄關](名)主として家人の出入する玄關。ないげんくわん。

うちこ[打粉](名)刀劍を研ぎ又は手入する時に用ひる砥粉。

うちこう[打更ふ](他動、ハ下二)㊀更に改めて打つ。㊁金屬製の器具を更に改めて鍛へる。

うちこぶり[内冠](名)從五位下の内位に叙せられること。(古語)

うちこさく[内小作](名)小作人を自宅に住ませて小作をさせること。

うちこし[打越](名)㊀酒宴で、他人を越えて侍別に名ざして盃をさすこと。㊁連歌、俳諧の連句の式目中に於ける制禁の一。單調を嫌ひ各句に於ける詞の重複、衝突を避ける爲に起る。去嫌(さきらひ)。指合(さしあひ)。㊂(建)建築で、或點を越えて測る長さ。

うちこす[打越す](他動、サ四)越す。

うちこないしんのう[有智子内親王](名)〔人〕嵯峨天皇の皇女。詩文をよくし、弘仁五年賀茂の齋院となる。加茂齋院の始め。承和十四年(一五〇七)薨。年四十一。

うちこみ[打込](名)㊀うちこむこと。㊁劍道で、初心のものが、先輩を相手に竹刀のさばきを練習すること。㊂芝居の囃子で、大太鼓を音高く打つこと。㊃女學生の袂などに手紙や名刺を私かに入れること。

うちこむ[打込む](他動、マ四)㊀たたきこむ。㊁なげこむ。㊂ほれこむ。㊃攻めかかる。㊄熱心に思ひこむ。㊅意所なつく。言ひこめる。

うちこむ[打籠む](他動、マ下二)押しこむこと。「打籠む」を強めていふ。

うちこゆ[打越ゆ](他動、ヤ下二)「越ゆ」を強めていふ。

うちころす[打殺す](他動、サ四)㊀「殺す」の意を強めていふ。㊁たたき殺す。㊂彈丸を放って殺す。

うちころも[裏衣](名)凡骨の着る衣。

うちころわし[打毀](名)㊀うち毀すこと。㊁暴民が徒黨をなして民家を毀すこと。

うちさし[内差](名)内部からとがすこと。

うちざた[内沙汰](名)㊀表向でない公事。㊁ないのの沙汰。

うちさぶらい[内侍](名)殿中の侍の詰所で、母屋の周圍の板敷の疊を敷いた所。(遠侍の對)

うちさま[内樣](名)禁裏方。宮方。官軍方。

うちさまず[打冷ます](他動、サ四)「いる」の古語。

うちさむらい[内侍](名)(うちさぶらい)

うちさめ[打鮫](名)刀の柄の飾にするもので、鮫皮の知く粒なる打出した金銀の薄板。

うちしき[打敷](名)㊀布帛の敷物。㊁寺院の高座又は佛壇などにかける布帛。

うちじに[討死](名)敵と戰って死ぬこと。

うちすいかん[内衆](名)寮に住んでゐるすべての人。

うちすいしん[打水干](名)砧で打って光澤を出した水干。

うちすえる[打据ゑる](他動、ア下二)㊀据ゑる」を強めていふ。㊁打倒す。

うちすがる[打縋る](自動、ラ四)「縋る」を強めていふ。

うちすぐ[打過ぐ](自動、ガ上二)「過ぐ」を強めていふ。

うちすぐり[内造](名)屋内の造作。(古語)

うちすぐる[打過ふ](自動、ハ四)うちすぐ。

うちすずめ[内雀](名)〔動〕鱗翅類の蛾の一種。色は暗褐色、腹背に黑褐色縱走線がある。前翅中央に一條の太い黑色縱走帶があり、後翅の中央は帶紅色。

うちすて[打捨](名)㊀すてること。㊁きりすてること。

うちすつ[打捨つ](他動、タ下二)「捨つ」を強めていふ。すてる。㊁きりすてる。にすること。

うちすてる[打捨てる](他動、タ下一)「うちすつ」の口語。

うちすみ[内住](名)㊀昔、内裏に住居したことの稱。(里住の對)(古語)㊁藏人や女房の常に宿直するもの。

うちせあみ[打瀨網](名)〔漁〕海底を曳きまはして魚を捕へる引網。うたせあみ。トロール網。

うちせん[内鐵](名)桶板の彎曲した内面を削る用ひる鉋。

うちそ[打麻](名)麻を打って柔かくしたもの。

―かけ[打麻懸](枕)「うむ(績む)」の枕詞。

―はし[打麻はし](枕)「うむ(績む)」の枕詞。

うちたいらぐ[討平ぐ](他動、ガ下二)討って平定する。

うちたいらげる[討平げる](他動、ガ下一)(うちたいらぐ)の口語。

うちたえ[打絶](副)常に。しじゅう。その後は。全く。

―て[打絶えて](副)全く。さっぱり。

うちたおす[打倒す](他動、サ四)㊀たおす」を強めていふ。㊁たたきたおす。㊂うちだし。

うちだ[打出](名)㊀うちだし。㊁うちはじめ。

うちだいこ[打出太鼓](名)興行物のはれに打鳴らす太鼓。うちだし。

―ぼり[打出彫](名)金屬の表面から打出した模樣を浮彫で仕上げること。うちだし。

うちだす[打出す](他動、サ四)㊀うちはじめる。㊁うって出す。㊂興行物のはれに打出太鼓を打って見物人を歸らせる。㊃金具などを裏から打って表へ模樣を高く出す。㊄田地などを檢地して餘地を見出す。

うちたたく[打叩く](他動、カ四)ぶつ。なぐる。ちやうちゃく(打擲)する。

うちたち[打太刀](名)〔舞〕貨用の太刀。(御太刀の對)㊀たちうち。

うちたれがみ[打垂髮](名)婦人・兒童の髮を結び上げないで、垂れたもの。(古語)

うちだろあん[内田魯庵](名)〔人〕文學者。名は實。初め不知庵、後に魯庵と號した。東京市の人。「復活」「罪と罰」等の飜譯、「獄の舌」「バクダン」「露魚の自傳」「思ひ出す人人」「典錄の腰壇」等の著がある。昭和四年(一五八九)歿。年六十二。

うちちがい[打違](名)㊀すちかひ。十の字を斜にした形。㊁ゆきちがひ。

うちちごう[打違ふ](自動、ハ四)㊀互に交叉する。㊁ゆきちがふ。

うちちごう[打違ふ](他動、ハ下二)㊀交叉させる。㊁ゆきちがはす。「ちがう」。

うちちょうちゃく[打打擲](名)(ちょうちゃく)にあてる蝶番。

うちちらす[打散らす](他動、サ四)㊀「散らす」を強めていふ。㊁敵を追ひちらす。

うちつく[打附く](他動、カ下二)㊀うちあてる。㊁投げつける。

うちつくに[内國](名)㊀地方に對して都近しい。㊁うちだしたいこと。㊂模樣などを裏から表に打出すこと。㊃女房の裝束の袖などの襟の下から出して一種の裝飾とすること。㊄演劇・相撲などの終り。大太鼓を打つからいふ。

―だいこ[打出太鼓](名)興行物のはれに打鳴らす太鼓。うちだし。

―ぼり[打出彫](名)金屬の表面から打出した模樣を浮彫で仕上げること。うちだし。

うちだす[打出す](他動、サ四)㊀うちはじめる。㊁うって出す。㊂興行物のはれに打出太鼓を打って見物人を歸らせる。㊃金具などを裏から打って表へ模樣を高く出す。㊄田地などを檢地して餘地を見出す。

五識内。㊀外國に對して我が國。(以上古語)

うち-つ-つけ〔打附〕(名) ㊀なげつけ。㊁俄か。だしぬけ。㊂鎧胄。むしまだに。**—がき**〔打附書〕(名) ㊀はしりがき。なぐりがき。㊁書簡文に、時候の挨拶を略して直ちに用事を書き、又、表書に脇附なつけぬこと。㊂うは書に脇附をつけぬ書狀。**—げそう**〔打附懸想〕(名) だしぬけに懸想の意をいひあらはしていひよること。(古語) **—ごころ**〔打附心〕(名) 俄かに思ひ立つ心。(古語) **—ごと**〔打附言〕(名) むきなりにいふことばなどをいふ言。(古語) **—じょう**〔打附錠〕(名) 箪笥などに用ひる錠前。**—ぶち**〔打附縁〕(名) 釘で打附けた緣。

うち-つ-つ-ける〔打附ける〕(他動、カ下一)「うちつく」の口語。

うち-つ-つ-ずく〔打續く〕(自動、カ四)「つづく」の意を強めていふ。

うち-つ-つ-みかど〔内罪〕(名) 天罰。神罰。(古語)

うち-つ-つ-みかど〔内御門〕(名) 奥の方の門。禁裏「宮。(古語)

うち-つ-みや〔内宮〕(名) 皇后のいます御殿。後

うち-つ-みやけ〔内官家〕(名) 内國の御料地の意。上古、三韓を任那に置いて、人民を鎮撫し政務を掌しもべられた官廳。

うち-つ-る〔打連る〕(自動、ラ下二)「つれだつ。

うち-て〔打手・討手〕(名) ㊀討伐に向かふ人人。うって。㊁銃砲などうつ人人。

うち-て〔打出〕(名)「うちでのこづち。(古語) **—の-こづち**〔打出小槌〕(名) 打てば何でも心任せに出るといふ槌。**—の-たち**〔打出太刀〕(名) 金銀を打延べて飾った太刀。**—の-はま**〔打出濱〕(名)【地】㊀滋賀縣滋賀郡膳所の北方の湖濱。逢坂關を出た所にあたる。歌枕の一。㊁兵庫縣武庫郡の東端から蘆屋川の口に至る約三粁半の海濱の舊稱。

うち-で-し〔内弟子〕(名) 師匠の家に同居してゐる「弟子。塾生。

うち-てだい〔内手代〕(名) 我が家に同居せしめておく手代。

うち-と〔内外〕(名) ㊀うちとそと。(古語) ㊁内國と外國。㊂伊勢の内宮と外宮。㊃佛教と儒教。㊄表向と奥向。**—の-ふみ**〔内外典〕(名) 佛書と儒書。内典と外典と。**—の-みや**〔内外宮〕(名) 伊勢の内宮と外宮と。**—の-もの**〔内外者〕(名) 家内中の者。皆のもの。

うち-とく〔打解く〕(自動、カ下二) ㊀解ける。㊁隔てなく交はる。心をうちあけて親しむ。㊂心に心配がなくなる。うちくつろぐ。㊃ゆるむ。油斷する。

うち-とけ〔打解〕(名) うちとけること。**—がお**〔打解顔〕(名) うちとけて語る言葉。うちあけなし。むつごと。(古語) **—ごと**〔打解言〕(名) とりみだした姿。だらしない姿。**—すがた**〔打解姿〕(名) うちとけてするつつみかくしのない話。**—ばなし**〔打解話〕(名) うちとけて語る言葉。**—ぶみ**〔打解文〕(名) 心をうちあけた手紙。(古語) **—まさり**〔打解優〕(名) うちとけた姿の、うちとけぬ時より却って優ってゐること。(古語) **—わざ**〔打解業〕(名) うちとけたしわざ。ふざけごと。じゃうだん。(古語)

うち-とける〔打解ける〕(自動、カ下一)「うちとくの口語。

うち-とす〔内外す〕(自動、サ變) 出いりする。許されて奥向に出いりする。(古語)

うち-とねり〔内舎人〕(名) ㊀中務省に屬した官。公家の子弟を登庸し、禁裏のことをならはしたもので、朝廷に宿衛し、雜役に從事し、行幸に供奉し警衛したもの。㊁東宮職と主殿寮との判任官。うどれり。光彈を出す業をする爲に設けた建物。(古語)

うち-と-む〔打留む〕(他動、マ下二) ㊀打附けて落ちぬやうにする。㊁弾丸をうちあてる。しとめる。㊂奥行を止める。

うち-と-む〔撃止む・討止む〕(他動、マ下二) ㊀斬り殺す。㊁職で殺す。

うち-どめ〔打留〕(句) 終り。結句。

うち-と-める〔打留める〕(他動、マ下一)「うちとむ」の口語。

うち-と-める〔撃止める・討止める〕(他動、マ下一)「うちとむ」の口語。

うち-どり〔内取〕(名) ㊀昔、相撲部會の二日前に練習として行ふ相撲。㊁親方のうちでする稽古相撲。

うち-とる〔撃取る・討取る〕(他動、ラ四) ㊀攻め討って奪ひとる。㊁討ち殺す。

うち-とる〔打取る〕(他動、ラ四)「とるを強めていふ。

うち-な-む〔打眺む〕(他動、マ下二)「ながむ」を強めていふ。

うち-なびく〔打靡く〕(自動、カ四)「なびくを強めていふ。「枕詞。

うち-ならし〔内馴・内習〕(名)「うちうちの練習。したげいこ。

うち-ならし〔撃鳴〕(名) けい(磬)。

うち-ならす〔打鳴す〕(他動、サ四) ㊀ならすを強めていふ。㊁たたいてならす。

うち-に〔打荷〕(名) 船舶が風波に遭って危險な場合に、其の積荷の幾部分を海中に投ずること。

うち-にわ〔内庭〕(名) 家の室と室との間にある庭。中庭。

うち-ぬき〔打抜〕(名) ㊀うちぬくこと。㊁ほりぬき井戸。㊂鎧のないつら。㊃たがれ」で板金などに孔をあけること。

うち-ぬく〔打抜く〕(他動、カ四)「ぬく。ぬく。

うち-ね〔撃根〕(名) 敵に投げつける武器で、形は矢に似て、太く短い。「いふ語。

うち-ねずみ〔内鼠〕(名) 世間知らずの人を罵って

うち-の〔内野〕(名)【地】㊀奈良朝の御獵地で、奈良縣宇智郡の野の古稱。㊁京都市上京區の西部の地。大内裏址の野。

うち-の-いや-の-かみ……ゐ……ゐ……ゐ〔内禮正〕(名)「うちのゐやのつかさ」の長官。

うち-の-いや-の-つかさ……ゐ……ゐ〔内禮司〕(名) 昔、中務省に屬し、宮中の禮儀を掌った役所。

うち-の-うち〔家内〕(名) 家の内。かない。

うち-の-え……ゑ〔内重〕(名) 内の園。又、その内。(古語)「じょう(内大臣)。(古語)

うち-の-おおおみ……ぉぉ……ぉぉ〔内大臣〕(名) ないだいじん。(古語)

うち-の-おおおみ……ぉぉ……ぉぉ〔内大野〕(名)【地】うちの(内野)の別ち、奈良縣宇智郡の野の古稱。

うち-の-おおまえつぎみ……ぉぉ……ぉぉ〔内大臣〕(名) ないだいじん。

うち-の-おとど〔内大臣〕(名) ないだいじん。

うち-の-かしわで-の-かみ……ぁぁ……ぁぁ〔内膳正〕(名)「うちのかしはでのつかさ」の長官。ないぜんのしやう。(古語)

うち-の-かしわで-の-つかさ……ぁぁ……ぁぁ〔内膳司〕(名) 昔、宮内省に屬し、供御の事を司った役所。ないぜんし。(古語)

うち-の-かにもり-の-かみ〔内掃部頭〕(名)「うちのかにもりのつかさ」の長官。うちのかもりのかみ。(古語)

うち-の-かにもり-の-つかさ〔内掃部司〕(名) 昔、宮内省に屬し、宮中の疊及び修繕をつかさどったが、後、掃除の事を司るやうになった。うちのかもりのつかさ。(古語)

うち-の-くすり-の-かみ〔内藥正〕(名)「うちのくすりのつかさ」の長官。(古語)

うち-の-くすり-の-つかさ〔内藥司〕(名) 昔、中務省に屬し、宮中の醫藥の事を司った役所。

うち-の-くら-の-かみ〔内藏頭〕(名)「うちのくらのつかさ」の長官。(古語)

うち-の-くら-の-つかさ〔内藏寮〕(名) 昔、中務省に屬し、宮中の金銀・珠玉・寶器・綾錦、其の他一切の財寶に關する事務を司った役所。くられう。(古語)

うち-の-ごしょどころ〔内御書所〕(名) 昔、至尊附屬の書籍を管理した所。又、臨時に文人に詩歌を作らせ、學生の試驗を行った所。

うち-の-しるすつかさ〔内記司〕(名) 昔、中

務省に屬し、詔勅を作り、記錄を司つた役所。ないき。

うちの・たくみ・の・かみ〔内匠頭〕(名)「うちのたくみのつかさ」の長官。たくみのかみ。

うちの・たくみ・の・つかさ〔内匠寮〕(名) 昔、中務省に屬し、宮中の修繕其の他寶院などの奬御の事を司つた役所。たくみれう。

うちの・つわもの・の・くら……〔内兵庫〕(名) 昔、御料の兵器を司つた役所。**―のかみ**〔内兵庫頭〕(名)「うちのつわものくらの長官。

うちの・とねり〔内舍人〕(名) うちとねり。

うちの・ひと〔内の人〕(名) 妻が第三者に向かつて夫を呼ぶ稱。宅。やど。

うちの・ひめみこ〔内姫御子・内親王〕(名)(ないしんのうの項親王)。(古語)

うちの・べ〔打延〕(名) うつてのばすこと。

うちの・ぼる〔打上る〕(枕)「さほ」(佐保)の枕詞。

うちの・みこ〔内御子〕(名)(ないしんのうの項親王)。ひめみこ。(古語)「みうち。⊖いへに仕へる人。

うちの・もの〔内の者〕(名) ⊖いへのうちの人。

うちの・り〔内法〕(名) ⊖箱狀の構造物の一内邊より他内邊までのさしわたし。⊖中空體の中空部の縱・横・深さ。⊖柱と柱との内側の距離。⊖鴨居と敷居との距離。

うちの・れん〔内簾〕(名) 店と奥とを仕切る爲

うちば〔内端〕(名) うちき。ひかへめ。

うちはえて……〔打延へて〕(副) うちつづいて。ながながと。(古語)

うちばかま〔打袴〕(名) 板引にした女官の袴で、材料は平絹袤裏共に紅。晴の場所に用ひる。

うちはし〔打橋〕(名) 建物と建物との間に、假にかけた橋。(古語)

うちはじ・む〔打始む〕(他動・マ下二) ⊖始める。著手する。⊖打つことを始める。

うちはずしざま……〔打外樣〕(名・副) 今少しで外れたかと思はれる程に、辛うして打ちあてること。

うちはたす〔討果す〕(他動・サ四) き

うちはちもんじ〔内八文字〕(名) 遊女などが郭内を練り行く歩み方。兩足の爪先を内方に向けて

うちはちに〔打放に〕(副) ふしつけに。

うちはば〔内馬場〕(名) 昔、天皇が射御を御覽になつた武德殿前の馬場。

うちはむ〔打欲む〕(他動・マ下二) しまへ、こんでおくゝおしこめて閉ぐ。(古語)

うちはやし〔打囃〕(名) 太鼓や鼓などうちはやす

うちはやす〔打囃す〕(他動・サ四)「はやす」を強めていふ。

うちはらい……〔打拂〕(名) ⊖うちはらふこと。⊖神前などの塵を拂ふ具。塵拂。

うちばらい〔打拂〕(名) 内金の支拂。

うちばり〔内張〕(名) 兜の名所。うけはり(浮張)。

うちばり〔梁〕(名) うつばり。はり。

うちばり〔内張〕(名) 内側に張つたもの。**―いた**〔内張板〕(名) 船の肋骨の内面に張つた板。

うちはろ・う〔打拂ふ〕(他動・ハ四) ⊖拂ひきよめる。⊖逐ひ拂ふ。⊖銃砲などうて敵を追ひ散らす。

うちばん〔打盤〕(名) 物を打つに用ひる盤。

うちひ〔打樋〕(名) かけわたしたとひ。かけひ。(古語)

うちび〔打火〕(名) 燧石でうち出す火。きりび。

うちひく〔打引く〕(他動・カ四) 責めさいなむ。いぢめる。(古語)

うちひ・さす〔打日刺す〕(枕)「宮」「都」の枕詞。

うちひそ・む〔打顰む〕(自動・マ四)「ひそむ」を強めていふ。顔をしかめて泣面をする。

うちひと〔内人〕(名) ⊖内藏の人。(古語)⊖伊勢神宮に奉仕し神饌の事を掌る神官。うちんど。(古語)

うちひも〔打紐〕(名) 二筋以上の絲で組んだ紐。くみひも。組紐。

うちひら・く〔打開く〕(他動・カ四)「ひらく」を強めていふ。

うちひら・く〔打開く〕(自動・カ四)「ひらく」を強めていふ。

うちひら・く〔打開く〕(自動・カ四)「ひ

うちぶ〔打歩〕(名) ⊖〔經〕株券又は爲替の實際價額と額面價額との差。⊖兩替で、呼値の等しい通貨間爲替手形が額面以上に賣買せられること。**―そうば**……〔打歩相場〕(名)〔經〕外

うちふ・す〔打臥す〕(自動・サ四) ふせる。

うちふだ〔打札〕(名) ⊖たてふだ。たかふだ。⊖手の内から打出す札。(めくり札の對)

うちふ・ぶところ〔内懷〕(名) ⊖肌に近い懷中。⊖相撲で胸部に接近した所。⊖ないしふ。内情。

うちふ・る〔打振る〕(他動・ラ四) ⊖ふるひうごかす。⊖ふりすてる。見捨てる。

うちふ・れり〔内耗〕(名) 玄米を搗いて白米とする時、元の量に比して幾分を減ずること。又、その減ずる量。

うちへ・んけい〔内辨慶〕(名) 家の外では意氣地がないが、家の内では威張り散らすこと。うちひろがり。かげべんけい。

うちほう……〔打延ふ〕(自動・ハ下二)「うちのばす」の項。

うちほ・ぐ〔内濠〕(名) 城の内部のほり。

うちほろぼ・す〔討滅ぼす〕(他動・サ四) 攻めほろぼす。

うちまいり〔内參〕(名) 宮中へ參内すること。

うちまか・す〔打任す〕(他動・サ下二) ⊖見てゐ擧げて一任する。⊖放任する。そのまゝにする。

うちまかせ・ては……〔打任せては〕(副) 大方は。

うちまき〔打撒〕(名) ⊖まちなびの爲にふりまく米。さんまい(散米)。(古語) ⊖米の異稱。⊖米だはら。

うちまく〔内幕〕(名) ⊖幕の一種。外蓑(ゝ)の内に張るもので、上部は布を横幅に縫ひ、下部は縱幅に縫合せたもの。⊖ないしふこと。うちうちのこと。内情。内實。裏面。

うちまた〔内股〕(名) うちもも。**―ごうやく**〔内股膏藥〕(名) 自分にしっかりした意見がなくて、こちらについたりあちらについたりするもの。**―もの**〔内股者〕(名) 内股膏藥の人。

うちまたげ〔打跨〕(名) またがること。

うちまち〔内襠〕(名) 股引の内側の襠。

うちまめ〔打松〕(名) 大豆を輕く煮て乾かし、槌で打ちつぶしたもの。多く汁の中に入れ等して食ふ。

うちみ〔打身〕(名) ⊖身體を打ち傷めたきずが時時痛むこと。挫傷。⊖刺身。

うちみ〔打見〕(名) うはべから見た樣子。

うちみ・しゃぐ〔打拉ぐ〕(他動・ガ四) うちひしぐ。叩きつぶす。

うちみず〔内御簾〕(名) 昔の殿場で、舞妓につづいて八間の間の下袴殿の稱。

うちみ・みず〔打水〕(名) 塵を鎭め又涼氣を取る爲に地に撒く水。

うちみだり〔打亂〕(名) ⊖とりみだすこと。⊖うちみだりのはこ。**―のはこ**〔打亂笈〕(名) 昔、化粧道具や手拭などを入れた蓋のないはこ。

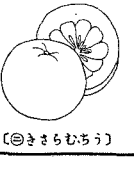
うちむらさき〔内紫〕(名) 紫草は左右同形で、外面は帶黃汚白色で、内面は暗紫色。淺海に產する。

うちもう〔内股〕(名) ⊖〔植〕芸香(ゝ)科の常綠喬木。暖地に栽培せられる。高さ三米位。葉は大形で厚く、卵圓形をなし、震葉甚だ大。夏、白花を開く。果實は冬季に熟し、外皮は厚く黃褐色、肉は淡紫色、味は甘美で生食する。朱欒。文旦。さぼん。

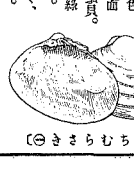
うちむろ・ぐ〔内室造〕(名)〔建〕家の屋根裏を見せて天井を張らゐ造り方。

うちめ〔打目〕(名) 着物についた砧の痕。

うちもうこ〔内蒙古〕(名)〔地〕Inner Mongolia) 支那北部に横たはる蒙古の中、ゴビ沙漠以南の土地



〔㊀きさらむちう〕



〔㊁きさらむちう〕

で、遠河・駿河流域は東部内閣古と稱し、我が同胞が多く入り、拓植産に商業に従事してゐる。

うちもの〔打物〕(名) ㊀打ちきたへた武器、卽ち刀槍の類。㊁打ちきたへて造つた金屬の器具。㊂槌で打つて光を出した布帛。㊃打鳴らす樂器、卽ち鐘・鼓の類。㊄みちん粉に砂糖を交ぜ、型に入れて打つた菓子。—し〔打物師〕(名) 刀劍を鍛へる職人。刀工。—よこし〔打物汚〕(名) 刀をよこすのみで效のないこと。—わざ〔打物業〕(名) 刀劍を持つてうちあふこと。

うちもも〔内股〕(名) 股の内側。うちまた。

うちもらす〔討漏らす〕(他動・サ四) 討ちとることができないで逃げられる。

うちやぶる〔打破る〕(他動・ラ四) ㊀やぶる。うちこはす。㊁敵をやぶる。

うちやる〔打遣る〕(他動・ラ四) 捨てておく。うつちやる。

うちゆ〔内湯〕(名) 温泉場で、旅館などの屋内に設けた浴場。

うちゅう〔宇宙〕(名) (宇は天地四方、宙は古往今來の意。又、一說に、宇は天の翼ふ所、宙は地の由る所。卽ち天地の義)㊀天地。世界。凡ての物を包容する空間。㊁空間と時間とを。天地古今。—いんりょく〔宇宙引力〕(名)【理】(ばんゆういんりょく)萬有引力。—じゅうりょく〔宇宙重力〕(名)【理】(ばんゆうういんりょく)萬有引力。—しんきょう〔宇宙神教〕(名)【宗】神は萬有の全從であるから宇宙の生命は遂に悉く救濟せられると主張する基督教の一派。—ろん〔宇宙論〕(名)【哲】宇宙の本體・起原・構成・目的・法則・歷史・運動等に關する根本的原理を論ずる學問。—ろんてきしょうめい〔宇宙論的證明〕(名)【哲】有神論の一。宇宙の存在は歷然たる事實で、微妙高大なる原因を追究すれば、神の創造と神の存在に到達せざるべからずと論ずるもの。

うちゆき〔雨注〕(名) 矢・彈丸などが、雨の降りかかるやうに注ぐこと。

うちゆうじょう〔右中將〕(名)(うこんえのちゅうじょう)(右近衛中將。

うちゆうべん〔右中辨〕(名)「うべん」(辨の條を見よ。

うちゆく〔打行く〕(自動・カ四) ㊀行くを強めていふ。㊁馬に乘つて行く。(古語)

うちょう〔有頂〕(名) 有頂天の略。—てん〔有頂天〕(名)【佛】九天中の最上の天。慾界及び色界、卽ち形ある世界の最上に位する。㊁好む所に甚だしく熱中して、他を顧みぬこと。

うちようじ〔打楊枝〕(名) 先の方を打碎いて總ゐのやうにした楊枝。房楊枝。

うちよす〔打寄す〕(自動・サ下二) ㊀乘馬を近寄らせる。

うちよする〔打寄する〕(他動・サ變) ㊀よせ來る。おし寄せる。㊁乘馬を近寄らせる。

うちよする〔打寄する〕(枕)「すがの(駿河)の」の枕詞。

うちよりあい〔內寄合〕(名) うちうちのもの。

うちりょうず〔內領ず〕(他動・サ變) うちだたく。ちやうちやくする。(古語)

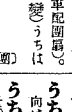
うちろじ〔內露地〕(名) 庭園で、中くぐりより內の稱。

うちろんぎ〔內論議〕(名) 昔、正月十四日の御齋會の結願の日に、天皇の御前で經文の問答をしたこと。

うちわ〔內輪・內曲〕(名) ㊀うち。家內。一家親族。㊁味方。㊂國內。㊃內密。內證事。㊄控目勝なこと。ですぎぬこと。—げんか〔內輪喧嘩〕(名) うちわもめ。家內の爭。㊁同志の紛議。內紛。うちわわれ。—もめ〔內輪揉〕(名) ㊀家內の爭。㊁同志の紛議。內紛。うちわわれ。

われ〔內輪割〕(名) うちわもめ。

うちわ〔團扇〕(名) (うちわのる)。㊁竹條を骨とし、紙又は絹を張つて柄をつけ、風を起こすに用ひる具。多くは圓形。㊂(ていねいにいふ)(軍配團扇)。—す〔團扇す〕(他動・サ變) うちはであふぐ。—だいこ〔團扇太鼓〕(名) 一枚革の圓く張つて柄をつけた太鼓。日蓮宗信者の題目を唱へる時に叩く。



〔團扇太鼓〕

くもの。—とんぼ〔團扇蜻蛉〕(名)【動】蜻蛉の一種。體長約八糎、黑色黑色で、背面には黃色の斑紋があり、胸背には W 字形の黑色紋がある。尾端に近い部分が平たく廣がつて團扇の形をなしてゐる。體に滑質鱗狀の小刺があり、腹部の皮膚がのびひろがつて團扇狀の小刺があり、腹部の皮膚がのびひろがつて團扇の形をなしてゐる。—を揚げる(句) 角力で、行司が勝つた方へ軍配團扇を揚げる。轉じて勝つたものとさめる。

うちわかれ〔打別〕(名) うちわけ(打分)。

うちわけ〔打分〕(名) 團扇で、一勝一敗して勝負のつかぬこと。

うちわけ〔內分〕(名) 本家の知行の一部を別家に與へて、本家にはな全高の名義を稱すること。

うちわけ〔內譯〕(名) 金錢・物品の總高を記し、それを小分けにして品名・理由等を記載すること。—しょ〔內譯書〕(名) 內譯の明細書。

うちわた〔打絁〕(名) ㊀繰綿を絹弓で打つたもの。(古語)㊁古綿を絹弓で打つたもの。—きかい〔打綿機械〕(名) 原綿を打つて纖維をほぐす機械。

うちわたし〔內渡〕(名) 金額の一部を渡すこと。

うちわたし〔打渡〕(副) 大方・おしなべて。(古語)

うちわたす〔打渡す〕(他動・サ四) ㊀「渡す」を強めていふ。㊁馬に乘つて渡り越える。(古語)㊂廣く見渡す。㊃廣く行きわたる。(古語)

うちわたす〔打渡す〕(枕)「なが(長)」「をち(遠)」の枕詞。

うちわたり〔內邊〕(名) 內裏。禁裏。

うちわたる〔內渡る〕(自動・ラ四)「わたる」を強めていふ。

うちわに〔內鰐〕(名) 鰐足の一。爪先を內の方に向けてゐるもの。(外鰐の對)

うちわり〔內割〕(名) ㊀內べりによつて減じた分量。(外割の對) ㊁よれひ(歩合)。

うちわりびき〔內割引〕(名)【經】(ぎんこうわりびき)(銀行割引)。

うちわる〔打割る〕(他動・ラ四) ㊀わる。㊁打割る。㊂打明く。

うつ〔鬱蒸〕(名) 氣の塞ぐこと。思ひのむすぼれることと。心のはれやかならぬこと。

うつ〔壓つ〕(自動・タ下二) けおされる。壓倒される。負ける。

うつ〔打つ〕(他動・タ四) ㊀たたく。ぶつ。㊁たたいて鳴らす。㊂うち込む。たたき入れる。㊃砧でつやを出す。㊄綿弓などではじく。㊅斬る。殺す。㊆攻める。㊇放射する。㊈彈く。撞く。㊉投げる。㊊構へる。設ける。張る。㊋附ける。㊌附著させる。㊍作る。製造する。㊎たたきのばす。㊏耕す。鋤きかへす。㊐非難する。なじる。㊑勝負ごとをする。㊒馬に乘つて行く。㊓行ふ。する。㊔綱あはせる。㊕手附を渡す。㊖興行をする。㊗ないがしろにする。㊘(イ)打つ」はたたく。(ロ)「撃つ」は強くたたく。(ハ)「討つ」は「伐つ」は罪惡のある者を兵を以てうちこらす。—打たるる杖もゆかしい(句) 親の折檻が却つて嬉しい。—打てず押されず(句) 負けず劣らず。—打てば響く(句) すぐに感應する。すぐに感應する。(古語)

うつ〔乘つ〕(他動・タ下二)すつ。散らす。(古語)

うつ〔空・虛〕(接頭) 中の空虛な意。うつろ。「せみ」(空蟬)。

うつ〔全〕(接頭) 全部の意。「はぎ」(全剝)。

うつあさ〔打麻〕(名) うちやはらげた麻。(古語)

うつあし〔內足〕(名) ひかがみ(膕)。(古語)

うつうつ〔鬱鬱〕(名・副) ㊀心が塞いで樂しからぬさま。氣分の晴晴しないさま。㊁草木などの茂るさま。㊂霞・雲などの盛んなさま。

うつうつ〔現現〕(名・副) 半ば醒め、半ば眠つてゐるさま。

うつおつ〔空・虛〕(名) ㊀うつろ。から。㊁重れる着物のないこと。(古語)

うつぎ〔卯木〕(名)【植】(ぎ)(卯)の異名。—かもん〔空紋〕(名) 正月、女官叙位の名目。叙位すべき人のない爲に、名目のみを附けて存しおく申文。(古語)

うつぎ〔空木〕(名) うつろになつた木。中の朽ちたうつろの木。—ぐさ〔空草〕(名)【植】(ぎ)の。

うつころも〔空衣〕(名) 昔の一種の衣服。今の素絹の類。(古語)

うつばしら〔空・柱〕

(名) 箱柱の竪柱。雨水を受けるもの。たてどひ。はことひ。**—ぶね**[空舟](名) 大木をくりぬいて造った舟。まるきぶね。

うつほうを[靫・靭・空穂](名)「うつぼ」の轉。

うつ・かいわいく[鬱悒](名) 心のむすぼれること。心の晴れやかならぬこと。

うつかり(名・副) ❶氣ぬけがしてぼんやりすること。きぬけ。❷心つかずに。うかと。**—もの**[うつかり者](名) 氣ぬけしてぼんやりしてゐる人。うつけもの。ぼんやり。

うつ・き[鬱氣](名) ❶こもりふさがる氣。❷氣のふさぐこと。心の晴れやかでないこと。

うつ・ぎ[空木・卯木・溲疏](名)【植】虎耳草(ゆきのした)科の落葉灌木。高さ二米位。樹皮は淡褐色で鱗片狀なし、幹は實堅くして中空。葉は對生で、楕圓形、緣は鋸齒がある。夏の初めに、白色・五瓣花を圓錐狀に綴る。果實は藥用、材は木釘に用ひられる。**—がき**[卯木垣](名) うつぎの生垣。

〔ぎつうう〕

うつくし[愛し](形シク) ❶愛らしい。かはゆい。❷美しい。**—がる**[愛しがる](他動・ラ四) 愛らしいと思ふ。かはゆく思ふ。いつくしむ。(古語) **—ずま**[愛妻](名) かはゆい妻。(古語)

うつくし[美し](形シク) ❶うるはしい。綺麗である。見事である。あでやかである。みめよし。❷心持ゝ行ひがいきよい。**—い**[美しい](形) 「うつくし」の口語。

うつくしみ[愛・慈](名) うつくしむこと。いつくしみ。慈愛。仁愛。(古語)

うつくし・む[愛しむ・慈しむ](他動・マ四) いつくしむ。愛する。かはゆがる。親しむ。(古語)

うつ・くつ[鬱屈](名) ❶心のふさぐこと。❷物事「のふさがり滯ること。

うつけ[空・虛・呆氣](名) ❶中の空しいこと。から。空虛。❷ぼんやり。うつかか。**—じん**[空人](名) ぼんやりした人。**—もの**[呆氣者](名) おろかもの。ぼんやりのろま。うつかり。痴漢。「とも。

うつけつ[鬱結](名) 氣がふさいで面白くないこと。

うつけつ[鬱血](名) 靜脈管内に靜脈血が鬱積して起る充血。**—りょうほう**[鬱血療法](名)【醫】體面の炎症を早く治療せしめる爲に、患部に吸角を用ひて其の充血を一層盛んならしめ、その吸收を促す治療法。耳鼻・咽喉・男女生殖器等の病氣に應用せられる。

うつこ[鬱乎](副) ❶草木の生ひ茂るさま。❷物事の盛んなさま。❸氣のふさいでゐるさま。

うつこん・こう……[鬱金](名)【植】百合科の多年生草本。高さ七〇糎位。莖は直立し、葉は廣披針形。五月頃、莖頭に鬱鬱な一花を開く。觀賞用。チューリップ。

〔香金鬱〕

うつさん[鬱散](名) 鬱氣を散ずること。きばらし。

うつし[映](名) 影をうつすこと。**—え**[映繪](名) 暗所で、光線の作用によって、ガラスに書いた繪などを物の面にあらはすもの。かげ繪。

うつし[寫](名) ❶寫すこと。寫した書籍。❷謄本。副書。❸模造品。**—あやまり**[寫誤](名) うつしちがへ。誤寫。**—え**[寫繪](名) 書寫した繪。**—かたる**[寫語る](自動・ラ四) 口上を口うつしに行ひつぐ。(古語) **—ちがえ**[寫違](名) うつしまちがふこと。**—もの**[寫物](名) ❶書きうつした文書。❷模造品。

うつし[移](名) ❶移すこと。處をかへること。❷のりかへに備へ置く車馬。(古語) ❸薰物の香を衣類などにたきしめること。❹うつしばな。**—い**[移色](名)「うつしばな」で染めた色。月草の花の色。**—うま**[移馬](名) ❶左右馬寮が、諸國の牧場に放ち飼にしたのを徵して飼ひ置く馬。(古語) ❷のりかへの馬。(古語) **—ぐさ**[移草](名)【植】つゆくさ。**—ぐら**[移鞍](名) 移馬に用ひる鞍。**—どころ**[移心](名) うつりやすい心。うつりぎ。うはき。**—どの**[移殿・遷殿](名)【神】神殿營繕の時、神體を假にうつしておく所。**—のうま**[移馬](名) うつしうま。**—のくら**[移鞍](名) うつしぐら。**—のはい**[移灰](名) 鞍を染める時に用ひる灰。**—ばな**[移花](名)「つゆくさ」の花を摘んで、其の汁を紙にうつしおくもの。**—ぶみ**[移文](名) 同狀。まはしぶみ。

うつし[現し・顯し](形シク) ❶現在にある。❷明かである。たしかである。(古語) **—おみ**[現大身](名) 人の形としてあらはれ給うた神。天皇の敬稱。あらひとがみ。(古語) **—ごころ**[現心・顯心](名) たしかな心。うつつ心。(古語) **—ごと**[現事](名) 意識してするわざ。正氣のわざ。うつし心で行ふわざ。(古語) **—さま**[現狀](名) たしかな有樣。常のまま。(古語) **—びと**[現人](名) この世に生きてゐる人。凡夫。(古語) **—み**[現身](名) 現世の人の身。生きてゐる身。**うつつ・み**[寫す](他動・サ四) ❶原物のとほりに書き取る。❷形を象どって造る。模造する。❸寫眞にとる。

うつ・す[移す](他動・サ四) ❶場所をかへる。おきかへる。❷これをかれにかへる。❸及ぼす。❹變化させる。❺すこしの。❻おくる。あたへる。❼傳染させる。❽文書に認めておくる。❾色をうつす。「をあらはす。

うつ・す[映す](他動・サ四) 照らして影れね。❶氣がむすぼれる。憂へる。❷蔑る。むらがる。積る。❸伸びぬ。とどこほる。❹蔑にのぼる。❺心が嘯ぐ。閉ぢる。❻むす。ねかす。(雜などにいふ。

うつ・す[鬱す](他動・サ變) ❶心が嘯ぐ。閉ぢる。❷むす。ねかす。(雜などにいふ。

うつ・す[鬱す](自動・サ變) ❶蔑る。むらがる。積る。❷伸びぬ。とどこほる。❸氣が塞んにのぼる。

うつ・す[鬱す](他動・サ變) ❶ふさぐ。

うっすら[薄ら](名・副) うっすりと。「ずうす。

うっすり[薄り](名・副) かすかに。ほのかに。

うつせ・がい[虛背貝](名) ❶海濱などにうちよせられた肉の脫けた貝。❷「虛背貝」の轉貝。❸うつぼ貝。「とこほる。つまること。

うつせき[鬱積](名) ❶むすぼれふさぐこと。❷と

うつせみ[空蟬](名) ❶蟬のぬけがら。❷【動】蟬。**—の**[空蟬の・現身の]「秘」「身」「命」「世」「人」「物事の盛んなさま。うつ〳〵。(鬱孚)。

うつせみ[現身](名) 此の世に現在する身。うつしみ。(古語)

うつ・そう[鬱然](名・副) ❶草木の茂るさま。❷むしのはる氣の盛んなさま。「ろこと。

うつそく[鬱塞](名) 陰氣なこと。こもりふさが

うつそみ[現身](名) うつせみ(現身)。(古語)

うつそり(名・副) うっかり。ぼんやり。**—もの**[うつそり者](名) うっかりもの。

うつ・たえ[鬱滯](名) ふさがりとどこほること。

うつ・たえ[打栲](名) 打ってうるはしくした栲。(古語)

うったえ[訴](名) 訴へること。訴訟。**—に**[訴に](副) ❶びたすりに。ひとへに。(古語) ❷うちつけに。やがて。(古語)

うった・える[訴える](他動・下一)(うったう)の口語。

うったらそう[鬱多羅僧](名)【佛】(梵 Uttarasaṅga) 七條の袈裟。

うっちょうしゅ[鬱鬯酒](名) 昔、支那で宗廟の神に捧げた酒で、鬱金の香の汁を黑い黍に交ぜて醸造したもの。

うつつ[現](名) ❶この世に現在してあること。現實。(古語) ❷眠のさめてゐる時。❸心神のさだかならぬ境。うつらうつらとしてゐること。**—がおころ**[現顏](名) 現に存在する知きやうす。**—ごころ**[現心](名) 本心。正氣。生きてゐる心地。(古語) **—な**[現無](名)「うつつなきこと。**—なげ**[現無げ](名)「うつつなきさま。**—なし**[現無し]

〔現無し〕(形、一)正氣を失ふ。(古語)**—の・ひと**〔現人〕(名)要心した人。正氣を失った人。**—の・やみ**〔現闇〕(名)心の亂れてくらいこと。(古語)**—のゆめ**〔現夢〕(名)此の世のはかない。あとかた。(古語)**—びと**〔現人〕(名)現世の人。此の世に生存せる人。(古語)**—をぬかす**(句)本心を失って女色に耽ける。慨歎とする。心を奪はれる。

うつつ〔打つつ〕(名)〔打撃つ〕(他動、タ下二)す

うつつらおうじ〔鬱頭羅王子〕(名)【佛】特別に長生したと傳へられる王子。(智度論)

うつて〔討手〕(名)賊軍などをおびうつ人。捕手。

うつてがえ〔打手替〕(名)❶かれとこれと入りかはること。❷ひきかへ。❸園棊で、打って相手の一石を取れば、すぐに相手に其の部分の我が石全部を取られること。

うつてかわる〔打て変る〕(自動、ラ四)急に一變する。まるでかはる。

うつてつけ〔打手附〕(名)都合よく適合すること。

うつてんばってん(名)うんでいばんり(雲泥萬里)の誤。

うつとう〔鬱陶〕(名)心のふさぐこと。うるさく思ふこと。—し〔鬱陶し〕(形、二)❶陰氣である。❷心がふさいで晴やかでない。❸うるさい。わづらはしい。—しげ〔鬱陶しげ〕(名)うったうしいさま。—しさ〔鬱陶しさ〕(名)うったうしいこと。又、その度合。

うったう〔訴ふ〕(他動、ハ下二)❶裁判所に申し出で、是非曲直の判決を請ふ。❷不平やうらみを人に告げる。❸或物事の曲直の解決を求める。

ウッド・ガス〔Wood-gas〕(名)木材を乾溜して採取する瓦斯。石炭瓦斯より光の強いもの。

ウッド・タール〔Wood-tar〕(名)木材を乾溜して生ずる黑色又は褐色の粘いタールで、防腐劑などに用ひられる。

ウッド・パルプ〔Wood-pulp〕(名)木材を機械で砕き藥品で處理して製した洋紙の原料。

うっとり〔恍惚〕(名・副)氣を奪はれて茫然たるさま。【古語】

うつなし〔無し〕(形、一)疑ない。たしかである。

うつぬき〔内抜〕(名)内部を空虛にして全く抜きとること。(古語)

うつのみやし〔宇都宮市〕(名)【地】栃木縣の中央部に位し、縣廳所在地。

うつのみやし〔宇津山〕(名)【地】靜岡縣安倍郡と志太郡との境にある山。宇津谷(うつの)峠。

うつはぎ〔全剝〕(名)全く剝き取ること。(古語)

うつはた〔内幡〕(名)裁縫をしないで衣裳となるやうに織つたきぬ。(古語)

うつはた〔打服〕(名)打って和かにした布帛。(古語)

うつはぶり〔梁〕(名)棟を受けるはり。はり。—の**埃も落ちる**(句)(文選の註に「發塵動梁上塵」とと)善く猷ふを賞する句。

うつぶき〔俯〕(名)うつむき。(古語)

うつぶく〔俯〕(名)〔俯く〕(自動、カ四)うつむくさま。(古語)

うつぶけ〔俯〕(名)うつむけ。

うつぶす〔俯す〕(自動、サ四)うつむく。

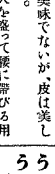
うつぶす〔俯す〕(他動、サ下二)うつむける。

うつぶるいのり〔十六島海苔〕(名)【植】島根縣うつぶるい島に産する紫黑色の海苔。

うつ・ぶん〔鬱憤〕(名)積るいきどほり。おさへたうらみ。

うつぼ〔鱓・鰻魚〕(名)【動】無足目鰻科の魚の形「うなぎ」や「はも」に似、長さ約六〇糎。體色は暗褐色又は黑色で、黃色の斑點、淡色・黑色の横紋があり、目は小さく、齒は甚だ鋭い。肉は美味でないが、皮は美しいなめしがはとなる。なまだ。

うつぼ〔靫・空穂〕(名)矢を盛つて腰に帶びる用具。中空で、外に毛皮をつけ、矢の雨に濡れるを防ぐ。—がい〔靫貝〕(名)【動】玉貝科の螺貝。「かたつぶり」に似、介殼は帶黃褐色で細い螺狀の刻線がある。直徑約七糎。全國に分布し、海岸の砂泥に棲む。ボルネオ・マライ半島等に産する。


〔靫〕

うつぼ〔靫草・夏枯草・夏枯草〕(名)【植】唇形科の多年生草本。莖の高さ約三〇糎。莖は方形で微毛があって紫黑色。葉は長卵形乃至披針形で鈍頭。長い葉柄を有し、莖葉共に毛茸がある。六月頃莖頂に短大な穗狀花序を綴り、深紫淡紫色の脣形花を開き、形、靫に似る。猪籠草(ゐのこぐさ)・マライ半島等に産する。

—ぐさ〔靫草〕(名)

—ずけ〔靫附〕(名)相撲の手。相手のからだを勢強くふりあつて投げること。

うつ・ぼつ〔鬱勃〕(名)❶思の胸中に籠つたさま。❷雲などの盛んに起るさま。

うつぼものがたり〔宇津保物語〕(名)【文】平安朝時代の小說。竹取物語・伊勢物語について出で、小說の嚆矢とされる。著作の年代は圓融・花山二帝の頃と稱せられるが、作者は詳かでない。物語の主人公は仲忠といふ音樂に巧みな貴公子と貴宮(あてみや)といふ比類稀な美女で、二人を見るもの、皆我がものにせんと慾ふことを一篇の骨子としたのである。二〇卷。

うつ・み〔内海〕(名)うちうみ。いりうみ。

うつむき〔俯〕(名)うつむくこと。うつぶし。—**ざま**・**副**)❶うつむいたさま。❷うつむいた時。

うつむく〔俯く〕(自動、カ四)頭を垂れる。頭を下に向けること。【古語】

うつむく〔俯く〕(他動、カ下二)下へ向かすこと。

うつむける〔俯ける〕(他動、カ下二)うつむくの口語。

うつ・むろ〔空室〕(名)四方を土で塗つた室。(古語)

うつ・もも〔内股〕(名)うちもも。(古語)

うつ・もん〔鬱悶〕(名)心の苦いこと。

うつゆう〔鬱憂〕(名)心のふさぐこと。

うつゆう〔鬱悒〕(名)氣のふさぐこと。心の精神が常にふさいで、思慮する力乏しく、交際を嫌ひ動くを好まず、不眠症に陷る症狀を呈し、遂に自殺するに至ることのある精神病。「樂しくないこと。

うつゆう〔空蘭〕(名)中の空虛になった蘭。

—の〔空蘭の枕〕「こもろ」「ままさき」の枕詞。

うつらうつら(名・副)❶よく念を入れるさま。うとうつ。❷うつうつ。(古語)❸しきりに眠を催すさま。うとうとと。

うつらん〔尉藍〕(名)濃い藍色。

うつり〔映〕(名)光又は影のうつること。❷色彩の配合。配合。適應。似合。

うつり〔移〕(名)移ること。❷心のうつること。

うつり〔移香〕(名)贈物の器に返禮として入れて返す品。

—かが〔移香〕(名)物に移り殘つた香。

—がみ〔移紙〕(名)贈物の返禮に入れて返す紙。

—かわり〔移変〕(名)物事の次第にかはりゆくこと。交代。變遷。

—かわる〔移変る〕(自動、ラ四)かはり行く。變遷する。

—ぎ〔移氣〕(名)變りやすい心。浮氣。

—やまいやまい〔移病〕(名)傳染病。

—ゆく〔移行く〕(自動、カ四)變り行く。次第にうつる。

うつり(名)つづきあひ。ゆかり。つながる絲。

うつりぎ〔鬱林〕(名)樹木のしげった林。

うつりん〔移・遷る〕(自動、ラ四)❶變る。變り行く。❷變遷する。❸場所が變る。轉宅する。❹時がたつ。❺色がさめる。散る。衰へる。❻色や香がしみつく。❼盛衰する。傳染する。

うつる（映る）（自動、ラ四）㊀ここの光や影があそこにあらはれる。㊁色と色とがよく合ふ。㊂よく配合する。よく似合ふ。

うつろ（空）（名）㊀中の空しいこと。うろ。から。㊁うつろぶね。**―き**（空木）（名）中の空虚な木。うつほぎ。**―ぶね**（空舟）（名）うつろぶね。

うつろい（移）（名）うつろふこと。變遷。**―きく**（移菊）（名）襲ぎの色目。表は濃紫、裏は黄又は白。

うつろふ（移ろふ）（自動、ハ四）㊀變る。㊁場所を變る。㊂移り變る。㊃時がたつ。㊄衰へる。㊅色がさめる。色や香が薄くなる。

うつろう（映ろふ）（自動、ハ四）光がうつる。影がうつる。

うつろわす（移ろはす）（他動、サ四）うつろふやうにする。變ちせる。變じさせる。

うつわ（器）（名）㊀物をいれるいれもの。㊁器具。器械。㊂才能。器量。度量。人才。人物。**―もの**（器物）（名）（うつわ×器）。

うつわり（僞）（名）いつはり。**―ごと**（僞言）（名）いつはりごと。うそ。きげん。

うて（討手）（名）うって。（古語）

うて（腕）（名）㊀臂ひじと手くびとの間。ただむき。㊁肩と手くびとの間。手。㊂腕前。技倆。器量。㊃腕力。力。㊄腕木。臂掛。㊅〔理〕天秤の支點から力點までの間。**―おし**（腕押）（名）二人向かひあって腕を立てて掌を握りあひ、臂をつけて互に押しあって倒さうとする遊戯。**―かぎり**（腕限）（名）腕力のつづく限り。技倆のつづく限り。**―がね**（腕金）（名）金屋製の腕木。**―ぎ**（腕木）（名）一端を壁などに取りつけて横に突き出した材。**―きき**（腕利）（名）腕前のすぐれたもの。**―くび**（腕首）（名）てくび。**―ぐみ**（腕組）（名）兩腕を胸のあたりで組合はすこと。**―くらべ**（腕競）（名）技倆又は腕力を競爭すること。**―ぐるま**（腕車）（名）腕をもってくるくるとひきまはすこと。**―こう**（腕香）（名）僧侶などの荒行の一。胸の皮膚の上で香を燻すること。**―こき**（腕扱）（名）技倆の最も勝れてゐる人。**―ずく**（腕尽）（名）技倆。**―ずもう**（腕相撲）（名）腕前をくらべてゐること。**―ずもう**（腕揃）（名）技倆又は腕力のすぐれた人が揃ってゐること。**―だて**（腕立）（名）腕力を頼んで人と爭ふこと。**―だめし**（腕試）（名）腕でするいたづら。手すさび。**―てんどう**（腕時計）（名）革製・セルロイド製・金屬製・リボン等の輪にとりつけ、腕首に捲く小形の時計。**―なし**（腕無）（名）㊀腕のないかたは考。㊁技倆又は腕力のない人。**―ぬき**（腕貫）（名）㊀二の腕にはめて飾とする環。うでわ。㊁天秤などの用ひる腕を包む巾。㊂腕に長くはめる毛絲製の筒狀形のもの。**―びき**（腕引）（名）一種の遊戯。二人互に腕の曲り目に手拭の端を挾んで引きあふこと。**―ぶし**（腕節）（名）㊀腕の關節。㊁腕力。**―ぼし**（腕節）（名）「うでぶし」の訛。**―ぼね**（腕骨）（名）㊀腕の骨。㊁腕力。**―まえ**（腕前）（名）てなみ。技倆。はたらきぶり。**―まくり**（腕捲）（名）袖口をまくり上げて腕をあらはすこと。**―まもり**（腕守）（名）二の腕につけた腕貫などに入れた神佛の守札。**―わ**（腕輪）（名）腕にはめる裝飾用の環。うでぬき。**―一本腥―本**（句）自分の技倆以外に助とするもののないこと。**―が鳴る**（句）事をなさんとする勇氣の一身に滿ちてゐるさま。**―なしの振りつんばい**（句）腕力もないものが、石投げをしようとする意から、我が力に過ぎたことをする譬。**―に覺え**（句）我が力量に自信があること。**―に縒る**（句）十分の準備をして待ち受ける。**―を鳴らす**（句）腕前をあらはして名聲を博する。**―をのす**（句）腕前をのばす。腕をかがきあげる。**―をかける**（句）腕前を試みて考へる。**―を組む**（句）腕前をうでぐみをして考へる。

うていこく（丁定國）（名）〔人〕支那前漢の政治家。字は曼倩。宣帝・平帝に仕へて丞相となり西平侯に封ぜられた。その父は下級官吏であったが、子孫に王侯たる者が出た時、車馬の通行に妨なからしめる爲に、その門を大きく造ったといふ。

うてき（雨滴）（名）あめのしづく。

うてすず（野蓑）（名）貧け惜しみの強いこと。無粋な者。野蓑。

うてな（臺）（名）㊀四方觀望の爲に建てる屋根のない部分。㊁〔植〕花瓣を受けるもの。がく。

うてなぬかお（打てぬ顔）（名）氣のりがしない顔。面白くかはさぬ顔。

うてる（ててて・てる・てれ）（自動、タ下一）㊀氣を呑まれる。よわる。負ける。㊁腐る。

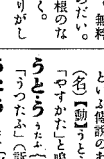
うでる（ででで・でる・でれ）（茹でる）（他動、タ下一）ゆまぞら。

うてん（雨天）（名）雨の降るそら。あめふり。あまぞら。**―じゅんえん**（雨天順延）（名）豫定の日に雨が降った時、順送りに日を延ばすこと。

うと（名）うつろ。から（空）。

うと（烏兎）（名）（金烏と玉兎の意）㊀太陽と月。㊁日月。㊂年月。光陰。

うど（土當歸）（名）〔植〕五加（ごか）科の多年生草本。莖の高さ約二米。春、宿根より生ずる。葉は二回三出羽狀複葉。小葉は廣卵形又は楕圓形で緣邊に細鋸齒を有する。夏、莖頂・葉腋に複繖花序の小白花をむらがり開く。嫩芽を食用とする。**―め**（土當歸芽）（名）土當歸の芽。紫色で三輪ばかり。食物のつまに用ひる。



うど（獨活）（名）〔植〕しうど。**―の大木**（句）身體は長大であるが、役に立たぬこと。

うとう（石黨）（名）〔政〕政府の與黨。其の議會に於いて議長席の右側の座席に坐することが、歐洲の慣例である。保守黨。政府黨。

うとう（善知鳥）（名）〔動〕うとうり。**―どり**（善知鳥）（名）〔動〕鵜型目海雀科の海鳥。小鴨に似て體は黑褐色、腹部は白色、頸は長く、嘴の下に三稜位の白毛を垂れる。嘴の本に赤色の平たい角狀突起があって末端尖り、秋は落ちる。嘴脚共に茶褐色。北國の海濱に產し、悲しいことがあれば涙を流すといふ傳說のある鳥。**―やすかた**（善知鳥）（名）〔動〕うとうどり。（親は「うたふ」と鳴き、子は「やすかた」と鳴くからいふと。）

うとうう（訴ふ）（他動、ハ下二）

うとうう（歌ふ・謳ふ・唄ふ）（他動、ハ四）節をつけて歌を唱へる。㊁事物を歌に詠む。吟詠する。㊂〔歌ふは節をつけてうたふ。㊃謳ふは同音にうたふ。㊄唄ふは佛の讃歌をうたふ。俗曲をうたふ。「うっとり。

うとうと（名・副）眠を催すさま。うつらうつら。

うとうとし（疎疎し）（形、一）親しくない。甚だ疎遠である。**―げ**（疎疎しげ）（名）うとうとしいこと。又其の度合。

うとうとし（疎疎し）（形、一）親しくない。久しくたよりをしない。久しく往來しない。㊁不案内である。おぼろげである。

うどねり（内舍人）（名）うちどねり。

うどの（宇渡野）（名）〔植〕宇渡野蔦。

うどの（鵜殿）（名）〔植〕木本科の多年生草本。「よしの」一種。高さ約三米。莖は直立し、葉細長く、莖に似る。花は複總花序で褐色、蹠地の沼澤に自生する。莖の根に近き部分を取って草鞋の簧に代用せられた。大阪府三島郡五領村鵜殿のものが有名である。せいこのよし。

うどのよし[鵜殿葦](名)【植】うどののよし。

うとぶ[疎ぶ](他動、バ四)うとむ。(古語)

うとまし[疎まし](形、シク)いとはしい。うとうとしい。きらびである。

うとむ[疎む](他動、マ四)❶親しまぬ。おろそかにする。❷遠ざける。❸忌みきらふ。つれなくする。(古語)

うとんじ[疎んじ](他動、ザ上一)「うとむ」の敬語。(古語)

うとんず[疎んず](他動、サ変)うとむ。

うな[海](接頭)「うみ」の意を表す語。「一原」。

うな[項・頸](接頭)「うなじ」の意を表す語。

うなう[鰻](名)【植】うどのよし。

うなぎ[鰻](名)❶魚類の名。❷(うどん)は梵語Udumbaraの略。優曇華(名)❶(うどん)は梵語Udumbaraの略。靈瑞・瑞應の義。印度の想像上の植物で、三千年に一度花を開くもので、この花の開く時は、金輪明王が出現すると傳へられる。❸【植】桑科中無花果の一種で、ヒマラヤ山麓・デッカン高原・セイロン島などに産し、高さ三米前後、雌雄花は蜜狀に凹入した花軸の中にあって、外部からは見えない。果實は食用に供せられ、その木は息災護摩に用ひられ、又、灌頂用の竜木ともなる。❹【動「くさかげろふ」の卵が濕地にある草木の枝、古材や器物の内についたもの。卵は白くして、一糎半ばかりの白い絲狀のもので他物に附き、花のやうに見える。❺芭蕉の花の異稱。

うなかぶす[項掛す](他動、サ四)❶うなじを傾ける。❷心配する。(以上古語)

うなかみ[海上](名)海のほとり。海邊。(古語)

うながみ[項髪](名)たてがみ(鬣)。(古語)

うながみたねひら[海上胤平](名)【人】明治時代の歌人。平業縣の人。通稱ノ耶、椎園と號す。加納諸平の門に學び、後、剛健な高調の風韻を傳へて異彩を放つた。大正五年(一五七六)没。年八十八。「明倫堂和歌集」「椎園萬葉集」等の著がある。

うながみど[海上砥](名)千葉縣海上郡から産出する質の粗糙な砥石。

うなぎ[鰻・鱧](名)【動】喉類鰻類の魚。淡水に産する。形は圓筒狀で長く、背は蒼黒色で腹部は白い。皮膚厚くして粘液に富み、鱗なく體は滑かである。身長約六〇糎に達するものがある。蒲焼として珍重せられる。❷水底の鰻を引揺き捕へる具。長い柄の先に「つ」の字形の鉤を附けたもの。**—ざる**[鰻笊](名)うなぎをいれるざる。**—ずか**[鰻笊](名)鰻が川を下って海に至る秋季の頃、川の淀みに石を積んで鰻を潜伏せしめて捕獲する裝置。**—ずつ**[鰻筒](名)長さ一米位の竹筒を適當の距離を隔てて繩に連れ、水底に沈めて鰻の潜入するをうかがひ、引揚げて捕獲する裝置。**—どんぶり**[鰻丼](名)井の中に飯を盛り、その上に鰻の蒲焼を載せた食品。**—のぼり**[鰻登](名)鰻の淺水を溯るやうに次第に立身すること。**—めし**[鰻飯](名)木製の漆器(重箱)に飯を盛り、その上に鰻の蒲焼を載せたもの。

うなぐ[項ぐ](他動、ガ四)うなじに掛ける。(古語)

うなこ[項瘤](名)牛の項にある肉塊。

うなさか[海境](名)海の境。(古語)

うなさる[慄さる](自動、ラ下二)恐しい夢を見て苦しげな聲を立てる。

うなされる[慄れる](自動、ラ下一)「うなさる」の口語。

うなじ[項](名)頭の後方の下部。えりくび。

うなずく[頷く・點頭く](自動、カ四)首を前に動かして承諾の旨を示す。がてんする。得心する。

うなだる[項垂る](自動、ラ下二)うなじを垂れる。頭を垂れる。うつぶく。

うなだれる[項垂れる](自動、ラ下一)「うなだる」の口語。

うなつき[項衝](名)❶童の髪のうなじを衝く程短いもの。(古語)❷うしろの頸筋。

うなて[畦手・池溝](名)畦の傍に掘った田の用水の溝。(古語)

うなと[海門](名)港の入口。湾入した海の入口。

うなね[項根](名)うなじ。(古語)—**衝拔く**(句)頭を地に垂れて敬禮する。頓首する。(古語)

うなばた[海邊](名)うみべ。

うなばら[海原](名)ひろびろとした海。海。海。

うなび[海邊](名)うみべ。(古語)

うなべ[海邊](名)うみべ。

うなべた[海邊](名)うみべ。海邊。

うなみ[卯波](名)卯月(陰暦四月)の頃海に立つ波。

うなめ[畦目](名)鍬の縦じ(なぞ)縫の縫目を畦のやうにあらはしたもの。多く味木の絲を用ひて施して飾る。

うなや[檻](名)牢屋。獄屋。ひとや。(古語)

うなり[唸](名)❶うなること。うめくこと。❷風につけて風に鳴らすもの。鏑の鬚紙・籐を薄くしたもの小さい弓に掛けて張る。❸【理】(Beat)高低・浮沈の音響。音波の疊厚な部分と稀薄な部分との齟齬錯綜して生ずる現象。**—ごえ**[唸聲](名)うなる聲。うめき聲。**—ごま**[唸獨樂](名)まはる時、唸聲を發する獨樂。胴を竹又は薄い金屬で造り、處處に孔をあけ、内部を空虛にした裝置のもの。

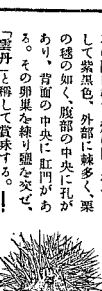
うなる[唸る](自動、ラ四)❶苦しんで聲を發する。惱みうめく。❷呻吟する。❸獄などを怒り叫ぶ。❹高低浮沈ある聲を發する。❺素人が淨瑠璃や小唄を口籠聲で歌ふ。

うなわ[…縄](名)【鵜飼の時、鵜をあやつる爲に鵜の頸につけた縄。❷鵜の羽、又はほろなどを縄につけて、魚を嚥って網の方に追込むに用ひる漁具。**—あみ**[鵜縄網](名)鵜縄のついた敷網。

うなわく[脈沸く](自動、カ四)膿が出る。(古語)

うに[海栗・海膽](名)【動】棘皮動物の一。海底の

石の間に棲む。殼は圓く平たく して紫黒色、外部に棘多く、栗の穂の如く、腹部の中央に孔があり、背面の中央に肛門がある。その卵巣を練り麗んで、「雲丹」と稱して賞味する。**—**



〔にう〕

つぼ〔海膽壺〕(名) 海膽の介殼。

ウニウ(名)【動】(アイヌ語 Unau) おっとせい。

うに・やまぼこ〔雲丹蒲鉾〕(名) 蒲鉾の表面に雲丹を塗りつけて、炙ったもの。

ウニコール〔Unicorn〕(名)【動】海水産の海獣。體長約六米。頭部尉く、體は「いるか」に似、腹白く背部は灰黒色で黒斑がある。上顎に、貧白く堅緻な二米位の牙があって護身具となってゐる。北極の海に産する。いっかく(一角)。

うぬ〔汝〕(代) 對稱代名詞で、輕蔑の意を含む。汝。き

うぬ・ぼる〔己惚る・自惚る〕(自動、ラ下一) 自ら慢じ自らたのむ。實際の價値以上に自分をえらいと思ふ。

うぬ・ぼれ〔己惚・自惚〕(名) うぬぼれること。**—かがみ**〔己惚鏡・自惚鏡〕(名) 容貌を寶物よりもよく見せる鏡。

うぬぼれる〔自惚れる〕(他動、ラ下一) うぬぼるの口語。

うね〔畝・畦・隴・壠〕(名) ㊀田畑の中に土を高く盛りあげて長く續け、作物を植ゑつける所。㊁波のうねり。**—あい**〔畝合〕(名) うねとうねとの間。**—うね**〔畝・畝〕(名・副) ㊀多くの畝。㊁高低風曲のさま。㊂波の續けるさま。**—おび**〔畝帶〕(名) うねに似た織柄の帶。**—おり**〔畝織〕(名) 織地を高く低く畦のやうにした一種の七子織。秋田市の名産。**—だて**〔畝立〕(名) 田畑に畝を作ること。**—たび**〔畦足袋〕(名) 晒木綿を絹絲で、畦のやうに刺しぬひにした足袋。**—どこ**〔畝床〕(名) 「ぐるま」。

うねくね(副) うねくねるさま。高く低く曲りゐる。

うねくる〔うねくれる〕(自動、ラ四) うねる。

うねざし〔畝刺〕(名) 絲を浮かして畦のやうにさしぬふこと。**—たび**〔畝刺足袋〕(名) うねざしにした足袋。

うねどる〔うねどれる〕(自動、ラ四) うねうねと動き

うねびの・かしわらのみや〔畝傍橿原宮〕(名) 神武天皇の皇居。宮地は大和畝傍山の東南で、今の橿原神宮は、この宮地を推定して建設せられたものといふ。

うねびやま〔畝傍山〕(名)【地】奈良縣高市郡畝傍にある小丘。神武天皇御即位の地。高さ約百九十九米。耳梨山・香具山と共に大和國三山と稱せられる。山麓に橿原神宮・神武天皇の御陵がある。**—のうしとらのみさざき**〔畝傍山東北陵〕(名) 神武天皇の御陵。奈良縣高市郡畝傍山麓にある。紀元七十六年四月三日崩御。翌年九月十二日奉葬す。

うねべ〔采女〕(名) うねめ。(古語)

うねめ〔采女〕(名) 昔、郡の少領以上の女の容貌端正なものを選んで御膳の事を掌らしめたもの。**—きぬ**〔采女衣〕(名)〔うきぬ×繪衣〕。**—ぢん**〔采女田〕(名)采女に給ぜられた田地で、不輸租田の一。**—のかみ**〔采女正〕(名) うねめのつかさの長官。**—のしょう**〔采女正〕(名) うねめのかみ。宮內省に屬し、諸國から奉つた采女を掖授した役所。

うねり(名) ㊀うねること。㊁うねり立つ大波。**—ぐし**〔うねり串〕(名) 魚を丸焼にする時、うねらせて刺す刺し方。

うねる〔うねれる〕(自動、ラ四) 左右・上下に曲りくねる。

うのあしがい〔鵜足貝〕(名)【動】腹足類鵜足科の貝。低圓錐形の貝殼を有し、長さ約四〇粍、幅約三〇粍、高さ二二粍位。陣笠狀で太い放射肋を有し、鵜の蹼足狀の外觀を呈し、外面は黑色、內面は白色、岩礁又は海藻等に附著する。

うの・け〔兎毛〕(名) ㊀うさぎの毛。㊁極めて小さい物事の譬。**—で突いた程**(句) 極めて僅かなこと。

うの・はな〔卯花〕(名) ㊀植 うつぎの花(水晶花。㊁襲ぬさの色目。表は白、裏は青。㊂豆腐のから。きらず(雪花菜)。**—いか**〔卯花烏賊〕(名) うのはないか。**—いり**〔卯花煎〕(名) 切った烏賊に味をつけて麻油で煎つめた食品。**—おどし**〔卯花縅〕(名) 鎧の縅毛の名。上は白絲で、下は萌黃又は蘇の絲で縅したもの。**—がき**〔卯花垣〕(名) 卯の花の咲いた生垣。**—くたし**〔卯花腐〕(名) 卯の花の花をくさす意。四五月頃に降りつづく雨。**—ぐもり**〔卯花曇〕(名) 卯の花の咲く頃の曇天。**—ずきよ**〔卯花月夜〕(名) 陰暦四月の異稱。**—ずきよ**〔卯花月夜〕(名) 卯の花の咲き亂れたさまを月影にたとへていふ語。**—くよ**〔卯花月夜〕(名) 前條に同じ。**—なます**〔卯花膾〕(名) 大根おろし又は湯びきの魚肉を散らしたねばなます。**—の**〔卯花の〕(枕)「さつき」(五月)・「うき」(憂きの枕詞。**—ひらめ**〔卯花比目魚〕(名) ゆでた比目魚の肉をほぐして卯の花のやうにした料理。**—ぶき**〔卯花蕗〕(名) 豆腐のからに雞卵を交ぜて、鰹節の汁などで味附けしたものを載せた飯。**—やき**〔卯花燒〕(名) 鮒を燒き、酢をかけて豆腐のからをふりかけた料理。

うのはら〔海原〕(名) うなばら。(古語)

うのみ〔鵜呑〕(名) ㊀鵜が魚を呑むやうに嚥まずに呑み込むこと。まるのみ。㊁意味をよく解せず、器械的に記憶すること。

うのみ・え〔竿筌〕(名) 鵜の目鷹目。

うのめ・たかのめ〔鵜目鷹目〕(名) 蹇表から返して、鵜が魚を、鷹が鳥をさがすやうに、一所懸命に物を捜し出さうとする。

うのめ・ゆおう〔鵜目硫黃〕(名)【化】黃色

うば〔祖母〕(名) おばば。(古語)

うば〔姥・嫗〕(名) ㊀老女。ばば。おうな。㊁能で老女の頭にかぶった假面をいふ。

うば〔乳母〕(名) 母にかはって子供に乳を呑ませ、又、育てる女。めのと。おんば。**—ぐるま**〔乳母車〕(名) 小兒を載せて、後からおす車。多く車箱を籐で造り、日覆を取附けた。

うば〔豆腐皮〕(名) 豆腐の汁に灰汁を入れて煮たものの上面に生じた薄皮を乾かしたもの。ゆば。湯葉。「眼上に黑條あるもの。

うばあいさ〔姥秋沙〕(名)【動】あいさの一種。

うばい〔優婆夷〕(名)【佛】(梵 Upāsikā) 淸淨女の意。佛門に入った在家の女。婦人の出家者の總稱。

うばい〔烏梅〕(名) 梅の實を乾かし又は燻べたもの。藥用となる。

うばい〔姥貝・雨波貝〕(名)【動】蛤類の一枚貝。淡水の注ぐ海底の泥沙に棲息する。介殼はふくれて厚く楕圓形をなし、外面は暗褐色、內面は白色で、肉は生のまま、又、乾物として食用とする。

うばかねそう〔杜莖山〕(名)【植】莖金牛(やぶこじ)科の常綠灌木。高さ約一米。葉は長橢圓形で、稍、かしの葉に類し、緣邊に波狀的鋸齒を有し、尖端、五生す。秋日、葉腋に花莖を抽き、帶黃色の細花を總狀に開く。花後、球果を結ぶ。

うばかねもち〔杜莖山〕(名)【植】莖金牛(やぶこじ)

うばぐち〔姥口〕(名) ㊀老女の口を結んだ形。㊁茶道で香爐・花生・釜などをいふ。

うばぐち〔姥鱈〕(名)【動】鱈の一種。角質の長い嘴を有し、面部は裸出して羽毛を生ぜず。

うばざくら〔姥櫻〕(名) ㊀【植】櫻の一種。葉に先だって花を開く。花は重瓣で花輪は大きく色は淺い。ひがんざくら。㊁なまめいた老女。「北の別號。

うばじょうすけ〔姥尉輔〕(名)【人】四代鵜飼南

うばそく〔優婆塞〕(名)【佛】(梵 Upāsaka) 淸淨信士の義。佛門に入った在家の男子。男子の佛教徒の總稱。(優婆夷の對)

うばそろえ〔乳母揃〕(名) 乳母の襟揃。乳母の候補者を集め揃へること。

うばたまま〔烏羽玉〕(名) ㊀黑(ぬば)玉の。烏羽玉の。(枕)「黑」・「夜」・「闇」・「月」・「夢」・「髮」・「妹の枕詞。ねば

たまの。

うはつ〔有髪〕(名)剃髪しないで髪を立ててゐること。**—そう**〔有髪僧〕(名)㊀【佛】剃髪しない僧侶。毛坊主。㊁俗人で佛道を修める人。㊂無慾恬淡の生活をする人。「又、その居所。㊃【人】源頼朝。

うはっか……〔右幕下〕(名)㊀右近衛大將の敬稱。

ウパニシャッド〔優婆尼沙土〕(名)【哲】(梵Upanisad) 梵文經典の一。印度哲學の源流をなすもので、印度太古の吠陀(ヴェダ)經典の後に出たアラーハマナ中のアーラーヌヤカを解釋したもの。

うはねかんびき〔于撥干引〕(名)漢字の「于」は下をはね、「干」は下を引きのばしたまにすること。

うばのたまも〔烏羽玉藻〕(名)つやの美しい黒髪。

うばめ〔姥女楠〕(名)㊀うば。㊁【植】うばめがし。

—がし〔姥女楠〕(名)【植】殼斗科の常綠喬木。高さ八—九米に達する。葉は楕圓形又は倒卵形、緣邊には上部にのみ鋸齒がある。雌雄同株で、五月頃「かし」に似て殼斗を有する。材は堅緻で、樽脚とし、火力の強い木炭を製するに用ひる。

うばら〔茨〕(名)【植】いばら。(古語)

—ぐつわ〔茨轡・轡〕(名)菱形のかがみを有するもので、虎軟を用ひる時の轡。(古語)

うばらおとめ……〔菟原處女〕(名)【傳】傳説の一。摂津國兵庫縣武庫郡にある古墳の故事で名高い女。(萬葉集の田邊福麻呂の歌・大和物語・謡曲求塚に出づ)うないをとめ。

うびたい〔戴星〕(名)(うびていのうま)。**—のうま**〔戴星馬〕(名)額の白い馬。つきじろ。うびたひ。

うひ〔雨氷〕(名)雨の地物について冷氣にあ

うひょうえ……〔右兵衛〕(名)(うひょうえふ)(右兵衛府)。**—のかみ**〔右兵衛督〕(名)兵衛府の長官。**—ふ**〔右兵衛府〕(名)兵衛府を左右二所に分つた。兵衛を監督し、車駕の出入を警つた役所。殿富門内の南拔にあつた。

うふ〔右府〕(名)右大臣の異稱。

うぶ〔迂腐〕(名)迂遠で無氣力なこと。

うぶ〔初〕(名)㊀生來のままで飾氣のないこと。㊁(うぶうぶしいこと。㊂處女。おぼこ。

うぶい……〔産井〕(名)産湯の水を汲む井戸。

うぶがみ〔産髪〕(名)うぶげ。

うぶがみ〔産神〕(名)【神】うぶすなかみ。

うぶき〔産衣〕(名)生まれた嬰兒に始めて着せる衣服。**—のいわい**〔産衣祝〕(名)赤子の始めて産衣を着るのを祝ふ儀式。**—ふくさ**〔産衣袱紗〕(名)赤子を産湯からとりあげる時に用ひる白絹。

うぶきぬ〔産衣〕(名)うぶき。

うぶげ〔産毛〕(名)子供の生まれた時に生えてゐる毛。

うぶこ〔産子〕(名)同じうぶすなかみを奉ずる人。氏子。

うぶごえ……〔産聲〕(名)子供の生まれた時に始めて出す泣聲。

うぶすな〔産土〕(名)㊀人の生まれた土地。㊁うぶすなかみ。守護する神。鎮守。氏神。**—がみ**〔産土神〕(名)【神】産土を守護する神。**—まいり**……〔産土詣〕(名)(うぶすなまいり)。「お毛を剃ること。宮參。**—もうで**……〔産土詣〕(名)(うぶすなまいり)。

うぶぞり〔産剃〕(名)子供が生まれて七日目にうぶすなだち〔産立〕(名)産兒の生まれて七日目にする祝。しちや。

うぶち〔産血〕(名)出産の時に出る血。

うぶちゃんば〔生天婆〕(名)【地】うぶは「きうする」、生粹の意。「天婆」は「古城」で、今の印度支那半島の安南邊にあつた國。

うぶどの〔産殿〕(名)産殿なる爲の殿舍。

うぶね〔鵜舟〕(名)(うかいぶね)。

うぶのかみ〔産神〕(名)【神】むすびのかみ(産霊)。

うぶめ〔産女〕(名)孕んだ女。産婦。**—どり**〔産女鳥〕(名)うぶめ(産女)が化生したといふ想像上の鳥。「くまたかに似て、その聲は小兒の泣聲に似てゐるといふ。

うぶや〔産屋〕(名)㊀昔、出産の爲に新に建てた室。(うぶやしない)。**—そうぞく**……〔産屋裝束〕(名)産屋にゐる時の白色の裝束。

うぶやしない……〔産養〕昔、出産後三日目・五日目・七日目に行ふ祝で、この日祝宴を催し、親戚から祝品を贈つた。(古語)「めること。又、其の遺

うぶゆ〔産湯〕(名)生まれた子に始めて入浴せし

うぶんぼく〔烏文木〕(名)【植】こくたん(黒檀)。

うべ〔宜〕(副)なるほど。まことに。道理で。さもあるべく。(古語)**—うべし**……〔宜宜し〕(形・二)㊀道理である。尤もらしい。㊁驚賞らしい。

うべし〔宇部市〕(名)【地】山口縣の西南部、瀬戸内海に臨む港市。炭坑地として名高い。

うべのう……〔諾ふ〕(他動、ハ四)㊀うけひく。承知する。㊁服從する。謝罪する。

うほ〔禹歩〕(名)貴人外出の時、陰陽家が呪文を唱へて舞蹈する作法。

うほう……〔右方〕(名)㊀右の方。㊁【音】雅樂の右方の樂座で、高麗樂と渤海樂との稱。

うほう……〔羽旄〕(名)竿頭に鳥毛と牛尾とをつけたはたぼこ。

うほう……〔奪ふ〕(他動、ハ四)㊀人の物を無理に取る。ひったくる。㊁掠めとる。㊂沒收する。剝奪する。㊃君主を除いて其の位に卽く。㊄(ウ)「奪」は力を以て強ひて取る。(ヒ)「盗」は取るべきでないものをとる。(ハ)「獲」は、官位をとりあげる。着物をはぎとる。

うほうどうじ……〔雨寶童子〕(名)【神】天照大神のことを兩部神道で稱する語。

うぼく〔烏木〕(名)【植】うぶんぼく。

うぼくや〔右僕射〕(名)右大臣の古名。

うぼんさい〔盂盆齋〕(名)【佛】うらぼん」に僧尼に供養すること。

うま〔馬〕(名)㊀動物舞踏類の重要家畜。身長は昔は四尺を標準とし、それ以上は寸を加して五尺。駿駑巨大で頭部に鬣を有し、脚は單蹄で力强く、走ること早く、人を乘せ、荷車を曳くに用ひる。㊁左右に足を具へ、物を支へるに用ひる具。ふみだい。㊂雙六の賽の名。㊃將棋の一こまの名。けいま。㊄遊興費の不拂を取立てる爲、客に同行する者。㊅しくば(木馬)。㊆遊女の異名。**—が合ふ**(句)氣が合ふ。**—には乘って見よ人には添うて見よ**(句)物事はよく經驗して後に善惡を定めよ。**—の籠脫け**(句)駑馬でもあまてにいふ。**—の背をわける**(句)馬の脊の片方には雨降り、片方には降らぬ意から、村雨などのここには降り、かしこには降らぬさまの譬。**—の鼻を立てなほす**(句)旅立つ時馬の首を行かうとする方に向けること。**—は馬づれ**(句)同類のものはよく相合して連れ立つことの譬。**—を牛に乘り換へる**(句)よい引く(句)遊郭などで遊興費不足の爲催促する人を連れて歸るにいふ。

うま〔午〕(名)㊀十二支の一。㊁南の方角。㊂昔の時刻の名。今の晝の十二時。

うま〔馬〕(接頭)同類中で大なる意を表す語。—ぶ。

うま〔甘〕(接頭)味のうまい意をあらはす語。—げ。

うまあきんど〔馬合〕(名)氣の合ふ仲よし。

うまあきんど〔馬商人〕(名)(ばくろう)(伯樂)。

うまいあげ〔馬上〕(名)馬を獻上すること。

うまいい〔熟寢〕(名)よくねること。じゅくすゐ(熟睡)。

うまいい……〔甘い〕(形)㊀味がよい。㊁上手である。㊂都合がよい。

うまいい……〔美飯〕(名)㊀うまい乾飯。㊁よい米の飯。(以上古語)

うまいかだ〔馬筏〕(名)乘馬を並べつないで川を渡すこと。

うまいくさ〔馬軍〕(名)㊀騎兵のたたかひ。㊁騎馬の兵士。

うまいしゃ〔馬醫者〕(名)馬の疾病を治療する醫師。

うまいしる〔甘汁〕(名)他人の力を受ける利益。

—を吮す(ふ)(句)他人の利益を得るにいふ。

うまいり〔馬入〕(名)大將が城中に入ること。

うまいれ〔馬入〕(名)騎兵で敵陣を崩すこと。

うまうち〔馬打〕(名) 馬に乗って行くこと。

うまうま〔名・副〕㊀うまいもの。(小兒の言葉)㊁手際よく。巧みに。

うまおい〔馬追〕(名) ㊀牧場で野馬を特内に追ひいれて捕へること。㊁客や荷物を駄馬に乗せて追ひ行くこと。又、その人。㊂〔動〕(うまおいむし)(馬追蟲)。**—むし**〔馬追蟲〕(名)馬方の馬を追ふ時歌。**—ごえ**〔馬追聲〕(名)馬方の馬を追ふ時歌。

うまおり〔馬おり〕(名) 山城國綴喜郡男山八幡宮で行ふ神事。三月中午の日の祭禮に、天長が神馬を御覽になり、舞人等は山城歌を歌ひながら、馬場で馬を乗り廻るのだといふ。

うまかい〔馬飼〕(名) 馬を飼ふ人。

うまがお〔馬顔〕(名) 人の顔の長いのをあざけっていふ語。

うまかけ〔馬駈〕(名) けいば(競馬)。

うまかた〔馬方〕(名) ㊀駄馬を扱ふ人。まご。㊁江戸時代に、將軍の乘馬の調練を掌った役。**—ぶし**〔馬方節〕(名)馬方が馬を牽く時に唄ふ歌の節。又、其の唄。**—船頭御乳の人**(句) 無理れだりをして制御すべからざるものの譬。

うまがた〔馬形〕(名) ㊀馬の形の繪。(古語)㊁木又は紙で馬の形に造り、神馬の代りに用ひるもの。**—の・しょうじ**〔馬形障子〕(名)昔、清涼殿の渡殿の北方に立てられた馬の繪を畫いた御立。

うまかる〔自動・ラ四〕うまい。

うまき〔馬城〕(名) まき牧。(古語)

うまき〔鵜卷〕(名) 鵜が多く集まって魚を取り卷き岸におしよせること。

うまきぬ〔馬衣〕(名) 馬に着せる着物で、紺・萌黄などの布に飼主の定紋を染めぬいたもの。

うまぐ〔馬具〕(名) ばく(馬具)。

うまぐし〔馬櫛〕(名) 馬の毛をすく櫛。うまはだ

うまくすし〔馬醫〕(名) 馬醫者。(古語) 〔事柄。

うまくち〔甘口〕(名) ㊀あまくち。㊁利益のある

うまくつ〔馬沓〕(名)かなぐつ。蹄鐵。

うまくわ〔馬鍬〕(名)〔農〕牛馬などに挽かせて、耕作に使用する槵木に歯のある鍬で、田を耕いた後地をかきならすに用ひるもの。まくは。

〔鍬 馬〕

うまげた〔馬下駄〕(名) こまげた(駒下駄)。

うまけむり〔馬煙〕(名) 馬の駈けた時に立つ埃。

うまけんじょう……じょう〔馬獻上〕(名) 江戸時代に、八月朔日に幕府から朝廷へ馬を奉った儀式。

うまごやし〔孫〕(名) まご(孫)。(古語)

うまご〔馬肥・苜蓿〕(名)〔植〕豆科の越年生草本。秋の末、原野に自生し、翌春、花を開く。莖の高さ三〇糎乃至六〇糎で、往往個個性を有して地面に匍匐する。葉は三枚の倒卵形の小葉から成る三出複葉で、長い葉柄があり、托葉は細く裂けてゐる。春夏の候、葉腋から細い花梗を出して、數箇の蝶形の小黄色花を開く。肥料及び牧草とする。

〔しやごまう〕

うまごり〔美織〕(名) 美しい織物。(古語) **—の**〔美織の〕(枕)〔あや〕〔綾の枕詞。

うまさ〔甘さ〕(名) うまみ。あまみ。うまい度合。

うまさくり〔名・自動・ラ四〕うまい度合。

うまざけ〔旨酒〕(名・枕) ㊀旨い酒。㊁次條に同じ。**—を**〔旨酒を〕(枕)〔かみ〕(神)〔み〕(みわ)(三輪)〔みむろ〕(三諸)の枕詞。

うまさし〔馬差〕(名)江戸時代に、宿驛で人馬の役を指圖した宿役人。

うまし〔旨し・甘し・美し〕(形・一)㊀味がよい。㊁快い。㊂巧みである。できがよい。㊃好都合である。**—くに**〔美國〕(名)よい國。(古語) **—もの**〔甘物〕(名) 味のすぐれてよい物。

うましばい〔馬芝居〕(名) 俳優が馬に乗ってする芝居。芝居と馬の曲藝を兼ねたもの。

うましもの〔馬自物〕(副) 馬のやうに。馬の狀をして。(古語)

うましょうぞく……しょう〔馬裝束〕(名) 馬につける飾。

うましょうじる〔馬印〕(名) 馬標・馬章。戰陣で、大將の側に立てて其の所在を示す目標としたもの。天正年間に始まる

〔しるしまう〕

といふ。**—も**〔馬標持〕(名) 馬標を持って主將に侍するもの。

うます〔不生〕(名) ㊀子をうまぬこと。㊁うますめ。**—の・じごく**……〔不生地獄〕(名) うますめの墮ちる地獄。子を産まぬ女は、この地獄に墮ちて、燈心で竹の根を掘る責苦にあふといふ。**—め**〔不生女〕(名) 子を生まぬ女。

うますかさ……〔馬司〕(名) 攝政關白の家司に屬し、馬の事を掌った役。

うますげ〔馬菅〕(名)〔植〕莎草科の多年生草本。高さ三〇糎乃至一米。葉は細長で長い葉鞘を具へる。四月頃花を開き、雌花は少數の鱗片から成り、雄花は細長い穗をなしてゐる。

うますずら……〔馬面〕(名) 長い顔。

うませ〔馬寨〕(名) 人馬を退けて置く所の垣。

うませみ〔馬蟬〕(名)〔動〕うまぜみ(熊蟬)。

うませり〔馬芹〕(名)〔植〕やまぜり。

うまぞい〔馬添〕(名) 馬に乗った人に附添ふ人。馬のくちとり。

うまだし〔馬出〕(名) ㊀馬場の馬を乗り出す所。(馬駐の對)(古語)㊁城門前に築いて、人馬の出入が、敵に知られぬやうにした土手。

うまたて〔馬立〕(名) 馬を繋いで置く所。

うまだて〔馬楯〕(名) 馬上で持つ楯。

うまだまり〔馬溜〕(名) 城外の橋際に設けた空地。

うたらい〔馬盥〕(名)(ばたらい)。

うたろう……〔馬太郎〕(名) 愚かものの。ばか。

うまつき〔馬附〕(名) 馬の口とり。

うまつき〔馬繼〕(名) 旅行する時、馬を乗りかへる所。うまや。驛。

うまつなぎ〔馬繋〕(名) 馬を繋ぐ所。うまたて。

—ば〔馬繋場〕(名) 馬を繋ぐところ。

うまつなぐ……〔馬繋ぐ〕(他動・ガ四) 時めく人の氣にたがはないやうにする。「すこと。

うまつぶて〔馬礫〕(名) 馬を礫のやうに投げ飛ばす。

うまとどめ〔馬駐〕(名) ㊀馬場のゆきどまりの所。(馬出の對)(古語)㊁馬から降りて馬をとめおく所。

うまどねり〔馬舍人〕(名) 馬の口とり。

うまどめ〔馬留〕(名) 馬を繋ぐ杭。うまたて。

うまとり〔馬取〕(名) 馬の口取。馬丁。

うまに〔甘煮〕(名) 肉と野菜類とを味醂・砂糖・鰹節・醤油などで煮つけた食品。

うまぬすびと〔馬盜人〕(名) ㊀馬を盜む賊。㊁〔動〕(あやめだい)(赤目鯛)。

うまのあし〔馬脚〕(名) 芝居で馬の脚となる役。

うまのあしがた〔毛茸〕(名)〔植〕きんぽうげ。

うまのおむすび……〔馬尾結〕(名) 婦人の髮の結び方。馬の尾のやうに背後に長く垂れたもの。

うまのかみ〔右馬頭〕(名) 馬寮の長官。又、皇太子の馬を掌った役。

うまのくぼがい〔馬陰貝〕(名)〔動〕こやすがい。

うまのくびじん……〔右馬陣〕(名) 修明門の異稱。

うまのす〔馬毛〕(名) 馬の尾の毛。

うまのすずくさ〔馬鈴草・馬兜鈴〕(名)〔植〕馬兜鈴科の多年生草本。蔓性を有して纏繞する。葉は三角狀長楕頭、全緣で帶紫綠色を呈し、一種の惡臭を發する。夏日、葉腋に帶紫綠色の不整喇叭狀の花を開く。地下莖は陰乾にして藥用に供する。

うまのせごえ〔馬脊越〕(名) 左右に谷などがある峠の路の馬の脊の如く、極めて狭いところ。

うまのたま〔馬玉〕(名) 馬などの腹中に生ずる石のやうなもの。灰色又は褐色で、内に黒毛又は褐毛が滿ちる。せきふん。へイザラバサラ。

うまの-つかさ〔馬寮〕(名) 昔、馬の飼養等の事を掌った役所。左右馬寮がある。めれう馬寮。

うまの-つめ〔馬爪〕(名) 「つくしの枕詞。

うまの-つめ〔馬爪〕(名) 鎧甲に代用する馬の爪。

うまの-ないし〔馬内侍〕(名) 【人】十六歌仙の一人。條天皇の皇后の女房。右馬權頭源時明の女。

うまの-はなむけ〔餞別〕(名) 昔、旅立つ人を送る時、其の人の乘ってゐる馬をゆくさきに向けて前途の安全を祈ったこと。はなむけ。

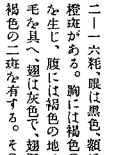
うまの-ほね〔馬骨〕(名) 素姓のたしかならぬ人を罵っていふ語。

うまの-みみ〔馬耳〕(名) 人に意見せられても心にとめぬこと。**—に風**(句) 馬は耳に風を受けても感ぜぬことから、人の意見に少しも感ぜぬことに譬へていふ。**—に念佛**(句) 馬は念佛を聞いても少しも感ぜぬことから、人の意見を聞き入れぬに譬へる。

うまの-り〔馬乘〕(名) ㊀馬に乘ること。又、その人。㊁乘馬法の巧みな人。㊂羽織の背の下の少し縫ひ殘してあるところ。㊃馬に乘るやうに人や物に跨がること。**—ぞめ**〔馬乘初〕(名) 新年の乘馬始の儀式。ひめはじめ。**—はおり**〔馬乘羽織〕(名) 乘馬用の羽織。脇筋をぶっさきにし、無地又は小紋・紋附のものを用ひる。**—ばかま**〔馬乘袴〕(名) 乘馬用の袴で、襠(ちまた)高く裾の廣いもの。

うまば〔馬場〕(名) ㊀乘馬法を練習する所。(古語) ㊁良馬を産する土地。**—どの**〔馬場殿〕(名) うまのおとど。**—のおとど**〔馬場殿〕(名) ㊀宮中の馬場にある殿舍。㊁五月の騎射の時、中・少將の著座する處。**—や**〔馬場屋〕(名) 馬場に設けた殿舍。

うまばえ〔馬蠅〕(名) 【動】蠅の一種。體長一二—一六粍、眼は黒色、額には濃淡の橙斑がある。胸には褐色の毛を生じ、腹には褐色の地に黄毛を具へ、翅は灰色で、翅脈に褐色の二斑を有する。その産卵に際しも馬の皮膚を刺すので馬は頻りにこれを嚙める。かくて幼蟲は馬の口中に入り、胃に達して成長し、糞と共に排泄されて蛹となる。


〔蠅 馬〕

うまはしり〔馬走〕(名) 馬場の馬出(うまだし)から馬駐(うまつなぎ)までの距離。

うまはたけ〔馬刷〕(名) うまかた。まこ。

うまひき〔馬引〕(名) うまかた。まこ。

うまひと〔貴人〕(名) 家柄のよい人。位の高い人。德の高い人。(古語)

うまひと〔馬人〕(名) うまひき。

うまひる〔馬蛭〕(名) 【動】蛭の一種。體稍〻扁平、長い紡錘形をなし、茶色乃至暗綠色で、背面に五條の暗色の縱線がある。體長一〇〇粍位、水田・池沼等に棲み、冬は泥中に蟄れる。人畜の血を吸はぬ。

うまふせ〔馬防〕(名) ㊀うませ(馬寒)。㊁かきれ。さく。(古語)

うまふね〔馬槽〕(名) まぐさを入れる桶。飼葉桶。(語)

うまふぶき〔馬蕗〕(名) 【植】(こごう)(牛蒡)。(古語)

うまへん〔馬偏〕(名) 漢字の偏の一。「駒」「駝」などの字の左方にある馬の字。

うまわり〔馬廻〕(名) 昔、主君の馬のそばに附添ふた武士。**—ぐみ**〔馬廻組〕(名) 馬廻になる資格のある武士。

うまみ〔甘味〕(名) ㊀うまい味。㊁うまい度合。

うまもち〔馬持〕(名) ㊀馬を所持する人。㊁馬の取扱方。㊂馬を人に貸して賃錢をとること。又、其の人。

うまや〔厩・馬屋〕(名) 馬を飼ひおく小屋。**—ごえ**〔厩肥〕(名) 家畜を飼ひ置く小屋の糞尿と敷藁の交ったものを腐敗させた肥料。**—さぶらい**〔厩侍〕(名) 鎌倉・室町時代の武家の邸内の控所。**—だて**〔厩立〕(名) 厩で飼ひ馴した馬。

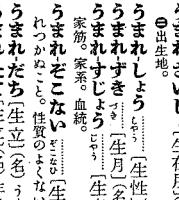
—の-べっとう〔厩別當〕(名) 院司・家司(けいし)・國司などの下に屬し、馬の飼養を掌った役。**—ぶぎょう**〔厩奉行〕(名) 鎌倉・室町時代の幕府の厩馬のことを司り、兼ねて將軍の他行に扈從した役。

うまや〔驛〕(名) 昔、馬や人夫を備へ置いて旅人の求に應じてつぎたしをした處。うまつぎ。しゅくば。**—じ**〔驛路〕(名) 宿駅の間に設けてある街道。**—ずかい**〔驛使〕(名) 昔、公事の爲に諸國へ往來した使者。**—ずたい**〔驛傳〕(名) えきでん。(古語) **—の-おさ**〔驛長〕(名) 宿駅長。

うまや-ばし〔厩橋〕(名) 【地】東京市隅田川に架けられた橋。淺草・本所兩區を聯絡するもので、駒形橋の下流にある。三徑間の鋼鈑助桁拱で、幅員二二米。昔、江戸幕府の厩のあった地。

うま-ゆみ〔馬弓〕(名) 馬上で弓を射ること。騎射。

うまよろい〔馬甲〕(名) 馬に着せる鎧で、多く鐵鎖で製し、金屬又は革の板を縫ひつけたもの。


〔鎧 馬〕

うまりょう〔右馬寮〕(名) うまのつかさ。

うまる〔埋る〕(自動、ラ下二) 埋る。

うまる〔生まる〕(自動、ラ下二) 胎兒が母の腹から出る。出生する。**生まれた後の早め藥**(句) 時期におくれて用ゐなさぬ藥。(早め藥は出産を促す藥) **生まれぬ先の襁褓**(句) 物事を早まってすることの譬。**生まれだめ**(句) うまれつき卽ち天性ではないこと。**生まれもつかぬ**(句) うまれつき卽ち天性ではないこと。**うまれた土地**〔生地〕(名) 産地。㊀生まれること。誕生。㊁生まれた土地。**うまれあわす**〔生合はす〕(自動、サ四) 同上時代に生まれる。**うまれあわ-せる**〔生れ合はせる〕(自動、サ下一) 同上時代に生まれる。

うまれ〔生損〕(名) 人畜に生まれつかぬこと。性質のよくないこと。又、その人。

うまれぞこない〔生立〕(名) 生まれて間もないこと。天寿。

うまれだち〔生立〕(名) うまれつき。

うまれたて〔生立〕(名) 生まれて間もないこと。

うまれつき〔生附〕(名) 生まれついた性質。天性。

うまれつく〔生れ附く〕(自動、カ四) うまれながら身に受けける。生まれながら其の身にそなはる。

うまれどき〔生時〕(名) うまれた時。

うまれどころ〔生所〕(名) うまれた所。

うまれとし〔生年〕(名) うまれた年。せいねん。

うまれながら〔生れながら〕(名・副) 生まれた時から。生まれたまま。生まれつくまま。

うまれび〔生日〕(名) うまれた日。誕生日。

うまれる〔生れる〕(自動、ラ下一) はえる。(自動、サ下一)(うまれあわす)の口語。

うまれ〔生生〕(副) 生まれるとすぐ。生まれたまま。

うまれおち〔生落〕(名) うまれおちること。出生。

うまれおち-る〔生れ落ちる〕(自動、ダ上一)(うまれおつ)の口語。

うまれ-おつ〔生れ落つ〕(自動、タ上二) 生まれて此の世の人となる。

うまれ-かえ-る〔生れ返る〕(自動、ラ四) 生まれかへって生まれて來る。(古語)

うまれ-かわ-る〔生變る〕(自動、ラ四) ㊀死者の魂魄が、再び二世に他の者となって生まれる。㊁悔い改めて善人となる。

うまれご〔生兒〕(名) うまれた兒。

うまれこきょう〔生故郷〕(名) 生まれ出た土地。故郷。産地。

うまれざいしょ〔生在所〕(名) ㊀生まれた田舍。㊁出生地。

うまれしょう〔生性〕(名) うまれつき。天性。

うまれずき〔生月〕(名) うまれた月。生月。

うまれすじょう〔生素姓〕(名) 生まれた家筋。家系。血統。

うまれ-ず〔生性〕(名) うまれつき。天性。

うまれ-ず-き〔生月〕(名) うまれた月。生月。

うまれ-ず-じょう〔生素姓〕(名) 生まれた家筋。家系。血統。

うまれ-ぞこない〔生損〕(名) 人畜に生まれつかぬこと。性質のよくないこと。又、その人。

うまれ-だち〔生立〕(名) うまれつき。天寿。

うまれ-たて〔生立〕(名) 生まれて間もないこと。

うまれ-つき〔生附〕(名) 生まれついた性質。天性。

うまれ-つく〔生れ附く〕(自動、カ四) うまれながら身に受けける。生まれながら其の身にそなはる。

うまれ-どき〔生時〕(名) うまれた時。

うまれ-ど-ころ〔生所〕(名) うまれた所。

うまれ-とし〔生年〕(名) うまれた年。せいねん。

うまれ-ながら〔生れながら〕(名・副) 生まれた時から。生まれたまま。生まれつくまま。

うまれ-び〔生日〕(名) うまれた日。誕生日。

うまれ-る〔生れる〕(自動、ラ下一) うまれる。(自動、サ下一)(うまれあわす)の口語。

うまれ-うまれ〔生生〕(副) 生まれるとすぐ。生まれたまま。

うまれ-おち〔生落〕(名) うまれおちること。出生。

うまれ-おち-る〔生れ落ちる〕(自動、ダ上一)(うまれおつ)の口語。

うまれ-おつ〔生れ落つ〕(自動、タ上二) 生まれて此の世の人となる。

うまれ-かえ-る〔生れ返る〕(自動、ラ四) 生まれかへって生まれて來る。(古語)

うまれ-かわ-る〔生變る〕(自動、ラ四) ㊀死者の魂魄が、再び二世に他の者となって生まれる。㊁悔い改めて善人となる。

うまれ-ご〔生兒〕(名) うまれた兒。

うまれ-こきょう〔生故郷〕(名) 生まれ出た土地。故郷。産地。

うまれ-ざいしょ〔生在所〕(名) ㊀生まれた田舍。㊁出生地。

うまれ-しょう〔生性〕(名) うまれつき。天性。

うまれ-ずき〔生月〕(名) うまれた月。生月。

うまれ-すじょう〔生素姓〕(名) 生まれた家筋。家系。血統。

「うまるの」の口語。

うまわ[馬渡](名)❶江戸時代に、毎年六月、隅田川で馬術の調練をして將軍が臨檢したこと。❷(すいば)〈水馬〉。

うまわたし[馬渡](名)

うまわる[殖る](他動・ラ四)ふや す。番殖させる。(古語)

うみ[海](名)❶[地](イ)地球上の陸地以外の部分で、鹹水を湛へた所。地球表面積の凡そ四分の三を占め、其の面積三億六千八百萬方粁。平均深度三千六百米。(ロ)湖などの大水を湛へた所。❷水の溜つた所。❸物事の集まつた所。**—とも山ともつかず**(句)何れとも決せぬことの譬。**—に千年河に千年**多年世路の經驗を積んだ老狐な人の譬。**—も見えぬに船用意**(句)事を早まつてすることの譬。**—を山にす**(句)無理なことをすることの譬。

うみ[膿](名)腫物・疵などによつて、皮膚・筋肉の腐敗して出る帶黃白色の粘液で、一種の臭氣を有する。うみしる。

うみ[生](名)うむこと。うんだこと。**—の恩より育てての恩**(句)生んでくれた親の恩よりも養育してくれた親の恩の方が重いこと。

うみあつむ[生集む](他動・マ下二)子を多く生む。(古語)

うみうさぎ[海兎](名)【動】海兎科の挙大の海産軟體動物。體色黑く、殼表は磁白色で、光澤強く、白斑の如き外觀を呈する。外脣内曲の度小さく内脣には齒がない。床飾・文鎮等に用ひる。あめふらし。

うみ・うし[海牛](名)【動】軟體動物中の腹足類の一。貝類であるが殼なく有しない。體色紅又は碧で、美麗で淺海の岩上に棲息する。體は「なめくじ」の如く長楕形で、背面に二本の觸角と花紋樣の鰓とを具へ、鰓の中心に肛門を開く。

〔しうみう〕

うみ・うそ[海獺](名)【動】あしか。

うみ・うなぎ[海鰻](名)【動】あなご。

うみ・うす[海馬](名)【動】たつのおとしご。

うみ・うめ[熟梅](名)熟した梅。

うみ・うり[熟瓜](名)熟した瓜。

うみお……を[續苧](名)うんだ麻。うみそ。(古語)

—なす[續苧なす](枕)「むがら」(長良)・「ながと」(長門)の枕詞。

うみ・おそ[海獺](名)【動】あしか。

うみ・おとす[生落す](他動・サ四)生む。分娩する。【古語】

うみ・が[海處](名)(「がし」は島の意。海のほとり。)(古語)

うみ・がた[海形](名)海上の景色を模造したもの。(古語)

うみ・がつき[産月](名)うみづきの臨月。(古語)

うみ・がめ[海龜](名)【動】海産の龜類の總稱。青海龜・「赤海龜」・「たいまい」(玳瑁)等の種類がある。

うみ・がも[海鳧](名)【動】うがも。

うみ・がや[海萱](名)【植】(おき)(萩)。

うみ・がらす[海烏](名)【動】海雀科の鳥。體は鳩より稍・大きく、上面羽毛は黑褐色又は黑褐色で、胸以外は純白色、尾は黑褐色、嘴は黑色で先端尖つて細長く、脚は短い。

うみ・きし[海岸](名)海に沿うた岸。かいがん。

うみ・きわ[海際](名)海のほとり。うみべ。かいへん。

うみ・ぐさ[海草](名)【植】海中の藻類の總稱。

うみ・くちなわ……ちなは[海蛇](名)【動】うみへび。

うみ・ごめ[海米](名)【植】(こうほうむぎ)。

うみ・さち[海幸](名)海の獲物の利得あること。(山さちの對)(古語)**—ひこ**[海幸彦](名)【神】❶海に漁りして獲物を得る男神。❷火照(ほて)命。

うみ・じ……じ[海路](名)海上の舟の通ふ道。航路。

うみ・しか[海鹿](名)【動】あめふらし。

うみ・しじみ[海蜆](名)【動】蜆の一種。介殼は黑褐色又は茶褐色、海に產する。

うみ・しる[膿汁](名)うみ。のうじふ。

うみ・す[産巢](名)子を生むもの。子を孕む腹。

うみすい・いし……ひ[膿吸石](名)龜骨の類で、圓く平たい小石。膿を吸ふ特效がある。

うみ・すぎ[海杉](名)【動】うみひば。

うみ・ずき[産月](名)胎兒を產むべき月。姙娠して約十ケ月目の月。りんげつ。

うみ・すずめ[海雀](名)【動】❶固翼類の海魚。堅い鱗甲を被り、頭に二角を有し、嘴尖り、背は青く斑點がある。鰭と尾とを動かして游泳する。雀魚。雀河豚。❷游禽類の海鳥。羽毛は上部は黑く下部は白い。嘴は左右に扁平で、先端尖つて銳く、灰白色で嘴峯は黑褐色を呈する。翼は短く、巧みに泳ぎ、又水中をもぐる。脚は後部に偏し前三趾に蹼がある。

〔めすすみう〕

うみ・ずら……ら[海面](名)海上。海面。海の表面。

うみ・せん・かわせん……かはせん[海千河千](名)海に千年河に千年住むことで、ずちがひな世を經て來た老狐な人をいふ。海千山千も同じ意。

うみ・そ[續麻](名)うんだ麻縄。

うみ・ぞうめん……ぞう[海索麺](名)❶【植】紅藻類の海藻で淺海の岩に生えて、長い紅狀をなして柔かく索麺のやうである。全身赤紫色で、鹽漬にし、又、乾かして食ふ。❷【動】後鰓類の軟體動物の卵。岩石又は海藻の上に產卵し、紅・黃・紫等彩色種種で索麺の形をしてゐる。

うみ・たなご[海鯽](名)【動】硬鱗類の海魚。體は楕圓形で平たく、上部は銀青色、下部は銀白色。體長二〇糎位。近海の海藻間に棲む。

うみ・だ・す[海出す](他動・サ四)❶胎兒を生む。❷働いて金錢をまうけ出す。

うみ・ち[膿血](名)❶膿と血。❷血の交つた膿。

〔筍海〕

うみ・ち[海地](名)海に沿うた地。沿岸。

うみ・ちょうちょう……ちょ[海蝶](名)【動】(とびうを)〈飛魚〉。

うみ・つかる……れる[倦疲る](自動・ラ下二)くたびれる。物事にあいて疲勞を覺える。

うみ・つかれる……れる[倦疲れる](自動・ラ下一)「うみつかる」の口語。

うみ・つく……けつく[生み附く](他動・カ下二)❶卵を生んで物に附著させる。❷生んで其の人の性質を受けさせる。

うみ・つける……けつける[生み附ける](他動・カ下一)「うみつく」の口語。

うみ・つる……れる[海燕](名)【動】海燕科の海鳥。海面に游泳し、羽は主として白色、褐色又は灰色のものが多い。尾は分叉し、嘴は末端鉤狀をなし、趾に蹼を具ふ。飛ぶさま燕に似てゐる。

うみ・つる……れる[生み連る](他動・ラ下二)生んだ子を引連れる。

うみ・て[海手](名)海の方角。

うみ・どうがめ[海泥龜](名)【動】かぶとがに。

うみ・どじょう……ぢよう[海泥鰌](名)【動】(きんぼう)〈銀寶〉。

うみ・ながし[産流](名)❶(りゅうさん)〈流産〉。❷生んだばかりで其の子の世話をせぬこと。

うみ・なり[海鳴](名)暴風雨襲來の前兆として海から起こる一種の音響。

うみ・ねこ[海猫](名)【動】鷗の一種で、鳴く聲は「猫に似てゐる。

うみ・の・おい[海老](名)【動】えび。

うみ・の・おきな[海翁](名)【動】えび。

うみ・の・おや[生親](名)自分を生んだ兩親。實父母。**—より育ての親**(句)自分を生んだ實父母の恩よりも養育してくれた親の恩の方が重い。

うみ・の・こ[生子](名)自分の生んだ子。實子。

うみ・の・ちち[生父](名)自分を生んだ父。實父。

うみ・の・はは[生母](名)自分を生んだ母。實母。

うみ・の・ふじん[海の夫人](名)【文】(The lady from the sea)イブセンの五幕物。喜劇。熱情的且

空想的な愛慕の一人娘エリーダといふ婦人を主人公とした戯曲で、エリーダは博士ヴァンゲルの後妻となったが、博士が前妻を思ふ情の切なると、自分が海のあこがれを持ってゐるので、昔馴染のアメリカ船の船長と海を渡って去らうとするのを博士は熱情こめて諭すので、悔悟して博士の許に戻るといふ筋である。一八八八年發刊。

うみ・のふすま〔海衾〕(名)海面の盛ったままを

うみ・のみやこ〔海都〕(名)りゅうぐう(龍宮)。

うみ・ばと〔海鳩〕(名)【動】海鳥類の海鳥の形・羽色共に海鴿に似て稍小さい。

うみ・ひば〔海檜葉〕(名)㊀【動】ひどろ蟲類の腔腸動物。海草の生ぜる岩石などに著生し、骨骼枝條をなし、無色透明、外觀海藻に似る。㊁【植】紅藻類の海藻。海底の岩石に附著し、外部柔かで骨格は羽狀に分枝する石灰質より成り、體色は多く紅紫色をなす。

〔㊁ばひみう〕

うみ・ひろぐ〔ひろぐ〕(他動、ガ下二)子を多く生む。うみ集む。

うみ・ひろ・げる〔ひろげる〕(他動、ガ下一)「うみひろぐ」の口語。

うみ・ぶくれ〔海脹〕(名)つなみ。海嘯。

うみ・ぶね〔海船〕(名)海上を航行する船。

うみ・べ〔海邊〕(名)うみのほとり。うみばた。

うみ・ちま〔海絲瓜〕(名)【動】海絲類の一角貝の纖維と硅質の針骨とを有し、淡紫色を帶びてゐるが、乾燥すれば淡黃色を呈し强直となる。

〔まちへみう〕

うみ・へび〔海蛇〕(名)【動】海蛇科の海産魚。體長約二米位、上面は白色、胸鰭淡褐色。咖端尖り、犬齒は鋭く、鰓孔は幅が廣い。南日本に產し、食用としては顧みられない。うみくちなは。

うみ・ほうず……は〔海坊主〕(名)㊀【動】へしょうがくぼう)(正體不詳)。㊁海上にあらはれるといふ妖怪。

うみ・ほおずき〔海酸漿・龍葵〕(名)【動】てんぐにしの天狗蟹などの卵巢で、皮革く、多く相連って海中の岩石などに附著する。形は巾著又は長刀に似る。中の液を出し、小孔を穿って女子は酸漿に代へて吹きならす。

〔海酸漿〕

うみ・ぼたる〔海螢〕(名)甲殼類の貝。體長二糎位。楕圓形の介殼を有し、體の前部と後部腹面に凹入あり、眼は一對の複眼と單眼とを備へ、上唇の一部から一種の發光液を分泌し、海水に觸れて背色の發光をなす。秋季、太平洋岸に多く襲來する。あんげんら。

うみ・ほっす〔海拂子〕(名)【動】(ほっすがい)。

うみ・まつ〔海松〕(名)㊀海邊の松。㊁【動】腔腸動物の一。骨骼は黑色で樹枝狀をなし、膚にこまかい孔が多く、印材・パイプ等に製する。くろさんご。㊂【植】みる(海松)。

うみ・やなぎ〔海柳〕(名)【動】あまも。

うみ・やま〔海山〕(名)㊀海と山。㊁物事の高く深くなること。

うみ・ゆり〔海百合〕(名)【動】棘皮動物の一。猪口狀をなし、長き有節の柄によって樹立し、駿河灣等の七〇米以上の深海に產する。

うみ・わた〔海綿〕(名)【動】かいめん。

うみ・ゐ〔有無〕(名)㊀有ると無い。㊁應と否と。いやとおうと。㊂【佛】有に執著すると無に執著するとの邪見。**―の事**(句)否やの事。何とか定まったこと。**―を言はせず**(句)承知・不承知に拘はらず無理やりに。

うむ〔ぼめむ〕(倦む)(自動、マ四)㊀いやになる。あきる。㊁退屈する。くたびれる。疲れる。

うむ〔ぼめむ〕(熟む)(自動、マ四)㊀みがいる。成熟する。㊁臉をもつ。

うむ〔ぼめむ〕(生む)(他動、マ四)㊀ぶんべん(分娩)する。㊁ふやす。**生んだ子より抱いた子**(句)生んだ子より養育した子の方が可愛い。

う・む〔ぼめむ〕(績む)(他動、マ四)麻・苧などを細く裂いて長くつなぎあはせる。

うむかし〔ぼめかし〕(埋む)(他動、マ下二)㊀うづめる。㊁水を加へて湯をぬるくする。「かし」は古語。

うむかしむ〔ぼめかしむ〕(自動、マ四)うむかしと思ふ。よろこばしいと思ふ。(古語)

うむが・つき〔産月〕(名)うみづき。りんげつ。(古語)

うむき〔蛤〕(名)【動】はまぐり。(古語)

うむく〔ぼめく〕(呻く)(自動、カ四)うめく。(古語)

うめ〔梅〕(名)㊀【植】薔薇科の落葉喬木。樹幹は直上せず、樹枝は横斜し、樹皮は黑褐色。葉は卵形で先端尖り、鋸齒を有する。早春、葉に先だって花を開く。花は五瓣で香氣が高い。色は紅・白・淡紅・鐵は單・重二種がある。實は梅雨の頃に熟する。果實は生食し、又、梅干或は梅漬とし、木材は器物とする。㊁毀ぶきの色目。表は白、裏は綠芳。㊂教所の名。種類が多い。**―は食ふと も核**(句)仲のよい物の譬。**―は食ふと 食ふな中に天神寢てござる**(句)梅の核が有毒なことをあらはした句。「べき飲損」

うめあな〔埋穴〕(名)㊀物を埋める穴。㊁補償

うめあわす〔埋め合はす〕(他動、サ下二)㊀つぐなふ。㊁彼と是と平均する。

うめあわす〔埋め合はす〕(他動、サ四)前條に同じ。

うめあわせ〔埋合〕(名)うめあはせること。

うめあわせる〔埋め合はせる〕(他動、サ下一)(うめあわす)の口語。

うめが・え〔梅枝〕(名)㊀梅の枝。㊁源氏物語の第三十二帖目の名稱。㊂能の曲名。世阿彌の作。㊃小唄の一。**―でんぶ**〔梅枝田麩〕(名)きざみ鰹を酒と醬油とで煮て、山椒の粉をふりかけたもの。

うめがえし……〔梅返〕(名)おもに羽織の裏地に用ひる紅梅色の染物。元祿の頃行はれた。

うめがか〔梅香〕(名)梅の花のかをり。

うめがさね〔梅襲〕(名)襲の色目。表は白、裏は綠芳。裏は紅梅。一說には、表は白、裏は綠芳。

うめがわちゅうえめいどのひきゃく……ゆ……〔梅川忠兵衛冥途飛脚〕(名)【文】近松門左衛門作の淨瑠璃。大阪淡路町の飛脚宿亀屋忠兵衛と遊女梅川との情死した事を脚色したもの。寶永八年、竹本座初演。

うめき〔埋木〕(名)材などの隙間に木をうめてつくらふこと。**―ざいく**〔埋木細工〕(名)種種の木をつぎあはせて物の形を造り出す細工物。よせざいく。

うめき〔呻吟〕(名)うめくこと。なること。

うめき〔呻吟聲〕(名)うめく聲。

うめく〔ぼめく〕(呻く)(自動、カ四)㊀苦しさの餘りになる。わめく。㊁なめきさけぶ。㊂苦しんで詩歌を詠する。苦吟する。

うめ・くさ〔埋草〕(名)㊀すきまを補足するもの。㊁穴藏などに貯へ置く飼草。㊂攻城の際に堀をうめる草。

うめけんじろう……〔梅謙次郎〕(名)【人】民法學者。法學博士。東京帝國大學法科大學教授。同法科大學長。文部總務長官。明治四十三年(一五七〇)歿。年五十一。「民法要義」「民法原理」等の著がある。

うめ・ごよみ〔梅暦〕(名)㊀梅の花。山中では梅の花の咲くのを見て春を知るのでいふ。㊁【文】しゅんしゅんこよみ(春色梅暦)の略。

うめず〔梅酢・梅漿〕(名)梅の實を鹽漬にした汁。多く紫蘇を加へて赤くする。胡瓜・大根等を漬けて食用とし、又、鏡研・金屬細工に用ひる。味醂と砂糖の中へ漬ける法もある。

うめずけ〔梅漬〕(名)㊀梅の實を鹽又は「アルコール」などに漬けたもの。㊁瓜・大根などを赤梅酢に漬けたもの。

うめぞの〔梅園〕(名)梅の樹を多く植ゑた庭園。

うめ-ぞめ〔梅染〕(名) ❶紅梅の根を煎じた汁で染めた染色で、黄ばんだ赤色。❷うめがさね。

うめだ-げんじろう〔梅田源次郎〕(名)【人】志士。名は常明。雲濱と號する。若狭小浜の人。山崎闇齋に學び、尊王攘夷の說を唱へ、安政六年(一五一九)江戸の獄舍に斬られた。年四十四。

うめた-つ〔埋立つ〕(他動・タ下二)〔たてたりたる・たてたり・たてたる・たてたれ・たてたれ〕埋立つ。凹んだ所を土で埋める。

うめた-て〔埋立〕(名) ❶うめたてること。又、その土地。❷河海などを埋めて陸とすること。**—こうじ**〔埋立工事〕(名) 河海などを埋めて立てる工事。**—しんち**〔埋立新地〕(名) 新しく埋立てて出來た土地。**—ち**〔埋立地〕(名) うめ立てて出來た土地。

うめた-てる〔ててたてたる・ててたり・ててたる・ててたれ・ててたれ〕〔埋立てる〕(他動、タ下一)「うめたつ」の口語。

うめちゃじょろう〔ちゃじょろう〕〔埋茶女郎〕(名) 埋茶見世にゐた遊女。江戸、吉原にゐた下等遊女。

うめつ-さつき(名) 陰暦二月の異稱。(古語)

うめつ-さばな(名) 冬の梅の異稱。(古語)

うめつ-ずき〔ずき〕〔梅津月〕(名) 陰暦二月の異稱。(古語)

うめつぼ〔梅壺〕(名) ❶宮中の凝華舍の稱。❷梅みゑ。

うめ-どい〔どい〕〔埋樋〕(名) 地中に埋めた樋。うづゆ。

うめの-あめ〔梅雨〕(名) ばいう。さみだれ。

うめの-いろずき〔ずき〕〔梅色月〕(名) 陰暦五月の異名。(古語)

うめ-のる〔なる・なり・なり・なる・なれ・なれ〕〔諾ふ〕(他動、ハ四) うべなふ。うけがふ。承知する。(古語)

うめの-せっく〔梅節句〕(名) 紀元節。建國祭の帶目、伊勢白具科の海産二枚貝。殼は四く小さく、梅の花瓣に似てゐる。殼表は淡黃褐色、内面は純白く貝細工の巻などに用ひる。「すこと。

うめのはながさ〔梅花笠〕(名) 梅花を頭にかざ

うめのはなきぬ〔梅花衣〕(名) うめがさね。

うめ-はたけ〔梅圃〕(名) うめぞの。

うめ-ばち〔梅鉢〕(名) 紋所の名。單瓣の梅花を正面から見た形のもの。**—そう**〔そう〕〔梅鉢草〕(名)【植】虎耳草(ゆきのした)科の多年生草本。葉の形は心臟形で長い葉柄を有する。莖の高さ二糎位。夏日一花莖毎に一輪づつの小白花をつける。形、梅花に似る。**—も**〔梅鉢藻〕(名)【植】(はいかも)。

〔草鉢梅〕

うめ-もっぱずき〔ずき〕〔梅初月〕(名) 陰暦十二月の異名。(古語)

うめ-ぼし〔ぼし〕〔梅干〕(名) 熟した梅を鹽漬にして取出して乾かし、紫蘇の葉を加へて漬け、取出して日に晒した食品。**—あめ**〔梅干飴〕(名) 水飴を煮詰め、香料・著色料を加へ、油をつけて固めた菓子。形が梅干に似てゐるからいふ。**—おやじ**〔おやじ〕〔梅干爺〕(名) 年老いて顔に皺の多くなった男。**—ばば**〔梅干婆〕(名) 年老いて顔に皺の多くなった女。

うめ-みず〔梅見月〕(名) 陰暦二月の異稱。(古語)

うめ-みずき〔ずき〕〔梅見月〕(名) 陰暦二月の異稱。(古語)

うめ-みぞ〔梅溝〕(名) 地中に埋めた汚水の逃る溝。

うめ-もどき〔梅擬・落霜紅〕(名)【植】冬青(もちのき)科の落葉小喬木。葉は梅に似て互生し、五六月の頃淡紫色又は白色紅暈の花を開き、冬季紅色の小果を結ぶ。

〔きどもめう〕

うめ-やしぶ〔梅谷澁〕(名) 紅梅の根を煎じた染汁で明礬を加へて用ひる。その染めたものを木蘭(もくらん)地といふ。

うめ-ゆ〔梅湯・塡湯〕(名) 水を加へてぬるくした「湯。

うめ-ようかん……〔梅羊羹〕(名) 梅干の肉を加へて製した羊羹。

うめ-める〔めめめる・めめる〕〔埋める〕(他動・マ下一)「うじの口語。

うもう〔芋〕(名)【植】いも。さといも。(古語)「(古語)

うもう〔うもう〕〔羽毛〕(名) ❶鳥の羽と獸の毛。❷鳥のはね。

うもる〔れれれるる・れる〕〔埋る〕(自動、ラ下二)(うずもる)。

うもれ〔埋〕(名) うもれること。**—い**〔埋井〕(名) あれはてて埋に塞がった井戸。**—ぐさ**〔埋草〕(名)【植】❶樹蔭の下などにはえて人に知られぬ草。(古語) ❷世に見捨てられたもの。(古語)**—み**〔埋身〕(名) 世に捨てられて知られぬ人。おちぶれた身の上。(古語)**—みず**〔埋水〕(名) 草木の陰にかくれた水。(古語)

うもれ-ぎ〔埋木〕(名) ❶樹木が久しく水中や土中に埋れてゐて化石のやうになったもの。❷世に捨てられて顧みるものもない境遇。**—ざいく**〔埋木細工〕(名) 埋木で細工した器具で、仙臺の名產。**—の**〔埋木の〕(枕)「あちはるまじ」にかかる。(下)の枕詞。**—に花が咲く**(句) 不運の身の意外の幸運にめぐりあふこと。

うもん〔有紋〕(名) ❶衣服に紋のあるもの。❷能樂などで、作法の正しいこと。

うもん〔有文〕(名) ❶言外に、意味を含んだ俳句。❷小さい菱形の紋のある羅(うすもの)で張った冠で、五位以上の者の用ひたもの。❸唐草・獅子形などの模樣ある石帶。

うや〔禮〕(名) 作法。禮儀。ねや。(古語)

うや〔烏夜〕(名) 間の夜。閑夜。

うや〔雨夜〕(名) 雨の降る夜。あまよ。

うやうやし〔しく・しく・しき・しき・しけれ・しかれ〕〔恭し〕(形、二)。つつしむさま。**—い**〔いく・いく・いき・いき・いけれ・いかれ〕〔恭しい〕(形)「うやうやしいやうす。**—げ**〔恭しげ〕(名)「うやうやしい」の口語。

うや-えぼし〔ゑぼし〕〔禮烏帽子〕(名) 禮服の意で、「立烏帽子(たてえぼし)」のこと。

うやか-く〔かく・かく・かき・かき・かけ・かけ〕(他動、カ四) 敬ふ。(古語)

うや-す〔すせすす・すせす〕〔飢す〕(他動、サ四) 空腹にする。うゑるやうにする。

うやまい〔まいまい・まいまい・まいまい・まいまい〕〔敬〕(名) うやまふこと。尊敬。

うやまい〔まいまい・まいまい・まいまい・まいまい〕〔敬ふ〕(他動、ハ四)(うやもう)の口語。「おぼろげなこと。曖昧。

うやむや〔有耶無耶〕(名) 物の分明ならぬこと。

うやもう〔やもう・やもう・やもう・やもう・やもう・やもう〕〔敬ふ〕(他動、ハ四) 尊んで禮を盡くす。尊敬する。あがめる。

うゆ〔植ゆ〕(名)「うう」の誤。

うゆ〔飢ゆ〕(名)「うう」の誤。

うゆう〔烏有〕(名)(烏(いづ)んぞあらんやの意)全く無いこと。何物もないこと。火災で皆無になること。**—せんせい**〔烏有先生〕(名) 假作人物。

うよ〔紆餘〕(名) ❶まがりくねること。❷遠まはしにうまくいふこと。**—きょくせつ**〔紆餘曲折〕(名) ❶まがりくねること。❷事情が錯雜してゐること。

うよ〔雨餘〕(名) 雨のはれた後。あまあがり。雨後。

うよ〔有餘〕(名)【佛】餘る所があって究極に至らぬこと。**—ねはん**〔有餘涅槃〕(名)【佛】此の世に於いて涅槃に達した境。涅槃に入っても肉體の存すること。死後究極の境界に至るのを無餘涅槃といふ。

うよ-うよ〔羽翼〕(名) ❶羽と翼。❷輔佐すること。又、其の人。たすけ。❸【植】植物學上、一器官の左右に擬がってゐる附屬物の總稱。

うよく〔右翼〕(名) ❶右の翼。❷隊列の右の端。❸【政】衆議院又は保守派。フランス革命當時、國民議會で、議長に向かって右に漸進派を著席せしめたからいふ。(左翼の對)「かける療法。

うよく〔雨浴〕(名)【醫】全身に濕水器で水をふきかけること。

うら〔裏〕(名) ❶うらと。❷なか。うち。内部。裏面。(おもての對) ❸うらと。❹一定の定理の假說及び終結を否定して得た定理。❺略式の流儀。❻同じ遊女に二度逢ふこと。❼肛門。❽内幕。暗黑面。**—には喜があ**

る〔句〕社會の現象は誠に複雑してゐる。**—の裏を行く**〔句〕敵の意想外に出る賊法。**—をかく**〔句〕㊀矢などが裏まで通ふる。㊁敵の計の反對に出て機先を制する。**—を返す**〔句〕㊀同一の形を重れてする。㊁同じ遊女を二度あげる。

うら〔末〕〔名〕㊀はし。すゑ。はて。㊁こすゑ。梢。

うら〔浦〕〔名〕㊀海や湖の陸地に入り込んだ所。㊁うみべ。

うら〔心〕〔名〕こころ。心の中。〔古語〕

うら〔占〕〔名〕物の象や徴候によって、未來の吉凶を判斷すること。〔古語〕

うら〔心〕〔接頭〕「心」「思」の意。「—悲し」。

うら〔己〕〔代〕おのれ。われ。

ウラー〔名〕〔ロシヤ語〔Ura〕〕我が國の「萬歳」の意。

うらあそび〔浦遊〕〔名〕浦に出て魚介などを採って遊ぶこと。

うらあわせ〔裏合〕〔名〕㊀互に心をうちあけること。心の合ふこと。㊁ひとつになること。㊂裏と裏とあふこと。㊃家の裏と裏とが向きあふこと。

うらいそ〔浦磯〕〔名〕いそ。はま。

うらいた〔裏板〕〔名〕㊀物の裏面にある板。㊁屋根裏に張りつけた板。㊂天井。

うらいん〔裏印〕〔名〕質印の裏に彫った小印。

うらうら〔裏表〕〔名〕㊀裏と表と。うらおもて。㊁反對。

うらうずがい〔裏渦貝〕〔名〕〔動〕卷螺(すがい)科の海産卷貝。直徴三糎位で、圓錐形をなし、殼の底に渦の細紋がある。

うらうち〔裏打〕〔名〕㊀紙又は革などの裏面に、紙や布などをはること。㊁裏をつけた直垂。**—ぐさり**〔裏打鎖〕〔名〕裏打をしたくさりかたびら。

うらうめ〔裏梅〕〔名〕襲(かさね)の色目。表は白、裏は蘇芳。

うらうら〔浦浦〕〔名〕所所の浦。到る所の浦。

うらうら〔名・副〕のどか。ほがらか。うららか。

うらうえ〔占田〕〔名〕收穫する稻を神饌に供へる爲にうらなひ定めた田。

うらえり〔裏襟〕〔名〕着物の襟の裏に縫ひつけたかよくあふ。〔古語〕

うらおおぐび〔裏紐〕〔名〕表と裏とからなる着物のうらおもい〔心思〕〔名〕うらおもふこと。

うらおもう〔心思ふ〕〔自動・ハ四〕㊀心配する。㊁猶豫する。ためらふ。〔以上古語〕

うらおもて〔裏表〕〔名〕(うらうえ)。

うらが〔浦賀〕〔名〕〔地〕神奈川縣三浦郡にある町で、三浦半島の東岸にある。横須賀市の東に續く。嘉永六年(一八五一三)と安政元年(一八五一四)にアメリカの提督ペリーの通商を求めた地。**—ぶぎょう**〔浦賀奉行〕〔名〕江戸幕府の職名。浦賀に出入する船舶及び其の米穀・食物等を監査すること。常〇〇となる浦賀に移した。

うらがえし〔裏返〕〔名〕うらがへすこと。

うらがえす〔裏返す〕〔他動・サ四〕裏を返して表とする。ひっくりかへす。てんたうする。

うらがえる〔裏返る〕〔自動・ラ四〕㊀ひっくりかへる。裏がかへって表になる。㊁味が敵となる。

うらがき〔裏書〕〔名〕㊀紙の裏面に文字を書くこと。㊁軸物の裏に眞物證明の詞を書くこと。㊂裏に註釋などを書くこと。㊃手紙の裏に自己の氏名を書くこと。㊄小切手などの裏に表書金額領收の旨を記すこと。㊅【經】手形・證券等の讓渡又は質權設定を證する爲、一定の方式に從って、その裏面に其の旨を記すこと。㊆他の方面から或事實の確實なことを保證すること。**—きんし**〔裏書禁止〕〔名〕【法】手形の發行人又は所持人が、爾後の裏書を禁止する旨を記載すること。これによって此の手形は爾後他に讓渡し得ぬことになる。**—にん**〔裏書人〕〔名〕【法】手形の裏書をする人。**—ゆずりうけにん**〔裏書讓受人〕〔名〕【法】裏書によって手形や證券を譲り受ける人。**—ゆずり わたしにん**〔裏書讓渡人〕〔名〕【法】裏書によって債權を他に譲り渡した人。

うらかく〔裏かく〕〔自動・カ四〕うらをかく。〔裏の條を見よ。

うらがい〔裏囲〕〔名〕裏の方のかこひ。

うらがや〔裏貸屋〕〔名〕家の裏に建てた貸屋。うらだな。

うらがす〔裏がす〕〔他動・サ四〕心を浮きたたせる。

うらかぜ〔浦風〕〔名〕浦を吹く風。海邊なる吹く風。

—ぐさ〔浦風草〕〔名〕【植】うらじろ㊀。

うらかた〔裏方〕〔名〕貴人の奥樣。

うらかた〔占形・占象〕〔名〕占にあらはれた形象で、吉凶判斷のもととなるもの。〔古語〕〔語〕

うらがつ〔浦賤〕〔名〕海邊に住む賤しい漁夫。〔古語〕

うらがなし〔心悲し〕〔形・二〕心の中が悲しい。〔古語〕

うらがね〔裏鐵〕〔名〕鏡などの裏面に打附けた鐵の板。

うらがね〔裏曲・裏矩〕〔名〕曲尺の裏に目盛した尺度。うらじゃく。裏の目。

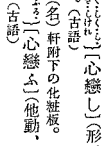
うらがる〔末枯る〕〔自動・ラ下二〕草木の枝先や葉先がかれる。

うらがれ〔末枯〕〔名〕うらがれること。

うらがわ〔裏側〕〔名〕裏の方。裏面。〔の對〕

うらぎく〔末木〕〔名〕樹木のさきの方。梢。(もと・木

うらぎく〔浦菊・金盞菜〕〔名〕【植】菊科の多年生草本。海邊の濕地に生ずる。莖は高さ九〇糎位。葉は線形全緣。秋、淡紫色の小花を纖厄花序に開き、花後、粗毛を密生した瘦果を生ずる。はましなん。


〔菊浦〕

うらぎく〔裏菊〕〔名〕㊀菊の花を裏から見た形。㊁鍔につけた菊花形のかざり金物。

うらきど〔裏木戸〕〔名〕裏口の木戸。

うらきもん〔裏鬼門〕〔名〕鬼門とは反對の方角で、西南方。

うらぎり〔裏切〕〔名〕味方にそむいて敵に通ずること。內應。內通。

うらぎる〔裏切る〕〔自動・ラ四〕㊀うらぎりする。㊁平素の主張とは反對の結果が生ずる。

うらきん〔裏金〕〔名〕日本畫で繪絹の裏から金箔を當てたものの稱。うらはく。

うらぐ〔裏ぐ〕〔自動・ガ下二〕樂しむ。愉快になる。うきたつ。〔古語〕

うらくぎ〔裏釘〕〔名〕打った釘の先が、裏まで貫き出たもの。**—かえす**〔裏釘返す〕〔句〕物に打込んだ釘の、裏に突出たのを打まげて返す。念に念を入れることにいふ。

うらくし〔下串〕〔名〕大祭會の時、悠紀・主基の國郡卜定の名を記した紙。

うらくずし〔裏崩〕〔名〕【經】取引所用語。株の賣買に際し、初め高く賣出して、相場の下落した頃を見て買戻し、其の差額を利得する法。

うらくずれ〔裏崩〕〔名〕後方部隊の崩れ亂れること。

うらくち〔裏口〕〔名〕家の裏手の出入口。勝手口。

うらくりゅう〔有樂流〕〔名〕茶道の一派。千利休から分派し、織田有樂齋長益の創めたもの。

うらぐわし〔裏麗し〕〔形・二〕面白い。樂しい。〔古語〕

うらけ〔裏毛〕〔名〕ラシャ・メリヤス等の襯衣などの裏面に毛を織り出したもの。

うらこい・し〔心戀し〕〔形・二〕心の中に戀ひしく思ふ。〔古語〕

うらごう〔裏甲〕〔名〕軒附下の化粧板。

うらごえ〔裏聲〕〔名〕㊀殊更に低く歌ふ聲。㊁【生】聲帶の一部が振動せずに發する聲。

うらごえ〔浦聲〕〔名〕海邊で囀る鳥の聲。

うらごし〔浦越〕〔名〕浦を越すこと。㊁浦から陸に吹く風。

うらごし〔裏漉〕〔名〕餡などを漉すに用ひる器で、底に布や金網を張ったもの。

うらこ

うらごし〔裏腰〕(名)袴の腰板の裏につける布。

うらごと〔占事・卜事〕(名)うらなひごと。うらなひ。(古語)

うらざいしき〔裏彩色〕(名)日本畫の極彩色の密畫で、絹地の裏面からも彩色を施すこと。

うらさだめ〔裏差〕(名)佩刀の鞘にさすこづか。

うらさだめ〔占定〕(名)うらなひで物事を決定すること。

うらざと〔浦里〕(名)浦近くにある村里。漁村。

うらさびし〔心寂し〕(形シク)心の中がさびしい。―**げ**〔心寂しげ〕(名)うらさびしいさま。―**さ**〔心寂しさ〕(名)うらさびしいこと。又、その程度。(古語)

うらさぶ〔心寂ぶ〕(自動、ハ上二)心さびしく感ずる。さびしがる。細く思ふ。(古語)

うらさぶ〔心荒ぶ〕(自動、ハ上二)心荒びすさぶ。

うらさん〔裏桟〕(名)天井板・扉などの裏面に取りつけた桟。

うらじ〔裏地〕(名)衣服の裏に用ひる布帛。

うらじ〔浦路〕(名)浦邊のみち。「語」

うらしお〔浦潮〕(名)浦に滿ちて來る潮。(古語)

ウラジオストック〔Vladivostok〕〔浦鹽斯德〕(名)〔地〕シベリヤの沿海州の海港で、ペテロ大帝灣に突出するムラビヨフ半島の尖端、ルスキー島の陰に位する。シベリヤの門戸である。同時に、世界交通上重要な水陸連絡地點で、我が敦賀港から海路約四〇時間で達し得る。

うらしま〔浦島〕(名)①浦にある島。②(動)腹足類の蝶貝。螺殼約七糎、殼の表面は淡褐色の地に五帶の方形栗色紋を繞らす。③浦島子。④〔文〕謠曲の名。―**こ**〔浦島子〕(名)〔傳〕日本書紀雄略紀・丹後風土記・萬葉集中に見える傳説的人物で、丹後水江又は與謝郡管川の漁夫と傳へられる。龜に伴なはれて龍宮で三年の月日を榮華の中に暮し、別れに臨んで美女から玉手匣を貰ひ、歸郷の後、戒を破って開いたが、立ち上る白煙と共に老翁になったといふ。―**そう**〔浦島草・虎掌〕(名)〔植〕天南星科の多年生草本。山野の陰地に自生する。地下莖は圓塊をなし、一莖一葉を生ずる。高さ六〇糎位。葉は鳥跡狀に分裂し、長い葉柄があり、その基部は花莖を抱く。四・五月の頃三〇糎位の花梗を出し、佛燄花(ほとけ)を開く。花軸の延長部は黒紫色の長い絲狀をなして地上に垂れるさまは、浦島太郎の釣絲を聯想させる。有毒植物。―**たろう**〔浦島太郎〕(名)〔傳〕浦島子。―**つつじ**〔浦島躑躅〕(名)〔植〕躑躅(つつじ)科の落葉灌木。矮小で個箇生する。葉は倒卵形で鋸齒を有し、深綠色。六月頃黄白色壺狀の花を開く。高山に自生する。―**の・はこ**〔浦島箱〕(名)浦島子の龍宮から持歸ったといふ箱。たまてばこ。

うらじゃく〔裏尺〕(名)うらがれ(裏曲)。

うらじろ〔裏白〕(名)①〔植〕裏白科の羊齒類。根莖土中に匍匐して蹠底に葉柄を抽き、分岐して二叉となる。葉は羽狀に分裂し、表は鮮綠色、裏は帶白色。春夏の際、葉の裏に類粒狀の胞子嚢を裸出する。葉は正月の飾に用ひる。②紙を横に二つに折って、表の方のみに文字を書いた手紙。③〔植〕うらじろのき。④うらどころれんが。―**いちご**〔裏白苺〕(名)〔植〕蔷薇科の落葉灌木。莖性で、莖の長さ一米位。葉は複葉で三小葉を有し、各小葉は卵形、葉緣に小缺刻と鋸齒とを有し、裏面に白色の綿毛を具へ。莖葉共に赤白毛と絨とを密生する。六月頃、梢上に花梗を出し、淡紅紫色の五瓣花を開き、花後、黄赤色の果實を生ずる。―**かんば**〔裏白樺〕(名)〔植〕樺木科の落葉喬木。高さ一五米に達する。葉は廣圓形若しくは卵形、緣邊に重鋸齒があり、裏面に白毛を生ずる。四・五月頃、葇胰に淡黄褐色を呈する單性の穗狀花序を下垂し、花後、圓筒形の果實を結ぶ。―**きんばい**〔裏白金梅〕(名)〔植〕蔷薇科の多年生草本。莖の高さ一〇糎位。葉は三出葉形をなし、深く缺刻し、黄色を呈する。夏秋の交、花莖を抽き、黄色五瓣の小花をつける。信州八ヶ嶽・戸隱山等に產する。―**ど**〔裏白戸〕(名)土藏の入口の引戸で、表を漆喰塗にしたもの。―**のき**〔裏白木〕(名)〔植〕蔷薇科の落葉喬木。高さ一二米位、周圍一米半以上に達する。樹皮は光澤を有し、葉は廣卵形で鋸齒があり、裏面に白毛が密生する。夏、葉の間に白色の繖房花群を開き、果實は櫻の實に似て赤い。材は堅く、器具製造に用ひられる。―**れんが**〔裏白連歌〕(名)連歌を懷紙の表にのみ書いて裏には書かぬ方式。

うらずける〔裏附ける〕(他動、カ下一)①裏をつける。②たしかにする。

うらずたい〔浦傳ひ〕(名)海邊に沿って行くこと。

うらせど〔裏背戸〕(名)せど。裏口。

うらせんけ〔裏千家〕(名)茶道千家流の分派で、千利休の孫宗室の創めたもの。本家千氏の裏に住んだからいふ。

うらだな〔裏店〕(名)人家の裏に建てた長屋。うらや。うらなかや。又、その人。―**がり**〔裏店借〕(名)裏店を借りて住むこと。又、その人。―**ずまい**〔裏店住〕(名)前條に同じ。

うらつき〔裏附〕(名)裏の附いたもの。②(うらつけぞうり)。―**ぞうり**〔裏附草履〕(名)裏をつけ重ねて呼くした草履。「と。

うらつけ〔浦潰〕(名)濱邊で魚鹽の鹽漬をすること。

うらて〔裏手〕(名)裏の方。裏面。うしろ。背後。

うらて〔古手〕(名)①相撲又は歌合の第一番のつがひ。(古語)②うらなひの結果。

うらとう〔古問ふ〕(自動、ハ四)占ひ問ふ。占ふ。(古語)

うらどう〔裏問ふ〕(自動、ハ四)心の遠く長く續いてゐるさま。

うらどおし〔裏通〕(名)裏の方のとほり。

うらとおり〔心釋く〕(自動、カ下二)心が解けること。心がさっぱりすること。(古語)

うらな〔裏名〕(名)いんご(隱語)。

うらない〔占ひ・卜ひ〕(名)うらなふこと。占象によって、將來の吉凶を判斷すること。占なする人。―**さん**〔占算〕(名)占ひ。はっけん。―**しゃ**〔占者〕(名)うらなひを業とする人。はっけん。―**たろう**〔のう〕の口語。

うらなふ〔古ふ〕(他動、ハ四)(うらなひの口語)。

うらながや〔裏長屋〕(名)うらだな。

うらなぎ〔浦凪・浦和〕(名)浦の波の靜かなこと。(古語)「中で冷え。(古語)

うらなく〔心泣く〕(自動、カ四)心の

うらなさけ〔心情〕(名)なさけ。愛情。

うらなし〔裏無〕(名)①裏のないもの。②裏をつけぬ草履。

うらなし〔心無し〕(形、ク)心に包み隱すことがない。心のべだてがない。(古語)

うらなみ〔浦波〕(名)浦によせて來る波。

うらなり〔末成〕(名)瓜などの蔓の末に實のなること。又、そのもの。(本成の對)

ウラニウム〔Uranium〕〔硝子〕(名)〔化〕ウラン。―**ガラス**〔硝子〕(名)〔化〕ウラニウムの鹽類を混じた黄色のガラス。燐光を放つ。以てガイスレル管を製するに用ひる。

うらにし〔浦西〕(名)西北風。(丹後地方の語)

うらにほん〔裏日本〕(名)〔地〕本州の中央山脈から日本海に臨む一帶の地。(表日本の對)

うらのう〔古ふ〕(他動、ハ四)占をする。占象によって將來の吉凶を考へ定める。

うらのかね〔裏矩〕(名)うらじゃく。うらがれ。

うらのかね〔裏印〕(名)馬の右腹に押す燒印。

うらのかみ〔陰陽頭〕(名)うらのつかさの長官。

うらのつかさ〔陰陽寮〕(名)昔、中務省に屬し、天文・曆數の事を掌った役所。おんみやうれう。おんみやうれう。「やうれう。

うらは〔末葉〕(名)草木の末の葉。

うらはく〔裏箔〕(名)本畫で絹地の裏に金箔をおくこと。又、その金箔。

うらはず【末弭・末筈】(名) 弓の上部の筈。(本弭の對)

うらはずかし【心恥づかし】(形シク) 心中恥ずかしい。

うらはみ【卜食】(名) 龜の甲を焼いて占ふ時、其の縦又は横に刻む筋。縦を吉とし、横を凶とする。(古語) ㊀あべべ。反對。

うらはら【裏腹】(名) ㊀背と腹。㊁うらおもて。

うらはん【裏判】(名) ㊀文書の裏に其の保證としておす書き判又は印形。㊁實印の一方の端に刻んだ印判。多くは代判の場合にするもの。うらいん。

うらびと【占人】(名) うらなひをする人。(古語)

うらびと【浦人】(名) 浦べに住む人。

うらびる【心詫る】(自動ラ下二) わびしく思ふ。うれへわびる。つらく感ずる。(古語)

うらぶね【浦舟】(名) 浦にうかんでゐる舟。

うらぶみ【占文】(名) 占の判斷を書いた文書。

うらぶる【心詫る】(自動ラ下二) 心配する。わびしく思ふ。(古語)

うらべ【卜部】(名) 昔、神祇官に屬し、占のことを

うらべ【浦邊】(名) 浦のほとり。うみべ。

うらぼん【盂蘭盆】(名)【佛】梵 Ullambana 倒懸を救ふと譯す)。陰曆七月十五日に行ふ佛事。祖先父母の恩を報じ、併せて一切の死者の冥福を祈るため、種種の食物を供して讀經し、倒懸の苦しみを救はうとするもの。ぼん。うらぼんえ。だまやつり。

—え【盂蘭盆會】(名)【佛】うらぼん。

うらま【浦曲】(名) 海邊の曲り入りこんだ所。うらわ。(古語)

うらまさに【古正に】(副) 古正しく。占の如く。

うらまさり・**こうばい**【裏優紅梅】(名) 襲の色目。表は紅梅、裏は紅。

うらまち【裏町】(名) 表通りの裏にある町。

うらまつ【待つ】(自動、タ四) 心中で待つ。(古語)

うらみ【浦曲】(名) うらま。(古語)

うらみ【怨恨】(名) うらむこと。恨いと思ふこと。不滿足に思ふこと。殘念に思ふこと。

うらみ【怨】(名) 怨の心を含めて詠んだ歌。

—がお【怨顔】(名) 怨んだ顔つき。

—ぐち【怨口】(名) 怨言。

—ごと【怨言】(名) 怨んでゐる心持を述べる言。

—ごと【怨事】(名) 怨をあらはす事柄。

—そうば【怨死】(名) 怨を懷いて死ぬこと。

—じに【怨恨相場】(名)【經】損をして手仕舞をした後に起る反動相場。

—つ・こ【怨っこ】(名) 互に怨むこと。

—つぽい【怨っぽい】(形) 物事をうらめしく思ふ性質。

—つらみ【怨辛】(名) 怨めしく思ふ折。さまの怨。

—どき【怨時】(名) 怨むべき點。

—どころ【怨所】(名) 怨むべき點。

—なき【怨泣】(名) 怨めしさに泣くこと。

—なみだ【怨涙】(名) 怨の爲に流す涙。

—ね【怨寢】(名) 怨みながら寢ること。

—ぶみ【怨文】(名) 怨を述べた文書。

—骨髓に徹す(句) 人を怨むことの深いことにいふ。

—に報ゆるに德を以てす(句) (老子の句)怨ある者にも愛情の心から、恩德を以て報いる。

うらみごろ【裏褄】(名) 袷などの袖の裏の布。

うらみち【裏道】(名) ㊀裏口から通行する道。㊁本通り以外の道路。間道。ぬけみち。

—ずたい【裏道傳】(名) 裏道ばかりをつたつて行くこと。

うらむ【怨む・恨む】(他動、マ上二)

—【怨む・恨む】(他動、マ上二) ㊀人のしうちを不滿足又は不平に思ふ。㊁人の行爲をにくみ憤る。㊂無念がらしみる。㊃(名)「怨」「恨」は怒り憤む。㊄(名)「怨」「恨」は殘念に思ふ。

—らく・わ【怨むらくは】(副) 殘念なことには。くやしいことには。

うらむ【怨む・恨む・恨む】(他動、マ四) 前條に同じ。

うらむらさき【末紫】(名)(歌などに、多く怨むに言ひかけるむらさき。(古語)

うらめ【怨む・恨む・恨む】(他動、マ四) 前條……は「怨むらくは」(副) 殘念なことには。くやしいことには。

うらもよう【裏模樣】(名) うらにつけたもの。(古語)

うらもん【裏門】(名) 裏手の門。後門。

うらもん【裏紋】(名) 代用の紋所。かへもん。(表の對)

うらや【裏屋】(名) 人家の裏に建てた家。ろぢの中に建てた家。うらながや。

—こうじ【裏屋小路】(名) 裏屋にある路地。

—ずまい【裏屋住】(名) 裏屋に住居すること。又、その人。

うらやくせん【浦役錢】(名) 室町時代に、海濱に住居した者に臨時に課した稅。

うらやくば【浦役場】(名) 遭難船救護の爲に、沿海の要地に設けた役場。

うらや・さん【占算】(名) うらなひ(占)。占をする人。「人。賣卜者。

うらやす【心安】(名) 心中の安らかなこと。心のやすし。(古語)

うらやすし【心安し】(形、ク) こころのどかなこと。(古語)

うらやすのくに【浦安國】(名) 日本國の美稱。(古語)

うらやなぎ【裏柳】(名) 襲の色目。表は白、裏は萌黃。

うらやま【裏山】(名) 裏の方にある山。

うらやま【浦山】(名) ㊀浦と山。㊁海濱にある山。

—かぜ【浦山風】(名) 海濱にある山の吹く風。

うらやまし【羨ましし】(形シク) ㊀人のすぐれたのを見てそのやうになりたいと思ふ。㊁ねたましたいと思ふ。

—い【羨ましい】(形) うらやましいの口語。

—がる【羨がる】(他動、ラ四) 羨ましく思ふ。

—げ【羨ましげ】(名) うらやましく思ふさま。

—さ【羨ましさ】(名) うらやましいこと。又、その度合。

うらやまぶき【裏山吹】(名) 襲の色目。表は黃、裏は萌黃。

うらやみ【羨】(名) うらやむこと。

うらやむ【羨む】(他動、マ四) (心病むの意) ㊀人のすぐれたのを見てそのやうになりたいと思ふ。㊁人のすぐれたのを見て憎む思ふ。

うらゆき【裏行】(名) 奥行。

うらら【麗】(名) うらら。

—に【麗に】(副) うらうらか。空の盛りなく晴れわたつたさま。㊁翠のうるはしく呀えたさま。心のびのびと晴れ渡つたさま。

—さ【麗さ】(名) うらうらかなこと。又、うらうらかな程度。

—げ【麗げ】(名) うらうらかなこと。又、うらうらかな程度。

うららけし【麗けし】(形、ク) うらうらかであること。のどかであること。

ウラルアルタイご【烏拉兒阿爾泰語】(名) (Ural-Altaic language) 北部亞細亞より歐羅巴の一部に亙る言語の稱。これをウラル系・アルタイ系の二大別する。ウラル系にはフィンランド語・ペルム語・マジャール語・サモエッド語等之に屬し、アルタイ系にはトルコ語・蒙古語・滿洲語・朝鮮語・日本語等之に屬する。この語族の言語の特色は膠著性を有するにある。

うらわ【浦曲】(名) 浦の曲つた處。うらま。

うらわい【占兆】(名) うらかた。(古語)

うらわかげ(名) うらわかいさまを。

うらわかさ(名) うらわかいこと。又、その程度。

うらわかし【形シク】(形、ク) ㊀心が若い。鈍が若い。年が若い。㊁草木が若くみづみづしい。

うらわけごろも【浦分衣】(名) 浦々を歩く人の衣。(古語)

うらわし【浦和市】(名)【地】埼玉縣の縣廳所在地。東北本線の一驛で、又、東京から省線電車を通ずる。高等學校・調査のほか公園等がある。

うらわたり【浦渡】(名)(うらすたいと)浦傳。

ウラン【Uran; Uranium】(名)【化】クローム族の結晶性金屬元素。黄色の酸化物は、黄色の燐光を放ち、黑色の酸化物は磁器の著色料とする。**—こう**(ウラニウム)【—鑛】(名)【鑛】(Uranium mineral)ウラニウムを含有する主要鑛物。ウラン灰鑛・ウラン砒灰鑛・ウラン銅鑛・ウラン重土鑛・カーノタイト・閃ウラン鑛等。

うらんかなしゅぎ【沾哉主義】(名)自家宣傳「を盛んにして他の需要を求める主義。

うり【瓜】(名)【植】ヲ科の蔓性一年生草本。「きうり」「しろうり」「まくはうり」「すゐくわ」「かぼちゃ」「へちま」「とうなす」「ゆふがほ」等の總稱。㊁しろうり。「まくはうり」の特稱。**—に爪あり爪に爪なし**(句)「瓜」と「爪」との字の異同を説明した句。**—の蔓に茄子はならぬ**(句)平凡な親からは非凡な子は生まれぬ。系統の爭び難きにいふ。**—二つ**(句)二人の容貌の似たことの譬。

うり【賣】(名)賣ること。

うりあぐ(ウリアゲル)【賣上ぐ】(他動、ガ下二)㊁賣りつくす。みな賣る。

うりあげ【賣上】(名)手許に現物なくして賣ること。

うりあげ【賣上】(名)㊁賣りつくすこと。㊂賣ったあがり高。**—かんじょう**(ウリアゲカンジョウ)【賣上勘定】(名)㊁賣上代金の勘定。㊂【經】(イ)前金を拂はせて品物を預っておいて、一定の時期に賣上高によってその代金を勘定して拂ふこと。(ロ)委託販賣の受託者が、委託者に對して賣上の勘定をすること。**—かんじょうしょ**(ウリアゲカンジョウショ)【賣上勘定書】(名)【經】賣上勘定の約束で預った品物の賣上の結果を明記した勘定書。**—しきりじょう**(ウリアゲシキリジョウ)【賣上仕切狀】(名)【經】(うりあげかんじょうしょ)。**—ちょう**(ウリアゲチョウ)【賣上帳】(名)賣上げの品目と代價とを記入する帳簿。

うりあげる(ウリアゲル)【賣上げる】(他動、ガ下一)(うりあぐ)の口語。

うりあまする(ウリアマス)【賣餘す】(他動、サ四)賣りきらないで、品物を手許に殘す。

うりあるく(ウリアルク)【賣歩く】(他動、カ四)「品を賣る目的で、あるきまはる。

うりあるく(ウリアルク)【賣歩く】(他動、カ四)商

うりいえ(ウリイエ)【賣家】(名)人に賣るべき家。**—と唐様**(ウリイエトカラヤウ)**で書く三代目**(句)祖父が働いて財産を造っても、孫の世には學藝に親しんで破産し、自分の家を賣家に出すその廣告の字も唐樣のしれたものになる意。町人に學問は不要なりとの江戸時代の思想を川柳に詠んだもの。

うりいそぎ【賣急】(名)(ウリイソギ)「で賣ること。

うりいだす(ウリイダス)【賣出す】(他動、サ四)㊁うりはじめる。㊂商賣がさかえる。㊃名聲をひろめる。

うりいと(ウリイト)【賣追】(名)【經】取引所で、早晩相場の下落することを見越して盛んに賣ること。

うりおしみ(ウリオシミ)【賣惜】(名)【經】値段の騰貴することを見越して、品物を賣り放すのをためらふこと。

うりかい(ウリカイ)【賣買】(名)㊁賣ると買ふこと。㊂あきなひ。ばいばい。㊃相場。

うりかけ【賣掛】(名)後に代金を受取る約束のもとに物を賣渡すこと。又、その代價。**—かんじょう**(ウリカケカンジョウ)【賣掛勘定】(名)得意先に對する賣掛金の總勘定。**—きん**(ウリカケキン)【賣掛金】(名)物品賣掛の代「ぎは。㊁賣る方の人。

うりかた(ウリカタ)【賣方】(名)㊁賣る方法。賣りつける手

うりかつ(ウリカツ)【賣勝つ】(自動、タ四)賣高が他にまさる。「爲替を賣り國に代へること。

うりかせ(ウリカセ)【賣爲替】(名)【經】銀行が外國

うりき(ウリキ)【賣氣】(名)賣らうとするけはひ。又は、その傾向。

うりきたる(ウリキタル)【賣來る】(他動、ラ四)賣りつづけて來て今になる。

うりきり(ウリキリ)【瓜切り】(名)瓜を切るやうに眞一つに切「ること。

うりきる(ウリキル)【賣切る】(他動、ラ四)賣りつくす。みな賣る。「商品のありたけが賣れる。

うりきる(ウリキルル)【賣切る】(自動、ラ下二)

うりきれ(ウリキレ)【賣切れ】(名)「うれてしまったこと。賣りつくしたこと。

うりきれる(ウリキレル)【賣切れる】(自動、ラ下一)「うりきる」の口語。所有の道具などを賣って、其の代金で日日の生活を立てること。

うりぐい(ウリグイ)【賣食】(名)

うりぐずし(ウリグズシ)【賣崩】(名)【經】相場用語。持株を盛んに賣って他人を賣りに向かはせ、相場の下落するを待って俄然買占めること。

うりぐすり(ウリグスリ)【賣藥】(名)ばいやく。

うりぐち(ウリグチ)【賣口】(名)うりさき。販路。

うりけん(ウリケン)【賣券・沾券】(名)賣渡すことの契約を認めた證書。**—じょう**(ウリケンジョウ)【賣券狀】(名)「うりけん」に同じ。

うりこ【賣子】(名)㊀商家で品物を賣り歩かせる人。商家で行商させる人。㊁色を賣る者。**—やど**【賣子宿】(名)野郎・若衆の宿。

うりごえ(ウリゴエ)【賣聲】(名)品物を賣る爲に呼びあ

うりこかす(ウリコカス)【賣りこかす】(他動、サ四)他人の品物を無斷で他へ賣りとばす。

うりことば【賣詞・賣言葉】(名)賣數よりも賣數の多いこと。

うりこし【賣越】(名)賣數よりも賣數の多いこと。

うりことば【賣言葉】(名)他人の怨を招く言葉。喧嘩を求めるやうなことば。**—に買言葉**(句)相手から暴言をいひかけられて、暴言をいひ返すこと。

うりこみ【賣込】(名)賣込むこと。販路を擴張すること。**—しょう**(ウリコミショウ)【賣込商】(名)【經】地方の荷主から貨物を委託せられて、貿易港の外國商人に賣込む商人。

うりこむ(ウリコむむ)【賣込む】(他動、マ四)得意をつくる。販路を擴める。

うりさき【賣先】(名)商品を賣りつける相手。うりくち。得意先。「政府から物品を民間に賣り渡す。

うりさぐ(ウリサグ)【賣下ぐ】(他動、ガ下二)

うりさげる(ウリサゲル)【賣下げる】(他動、ガ下一)(うりさぐ)の口語。

うりざね【瓜核】(名)瓜のたねに似た顏、卽ち色白く中高でやや長い顏。「ぐ賣ること。㊁うりさばく所。

うりさばき【賣捌】(名)㊀うりさばくこと。手廣く賣る。販賣する。

うりさばく(ウリサバく)【賣捌く】(他動、カ四)手「よい機會。

うりじゅん【賣順】(名)賣附け又は賣る に都合の

うりしろ【賣代】(名)品物を賣った代金。うりあ

うりたす(ウリタス)【賣代爲す】(他動、サ四)

うりたて【賣立】(名)【經】取引所の定期取引で株を賣ること。

うりだて【賣建】(名)【經】取引所で建玉を賣ること。

うりだめ【賣溜】(名)賣上げ代金を溜めておくこと。

うりつく(ウリツク)【賣附く】(他動、カ下二)無理に賣はせる。おしうりする。

うりつくす(ウリツクス)【賣盡くす】(他動、サ四)ある限りを賣ってしまふ。悉皆賣る。

うりつくり【瓜作・瓜・秋】㊀瓜を作ること。又、その人。㊁「となりかくなり」の枕詞。

うりすえ(ウリスエ)【賣据】(名)建築物などのままに「据ゑおいて賣ること。

うりぞめ【賣初】(名)賣りはじめること。賣出。「か。

うりだか【賣高】(名)賣上げの金高。うりあげだ

うりだし【賣出】(名)㊀うりだすこと。うりはじめ。㊁商賣の景氣をつける爲に、一定の日を選んで特別に安く賣り、又は景品をつけること。㊂名望の高まって行くこと。

うりだす(ウリダス)【賣出す】(他動、サ四)「うりいだす」の口語。

うりたたく(ウリタタく)【賣叩く】(他動、カ四)【經】相場で、賣方が盛んに賣って、相場を買方の自由にさせぬこと。「ふこと。

うりたて【賣立】(名)所藏品を集めて一時に賣拂

うりだて【賣建】(名)【經】取引所の定期取引で株を賣ること。又、その金。

うりだめ【賣溜】(名)賣上げ代金を溜めておくこ

うりつく(ウリツク)【賣附く】(他動、カ下二)

うりつくす(ウリツクス)【賣盡くす】(他動、サ四)

うりつくり【瓜作・秋】㊀瓜を作ること。又、その人。㊁「となりかくなり」の枕詞。

うりつける〔買付ける〕〔他動、カ下一〕「うりつく」の口語。

うりつ〔賣繋〕(名)【經】相場で、現物の所有者が、定期取引で賣って置くこと。低落すれば、買戻して利益を得る。

うりて〔賣手〕(名)品物を賣る人。うりぬし。

うりて〔賣手形〕(名)賣ったといふ證文。

うりてがた〔賣手形〕(名)賣ったといふ證文。

うりどころ〔瓜所〕(名)瓜を產する地。

うりとばす〔賣飛ばす〕〔他動、サ四〕品物を惜しげもなく賣拂ふ。

うりな〔賣名〕(名)賣物の名。

うりなかい〔賣仲買〕(名)【經】商品の賣捌に關する仲介人。「方(賣りとばす。

うりながす〔賣流す〕〔他動、サ四〕遠

うりぬし〔賣主〕(名)品物を賣る人。うりて。

うりぬし〔瓜主〕(名)瓜の持主。

うりね〔賣値〕(名)賣り渡すねだん。賣價。

うりのき〔賣退〕(名)【經】相場用語。定期取引で買って置いたものの相場が下落して、當分騰貴の見込無い場合、多少の損を忍んで之を轉賣すること。

うりのき〔瓜木〕(名)瓜木科の落葉喬木。高さ約三米。葉は互生、大形の掌狀葉で、淺く三一五裂し、基部は心臟形、葉柄と共に多くの細毛を有する。夏日、葉腋に一花梗を抽き、白色で外反する五瓣花を開く。花後、漿果を結ぶ。

うりの〔賣乘〕(名)【經】相場用語。賣建が相當利益あるやうになった時、更に賣增すこと。

うりば〔賣場〕(名)㊀商品を賣る場所。㊁賣るべき好機。㊂劇場で、樂戲・土間などの見料に關する事務を取扱ふ所。

うりばえ〔瓜蠅・守瓜〕(名)【動】金花蟲科の昆蟲。體長七粍位。體は黃褐色で、前胸背に深い横溝がある。瓜類の葉を食害し、捕へると、惡臭のある液を出す。うりはむし。

うりはだかえで〔瓜膚楓〕(名)【植】槭樹科の落葉喬木。幹の高さ約一〇米、樹皮綠色、葉は心臟形で、三乃至五淺裂し、對生する。春、淡黃色の花を總狀花序に配列する。樹皮は繩を造る料となり、木材は諸種の器具材に供ぜられる。

うりはらい〔賣拂〕(名)賣拂ふこと。

うりはらう〔賣拂ふ〕(他動、ハ四)(うりはろう)の口語。

うりはろう〔賣拂ふ〕(他動、ハ四)賣ってしまふ。てばなす。賣る。

うりひしぐ〔賣拉ぐ〕(他動、ガ四)同商賣で賣勝って相手をまかす。

うりひろぐ〔賣擴ぐ〕(他動、ガ下二)うりひろげる。

うりひろげる〔賣擴げる〕(他動、ガ下一)「うりひろぐ」の口語。

うりひろむ〔賣弘む〕(他動、マ下二)ひろく賣る。賣先を廣くする。

うりひろめ〔賣弘〕(名)うりひろめること。

うりひろめる〔賣弘める〕〔賣弘める〕(他動、マ下一)「うりひろむ」の口語。

うりぶね〔賣船〕(名)㊀賣るべき船。㊁食船。

うりぶね〔瓜船〕(名)㊀瓜を積んだ船。㊁瓜を縱に二つざりにした一片。

うりへぎ〔賣剝〕(名)他人の物を賣って、その代金の一部を勝手にわがものにすること。

うりべらし〔賣減〕(名)賣りへらすこと。

うりべらす〔賣減らす〕(他動、サ四)㊀在品を少くする目的で物を賣る。㊁損として賣本をへらす。

うりまろび〔瓜轉〕(名)瓜のまろぶやうに人の轉ぶこと。

うりまわる〔賣廻る〕(他動、ラ四)賣る目的で歩きまはる。

うりもの〔賣物〕(名)賣るべき品物。賣拂ふ品物。賣品。―**ちょう**〔賣物帳〕(名)日日の賣った商品を記載する帳簿。

うりもみ〔瓜揉〕(名)「きうり」「しろうり」を薄く刻み、鹽をかけて揉み、三杯酢をかけた食品。

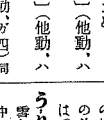
うりや〔賣屋〕(名)商品を賣る人。うりかた。

うりや〔賣家〕(名)うりいへ。賣るべき家。

うりゅう〔瓜生〕(名)瓜のはえてゐる島。瓜畑。

うりゅういわ〔瓜生岩〕(名)【人】明治時代の婦人社會事業家。福島縣の人。職死者遺族・窮民の救護・惡風矯正に力め、明治二十九年藍綬褒章を賜はった。明治三十年(一五五七)歿。年六十九。

うりょう〔雨量〕(名)雨・雪の降った分量。雨量などが地上に降って、地中にしみこまず、又、蒸發せぬものとしての容積。降水量。


〔計量器〕

―けい〔雨量計〕(名)一定の場所に設けて、或時間中の雨量を測る器械。亞鉛や銅の圓筒を漏斗狀の蓋で覆し、その中央の小さい孔から筒に溜った水の深さによって計る。通常ミリメートルを單位として計算する。

うりょう〔憂ふ愁ふ・患ふ〕(他動、ハ四)次條に同じ。

うりょう〔憂ふ愁ふ・患ふ〕〔憂ふ愁ふ・患ふ〕(他動、ハ下二)㊀なげき誤へる。(古語)㊁心配する。かなしむ。きづかふ。懸ける。不安心である。㊂病にかかる。病む。㊃憂(はしで思ひやむ。(◎「患」は病や災難などの爲に苦しむ。外敵の事に心配する。(◎「愁」は淋しく思ひ沈む。㊄「恤」は氣の毒に思ふと。又、その米。

うりょうよね〔賣米糧〕(名)藏にある米を賣出すこと。

うりわかしゅ〔賣若衆〕(名)男色を賣る若衆。

―しゅう〔賣渡證〕(名)【經】商品賣却に際し、賣渡したことを證明した文書。「た品物を渡す。

うりわたす〔賣渡す〕〔他動、サ四〕賣

うりん〔羽林〕(名)(羽林を)羽の如く、多きことの知き意。漢官百官公卿表に出つ)㊀近衛府の唐名。㊁宮中宿衛の兵士。―**けい**〔羽林家〕(名)公卿の家格。大中納言・參議に至り得る家柄で、正親町・中山・油小路・姉小路・東園等の諸家。

うりんいん〔雲林院〕(名)【佛】京都市上京區紫野、大德寺の南にあった天台宗の寺。もと淳和天皇の離宮であったのを、仁明天皇の貞觀十一年(一五二九)寺となし、光孝天皇の仁和二年(一五四〇)僧正遍昭が奏して元慶寺別院とした。後、荒廢して觀音堂だけが存する。―**ぼだいこう**〔雲林院菩提講〕(名)【佛】雲林院で、三月廿一日、法華・金光明の二經を講じた法會。

うる〔賣る〕(他動、ラ四)㊀代金を受けて品物を渡す。㊁需要を求める。㊂名聲を世にひろめる。㊃あざむく。だしぬく。㊄自らてちって名を求める。

うる〔賣る〕〔賣る〕(自動、ラ下二)商品がよく賣れて行く。うれる。

うるあわ〔粳粟〕(名)粘力の少い種黃の粟。

うるい〔潤〕(名)(うるおいの)潤の。(古語)

うるう〔閏〕(名)(うるおう)の國の。(古語)

地球の周歸年は三六五日五時四八分四六秒だから、その端數を積んで、太陽曆では四年目に一周二月の日數を二九日とし、太陰曆では平年を三五四日と定めてゐるから、時時一年を十三ケ月とすること。―**ずき**〔閏月〕(名)閏のある月。―**どし**〔閏年〕(名)閏のある年。

うるう〔潤ふ〕(自動、ハ四)(うるおう)潤ふ。

うるう〔潤ふ〕〔潤ふ〕(自動、ハ四)(うるおう)潤ふ。

うるおい〔潤〕(名)しめり。潤ひ。利益。利潤。㊁めぐみ。恩惠。㊂文藝の作品に情味の多いこと。

うるおう〔潤ふ〕〔潤ふ〕(自動、ハ四)㊀しめる。ぬれる。㊁ゆたかになる。㊂利益がある。㊃しめぐみを受ける。㊄流はしこむ。そまる。㊅④濕はしめりをもつ。◎「潤」はしっぽりぬれる。又、惠をうける。

うるおす〔潤す〕〔潤す〕(他動、サ四)㊀しめらす。ぬらす。㊁しみこます。そめる。㊂利益を施す。恩德を施す。

うるか〔鰞鱁〕(名)鮎の腸又は子を鹽漬にした食品。

ウルガ〔Urgal〕(名)【地】蒙古民國卽ち外蒙

古の首都で、同國に於ける政治・宗教・經濟の中心。

うるきび〔粳黍〕(名) 粘力の少い種子の黍。

うるげる〔ひけげる・ひけける〕(自動・カ下一) うるほふ。

うるげる〔ひけげる・ひけける〕(自動・カ下一) うるほふ。

うるさ〔煩〕(名)うるさいこと。**—い**〔ひけげい〕〔煩い〕(形「うるさし」の口語。**—うるさ**〔煩〕(名・副) 極めてうるさいさま。**—がる**〔らがれる〕〔煩がる〕(自動・ラ四) うるさく思ふ。**—げ**〔煩げ〕(名) うるさいと思ふさま。**—さ**〔煩さ〕(名) うるさいこと。又、その程度。**—し**〔くくけげし〕〔煩し〕(形、一) わづらはしい。いとはしい。

うるさし〔くくけげし〕〔麗し〕(形、一)、うるせし。うるはしい。(古語)

うるし〔漆〕(名) ㊀〔樹〕漆樹〔うる〕科の落葉喬木。高さ三米以上。樹皮は灰白色。葉は五〜七対の小葉をつけた奇數羽狀複葉で、小葉は卵形又は卵狀楕圓形、全緣で、裏面の葉脈上と葉柄には多くの毛茸を有する。六月頃葉腋に黄綠花を複總狀に開く。果實は核果で十月頃成熟して黄褐色となる。乾かして後搾つて蠟を採り、樹皮から出る漂液を採る。うるしの木。㊁漆汁に著色劑や乾燥劑を加へて製した塗料。漆汁は灰白色であるが、乾けば黑褐色となる。**—いし**〔漆石〕(名)【鑛】黑曜石。かすいし。**—え**〔漆繪〕(名)㊀墨の上に漆膠を塗り、金泥などを用ひて光るやうにした錦繪。㊁漆器に色漆又は生漆で畫いた繪。**—かき**〔漆搔〕(名) 漆の樹皮を傷つけて流れ出る液汁を採集すること。又、その人。**—かぶれ**〔漆感〕(名) 漆の毒に感じて生ずる皮膚病で、局部に多數の小突起を生じ、腫れあがつて痒みを感ずる。**—こし**〔漆漉〕(名) 漆を濾すに用ひる紙で、多くは吉野紙を用ひる。**—ざいく**〔漆細工〕(名) 器物に漆を塗つて細工すること。又、其の物。**—じ**〔漆地〕(名) 漆で塗つた下地。**—ぬり**〔漆塗〕(名) 器物に漆を塗ること。又、その器物。又、その製造人。**—の き**〔漆木・漆樹〕(名)うるし㊀。**—ぼん**〔漆判〕(名) 膠をひいて漆のうるを光澤を出した判。檢印として奈良晒に押したもの。**—ぶろ**〔漆風呂〕(名) うるしむろ。**—まけ**〔漆負〕(名) うるしかぶれに罹り易いこと。**—むろ**〔漆室〕(名) 漆を塗つた器物を乾燥せしめる室。**—もん**〔漆紋〕(名) 漆で書いた定紋。多くは夏衣の紋附などに用ひる。

うるしきび〔粳稷〕(名)うるきび。

うるしね〔粳稻〕(名)【植】飯に炊いて常食とする米のなる稻。うるち。

うるせし〔くくけげし〕〔麗し〕(形、一) ㊀うるはしい。すぐれてゐる。㊁たくみである。(古語)

うるち〔粳〕(名) 粘氣の少い米、飯も普通の米。うるしね。

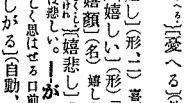
ウルトラ〔Ultra〕(英、名・形) ㊀超。飛びぬけてゐること。**—モダン**〔Ultra modern〕(名) 超近代的。モダン中のモダン。

ウルトラマリン〔Ultramarine〕(名) 紺青。

うるみ〔潤〕(名) ㊀うるむこと。にごり。くもり。㊁酒の醸造中、泡の狀態にくもりあること。㊂清酒の濁つたもの。**—ん—しゅ**〔潤朱〕(名) 黑色を帶びた朱の漆塗。**—ん—しゅ**〔潤椀〕(名) 潤朱塗の椀。

うるむ〔ほめむ〕〔潤む〕(自動、マ四) ㊀透明でない。曇る。さえない。㊁あざやかでない。しぶる。㊂打たれた跡が紫色になる。

うるめ〔潤目〕(名)【動】うるめいわし。**—いわし**〔潤目鰯〕(名)【動】喉鱗類の魚。形は鯵に似、喉は赤くうるんでゐる。背部淡蒼色、腹部は帶黄白色。鱗は櫛形で剝げ易い。脂少く味は淡泊で、生食し又、搾粕・乾物とする。


〔しわいめるう〕

うるわし〔くくけげし〕〔麗し〕(形、一) ㊀美しい。みめがよい。㊁愛らしい。親しみ易い。心がまめやかである。**—い**〔ひけげい〕〔麗しい〕(形「うるわし」の口語。**—げ**〔麗しげ〕(名) うるはしいさま。**—うるわし**〔麗しさ〕(名) うるはしいこと。又、その程度。

うるわしだつ〔うるはしだつ〕〔麗しだつ〕(自動、タ四) うるはしいさまに見える。かはゆいさまに見える。(古語)

うるわしむ〔しめむ〕〔麗しむ〕(他動、マ四) かはゆく思ふ。陸じくする。(古語)

うるわす〔うるはす〕〔麗す〕(他動、サ四) 心を通ずる。親しむ。いつくしむ。(古語)

うれ〔末・杪〕(名) 草木などの末端。うら。こずゑ。(古語)**—ば**〔末葉・杪葉〕(名) 草木の末の方にある葉。うらば。(古語)

うれ〔賣〕(名) 賣れ口。賣れゆき。**—くち**〔賣口〕(名) 賣れゆき。販路。はけみち。**—さき**〔賣先〕(名) うれくち。

うれい〔うれひ〕〔憂・愁・患〕(名)(うれえ。**—ごと**〔憂事・愁事〕(名) 悲しいことがら。心配。**—ぶし**〔愁節〕(名) 愁歎あらはす節。

うれえ〔うれへ〕〔憂・愁・患〕(名) ㊀なげき訴へること。㊁悲しみ。心配。不安心。㊂なやみ。わづらひ。病氣。㊃忌中。**—ぶみ**〔愁文〕(名) 歎願書。(古語)**—**

もうし〔まうし〕〔愁申〕(名) 愁訴。**—を掃ふ玉帚**(句) 酒を飲めば憂を忘れることから酒の德を賞していふ。

うれえる〔うれへる〕〔憂へる〕(他動・ハ下一)(うれうようの口語。

うれし〔くくけげし〕〔嬉し〕(形、一) 喜ばしい。樂しい。**—い**〔ひけげい〕〔嬉しい〕(形「うれしい」の口語。**—かおし**〔おばし〕〔嬉顏〕(名) 嬉しさうな顏つき。**—かなし**〔くくけげし〕〔嬉悲し〕(形、一) 一方では嬉しいが、一方では悲しい。**—がらせ**〔嬉しがらせる〕(名) 嬉しさを喜ぶ口前やしむけ。**—がる**〔らがれる〕〔嬉しがる〕(自動、ラ四) 嬉しく思ふ。**—げ**〔嬉しげ〕(名)うれしい樣子。**—さ**〔嬉しさ〕(名) うれしいこと。又、その程度。**—く**〔嬉しげく〕(副) うれしい樣子。(古語)**—さ**〔嬉しげく〕嬉しいこと。又、その度合。(古語)**—なき**〔嬉泣〕(名) 嬉しい餘りに泣くこと。**—なみだ**〔嬉涙〕(名) 嬉しさの餘りに出る涙。

うれしのちゃ〔嬉野茶〕(名) 佐賀縣藤津郡嬉野町附近から産する茶。

うれしのやき〔嬉野燒〕(名) 佐賀縣藤津郡嬉野町附近から産する下等の磁器。承應・萬治年間に創始されたといふ。

うれしぶ〔ぶび〕〔嬉しぶ〕(自動、バ四)うれしがる。

うれしむ〔むめむ〕〔嬉しむ〕(自動、マ四)うれしく思ふ。(古語)

うれだか〔賣高〕(名) 賣れた品物の數量又は金額。

うれたさ〔憂げ〕(名) うれたきこと。又、その程度。

うれたし〔くくけげし〕〔憂たし〕(形、一) なげかはしい。きらはしい。(古語)

うれだす〔すせす〕〔賣れ出す〕(自動、サ四) ㊀次第に販路が廣くなる。賣れ始める。㊁段段名望が擴がる。

うれっこ〔賣子〕(名) 賣れやりっこ。商況。

うれゆく〔ゆきゆく〕〔賣行く〕(自動、カ四) 次第に賣れる。うれまさる。

うれる〔れれれる〕〔賣れる〕(自動、ラ下一) 商品がよくさばける。商賣が繁昌する。

うれわし〔はくくけげし〕〔憂はし〕(形、一) なげかはしい。憂へべきである。**—い**〔ひけげい〕〔憂はしい〕(形)(うれわしの口語。**—げ**〔憂はしげ〕(名) うれはしい樣子。**—さ**〔憂はしさ〕(名) うれはしいこと。又、その程度。

うろ〔虛〕(名) あな。又、その程度。

うろ〔雨露〕(名) ㊀雨と露。あめつゆ。㊁恩澤の廣く及ぶこと。うるほひ。

うろ〔汪路〕(名) とほみち。まはりみち。

うろ〔烏鷺〕(名) ㊀烏と鷺。㊁黑と白。㊂碁の異名。**—の手**(句) 碁をうて勝負を爭ふこと。

うろ[有漏](名)【佛】有漏の略。煩悩の爲に業を續生して人間界を出離し得ぬこと。人間界。凡夫界。**—じ**[有漏路](名)【佛】有漏の世界。この世。**—どう**[有漏道](名)【佛】迷ひ離れ難い身。凡夫の身。**み**[有漏身](名)【佛】迷ひ離れ難い身。凡夫の身。

うろ[うろ](名)[古ふ](他動、ハ下二)うらなふ。

うろ[うろ](名)[古ふ](自動、ハ四)うらなふ。

うろうろ[彷徨・彷徨](名・副)❶まどろう方面の定まらぬさま。うろつくさま。❷人員を捕へる爲に、實際使用せぬ人夫を名義上雇ふこと。又、その人夫。**—がお**[彷徨顔](名)うろうろとまごつく顔附。**—なみだ**[彷徨涙](名)悲しくなって出る涙。**—まなこ**[彷徨眼](名)おちつかぬ目つき。

うろおぼえ[空覚](名)確實でない記憶。

うろくず[鱗](名)❶うろこ。❷魚。魚類。いろくづ。(以上古語)

うろこ[鱗](名)❶【動】魚類や爬蟲類の皮膚の上を覆ふ薄い小片。❷ものの表面にあって鱗に似たもの。❸紋所の名。❹頭のふけ。三角形の敷石。**—がた**[鱗形](名)模様の名。三角形を頂點が合ふやうに配列したもの。**—ぐも**[鱗雲](名)けんぜきうん。卷積雲。「てためつき。

うろたえまなこ[狼狽眼](名)驚きあわ

うろたえもの[狼狽者](名)物事にあわてふい人。あわてもの。

うろたえる[狼狽へる](自動、ハ下一)迷ひ騒ぐ。あわてまどふ。

うろつく[彷徨く・彷徨く](自動、カ四)まよひ歩く。さまよふ。うろうろする。まごまごする。「の中から間を隔てて引抜く。まびく。

うろぬく[虚抜く](他動、カ四)多くうろん[胡亂](名)(字の廣東言)怪しく疑はしいこと。怪しいのゆかぬこと。**—ざ**[胡亂座](名)【佛】禪宗の儀式で、位次の決定せぬ場合に、假に設ける座席。**—もの**[胡亂者](名)怪しいもの。

うわ[上](接頭)上(ウ)又はは)じめの意を表す。「語。

うわあご[上顎](名)上の方の顎。

うわあしどり[上足取](名)【經】取引所で相場のあがったこと。

うわうす[上臼](名)挽臼の上の方の石。

うわうわ[上上](名・副)氣が浮いておちつかぬさま。うかうか。

うわえ[上絵](名)染めた布帛の上に更に繪を描くこと。又、其を業とする人。**—かき**[上絵書](名)上繪を描くこと。又、其を業とする人。**—ずけ**[上絵附](名)陶磁器に釉藥をつけて燒いた上に、更に繪を描いて燒くこと。**—や**[上絵屋](名)上繪をかくことを職業とする家。又、その人。

うわえり[上領・上襟](名)上の方のえり。

うわお[後夫](名)後の夫。(古語)〈後妻(ウワナリ)の對〉

うわおおい[上覆](名)物の上を覆ふもの。「上包。外被。

うわおおき[上置](名)❶机などの上におく箱。❷餅・飯などを盛った上に副食物を盛ること。❸料理で、賞味せられるものを上に置くこと。

うわおそい[上襲](名)衣服の上に着る小衣。うはがい。(古語)

うわおび[上帯](名)❶着物の上に締める帶。❷鎧の上に纏ふ帶。❸籠(エビ)の上にかけて腰に結ぶ帶。❹ふとおび(太帶)。「まえ)。

うわがい[上交](名)❶おくろ(衽)。❷(うわ

うわがえ[上交](名)着物の抵合の上になったところ。うはまへ(上前)。

うわがき[上書](名)書狀・書簡・箱などの表面に書くこと。又、其の文字。

うわがけ[上掛](名)うはおほひ。外套。うはっぱり。

うわがさね[上襲](名)❶衣服の上着。❷着物の上の前。

うわがすみ[上霞](名)物の上方を薄く蔽

うわかぜ[上風](名)草木などの上を吹く風。

うわかぶき[上歌舞伎](名)浮華輕佻なこ

うわがみ[上紙](名)上包の紙。表紙。「と。

うわがり[上借](名)同じ貸主から金を借りた上に、又借り入れること。

うわかる[上枯る](自動、ラ下二)上の方が枯れる。うらがる。

うわがる[上嗄る](自動、ラ下二)聲の少しくかれること。「がれ。

うわかれ[上枯](名)うはがれること。うら

うわかわ[上側](名)表面。外側。

うわき[浮氣](名)❶心の變り易い性質。❷物の外面を覆ふ物。外被。

うわかわ[浮氣鳥](名)うかれがらす。**—さけ**[浮氣酒](名)うかれて飲む酒。**—しょうし**[浮氣性](名)多情な性質。**—っぽい**[浮氣っぽい](形)心が移り易い。**—もの**[浮氣者](名)心の移り易い人。多情者。

うわぎ[上着](名)❶上に着る衣服。上被・羽織・外套の類。❷うちき(袿)。

うわぎすり[上薬・釉薬](名)陶磁器の表面に塗って光澤を出し且實用に適ぜしめる目的に用ひられる硝子質の粉末。つやくすり。「る鎧。

うわぐそ[表具足](名)腹卷の上に着け

うわぐちびる[上唇](名)上の方の脣。

うわぐつ[上靴](名)室内ではく靴・スリッパ。

うわぐみ[惚](名)あきれること。(古語)

うわぐみ[上汲](名)汲みあげたうは水。

うわぐむ[惚む](自動、マ四)あきれる。(古語)「はみづ(上水)を汲む。

うわぐむ[表具足](名)腹卷の上に着け

うわぐもる[上曇る](自動、ラ四)❶表面が曇る。❷上の方が曇る。

うわぐら[上鞍](名)柿葺(コケラ)などの風にまくられるのを防ぐ爲に、屋上に人の字の形にとりつけた丸太。「羽根。

うわげ[上毛](名)❶上に生えた毛。❷上の

うわげいき[上景氣](名)表面だけの景氣。

うわげた[上桁](名)和船の帆桁の上方に取りつけた小桁。

うわごおり[上氷](名)表面に薄くはった氷。

うわごと[譫言](名)❶發熱して正氣を失った時に發する條理のたたぬ言。たはごと。❷條理の立たぬ放言。でたらめ。

うわさ[噂](名)❶世間でいひふらす話。風說。世評。❷噂人の身の上や物事についての話。

うわさし[上刺](名)❶布帛を力綿で菜盤の目の形にさすこと。又、そのもの。❷直垂・狩衣などの袖の飾として、組緒・丸緒で、あらく刺し縫うたもの。❸袴の紐などを平緒・丸緒で刺縫をした飾。❹(うわざしぶくろ)の略。**—ぶくろ**[上刺袋](名)昔、貴人の外出する時、衣服等を入れて從者に持たせた袋。上刺にした布帛で作り、方形の底を有し、上の口に紐をとほして締める。

うわさや[上鞘](名)【經】同一品に對し異なる期日物の相場を比較して片方が他方より高いこと。

うわし[上敷](名)❶或物の上に敷くもの。❷うすべり。❸くらしき(鞍敷)。(古語)

うわじまし[宇和島市](名)【地】愛媛縣の南部にある都市。豐後水道に臨む良港で、絹織物・醸造物等を産する。

うわしる[上汁](名)❶流動物の上の方に浮く汁。❷勞せずして、人の利益の幾分をとること。

うわずけ[上附](名)(うわがき(上書)。

うわずつみ[上包](名)包物の覆。

うわすべり[上滑](名)❶表面の滑かなこと。❷表面だけを理解して眞意をさとらぬこと。❸うかうかして物事に注意の足らぬこと。

うわずみ[上積](名)上部に積む荷物。

うわずり[上摺](名)(うわぞめ(上染)。

うわずる[上擦る](自動、ラ四)❶

輕しく見える。㊁言葉は親切であるが、心が輕薄である。㊂上氣する。逆上する。

うわずべり【上滑り】(名)(うわすべり)。

うわずめ【上染】(名) 表面を染めること。うはすり(上摺)。

うわちどり【上千鳥】(名)【動】ゐつ・ごとり。

うわちょうし【上調子】(名) ㊀落ちつかぬ調子。うかれてゐる調子。㊁言語・動作などの落ちつかぬこと。誠意の足らぬこと。

うわ-づく【上づく】(自動 カ四) 氣が浮浮して落ちつかぬ。

うわ-つ-つら【上面】(名)(うわつら)。

うわ-つ-はり【上張】(名) 衣服の汚れを防ぐ爲に、其の上に着る表衣。

うわ-つら【上面】(名) うは、べ。表面。外側。

うわて【上手】(名) ㊀上の方。㊁かざかみ。㊂川上。上流。㊃技能・學力などが他に勝れてゐること。㊄大道物で我が馬の前に立つた射手。

—かじ【上手舵】(名) 舵の柄を少し風上に寄せること。

—すかし【上手透】(名) 相撲の手。相手の腕を抱き込み、その胸に頭をつけてひれり倒すこと。

—なげ【上手投】(名) 相撲の手。相手の廻しの結び目をつかみ、身を捻りながら投げること。

—ひねり【上手捻】(名) 相撲の手。廻しを引きあふ間に上手に力を入れて捻り倒すこと。

うわ-とよむ【上響む】(上動 マ四)(うはどよめむ) 上の方がかりの鳴り響く。(古語)

うわ-なが【上長】(名)【經】相場で、賣人氣の旺盛なこと。賣買取組で、賣方の店が買方の店よりも數多いこと。

うわ-なみ【上波】(名) 水面の波。

うわなり【上鳴表鳴】(名) 笛などの正音以外の雜音。

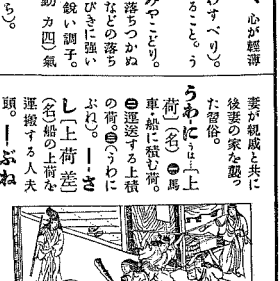
うわなり【後妻・後妻】(名) 後にめとった妻。ごさい。(古語)(うはなり)の對)

—うち【後妻打】(名) ㊀嫡妻が次妻を嫉んで打つたこと。㊁室町時代に、妻を離縁して後妻を娶った時、先妻が親戚と共に後妻の家を襲つた習俗。

うわ-に【上荷】(名) ㊀馬車・船に積む荷。㊁運送する上積の荷。㊂(うわにぶれ)。

—さし【上荷差】(名) 船の上荷を運搬する人夫頭。

—ぶね【上荷船】(名) 波止場と本船との間を運うて荷物を運ぶ小舟で、二〇—三〇石積位のもの。



〔後妻打〕

うわ-にごり【上濁】(名) 流動物の上部の濁つた所。(上澄の對)

うわ-ぬり【上塗】(名) ㊀中塗の壁の上に土をぬること。㊁ある上に更に添へ加へること。うはのり。

うわ-ね【上直】【上値】(名) 値段のあがること。

うわ-の-そら【上空】(名) ㊀上方の天。㊁少しも心にとめぬさま。㊂あてにならぬこと。㊃有頂天(うちやう)。

うわ-の-り【上乘】(名) ㊀航海中、荷と共に船に乘つてそれを處理・監督し、且取引の委任を受けること。又、其の人。㊁物事の上に又添へ加へること。「餘分の端數。うはぬり。

うわ-は【上端】(名) ㊀物の上部。㊁單位より上の方がかりの鳴り響く。

うわ-ば【上齒】(名) 上のはくきに附いた齒。(下齒の對)

うわ-ばい【上這】(名) ㊀表面を這ひあるくこと。

うわ-ばき【上履】(名) 室内の床・板の間などに用ひるはきもの。

うわ-げ【上剝】(名) 塗物などの表面のはげ「はた。かみはた。

うわ-ばた【上機】(名) 麻や紬を織るに用ひること。

うわ-ばみ【蟒】(名) ㊀【動】蛇の巨大なるもの。大蛇。をろち。長さ六米位。胴部に暗黃褐色の斑紋がある。㊁大酒家。

うわ-はらおび【上腹帶・表腹帶】(名) 馬の腹帶の上を包む大帶。

うわ-はらまき【上腹卷・表腹卷】(名) 狩衣・直垂(ひたた)・水干などの上につける腹卷。

うわ-ば-り【上張】(名) ㊀襖などの仕上げばり。㊁(うわつばり)。

うわ-はれ【上腫】(名) 表面のはれること。

うわ-ひ-ひ【上瞼】(名)【醫】瞳の上に發生して物の見えぬ眼病。(ひそひの對)

うわ-ひげ【上髭】(名) 脣の上のひげ。

うわ-ぶし【上臥】(名)(うえぶし)〈上臥〉。

うわ-ぶち【上扶持】(名) ふち(扶持)。

うわ-ぶみ【上文】(名) うはがき。表題。

うわ-べ【上邊】(名) ㊀おもて。表面。外觀。㊁外え。

—なし【上邊無し】(形 一)(うはべなし) 情愛を缺いてゐる。愛想がない。(古語)

うわ-まい【上米】(名)(うわまえ)〈上前〉。

うわ-まえ【上前】(名) ㊀者物の前を合はせた時の表になる部分。㊁取次ぐべき代金・賃金の一部分。

—とり【上前取】(名) 上前をかすりとること。又、其の人。

—をはねる(句) 取次ぐべき代金や賃金の或部分をかすりとる。

うわ-まく【上幕】(名) 人形芝居の舞臺などで、天井の前方に上から垂れる幕。

うわ-み【褶】(名)(うわも)。(古語)

うわ-みず【上水】(名) うはすみの水。

うわ-みず-さくら【上不見櫻】(名)【植】薔薇科の落葉灌木。高さ約一〇米。葉は廣楕圓形、先尖で鋸齒を具へる。五月頃、白色五瓣の小花を綻り、總狀花序に配列する。花後小核果を結ぶ。

うわ-み-そ【褶】(名)(うわみざくら)。

うわ-む-き【上向】(名) ㊀上に向いてゐること。㊁外觀。うはべ。㊂【經】相場の騰貴する傾向あること。

うわ-む-しろ【上蓆・上筵】(名) 寢床の上に敷くむしろ。ごさ。

うわ-め【上目】(名) ㊀瞳を上へ向けること。㊁秤棹の上面にしるした點を標準として量ること。(向目(むかめ)の對) ㊂上に出ること。超過。㊃かいがある。㊄大酒家。

うわ-めづかい【上目遣】(名) 瞳を上へ向けて人を見る癖。「み。(下裝の對)(古語)

うわ-も【上裳】(名) 裳の上に重ねる裳。うは

うわ-もり【上盛】(名) ㊀あるが上に更に盛り加へること。㊁又、その物。㊂第一流。第一の上手。最上のもの。

うわ-もる【上盛る】(自動 ラ四) 心がたかぶる。上氣する。落ちつかぬ。

うわ-や【上矢・表矢】(名)(うわざし)〈上差〉。

うわ-や【上屋】(名) ㊀停車場・波止場などで、旅客又は貨物の雨露を防ぐ爲に設けた假屋。㊁建築物の上に設けた假屋根。

—わたし【上屋渡】(名) 商品を上屋に貯蔵したまま引渡すこと。

うわ-やく【上役】(名) 上役人。上官。「る。

うわ-る【植る】(自動 ラ四) 植ゑられ

うん【運】(名) ㊀めぐり來る命數。めぐり來る善惡の果。まはりあはせ。天命。運命。㊁うつりかはる時勢。時。折。㊂幸福なまはりあはせ。

—しだい【運次第】(名) 運のよしあしに任ずること。

—すく【運盡】(名) 運命にまかせること。

—だめし【運試】(名) 幸運か不運かを試みる行爲。

うん【暈】(名) ㊀【天】(Halo) 大氣の上層にある氷晶の結片が、光線を屈折・反射する爲に生ずる現象で、太陽又は月の周圍に現れる白色輪狀の光氣。つきがさ。かさ。㊁くもり。かすみ。㊂くまどり。ぼかし。㊃めまひ。

うん(名・副) ㊀承諾の意をあらはす聲。㊁氣絕する時、苦しい時などに發する聲。㊂力を籠める時の聲。

—と云ふ程(句) 甚だ多く。十分に。

—ともす(句) 否とも應とも返辭せぬこと。「と行と。

うんい【云爲】(名) いふ事となすこと。言

うんう【雲雨】(名) ㊀雲と雨。㊁吳志周瑜傳に出る立身出世の機會。㊂(宋玉の神女賦に出る)男女の同衾。

うんえい〔雲翳〕(名)くもりのかげ。くもり。かげり。

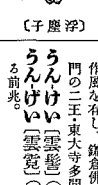
うんえい〔雲影〕(名)雲のすがた。**—とうせい**〔雲影濤聲〕(名)松が繁って雲かと疑はれ、松吹く風の波の音かと思はれるさま。

うんえん〔雲烟〕(名)㊀雲と烟と。㊁山水の名蹟。**—かがん**(わん)〔雲烟過眼〕(名)㊀樂しみに長く執著せぬこと。㊁物事に深く心を留めぬこと。**—ひどう**〔雲烟飛動〕(名)書家などの文字のすぐれて勢のよいこと。**—ひょうびょう**(ぴょう)〔雲烟縹渺〕(名)雲烟の遠くたなびくさま。

うんおう(ぉう)〔蘊奥〕(名)學術・技藝などの奥義。造詣。學蘊。

うんか〔雲霞〕(名)㊀くもとかすみと。㊁多く集「まるさま。

うんか〔浮塵子〕(名)〔動〕有吻亞目(ぁもくぁぁ)類の小蟲。形態は蟬に似て小さく五粍位、口吻は尖って植物の汁を吸ふに適する。前後翅を具へ、多數群をなして稻田に來り、軟葉又は花の汁液を吸收して稻を枯らす。よこばひ。こぬかむし。



〔浮塵子〕

うんが〔運河〕(名)運漕・灌漑・排水・給水・動力等の便に供する爲に、陸地を掘り割って通じた水路。ほり川。「こと。

うんが(がう)〔雲臥〕(名)世を避けて山中などに棲む

うんかい〔雲海〕(名)㊀雲が群って山麓を包み、海面の波濤を見るが如く見えること。㊁廣廣として際涯の雲に接するが如く見える海。

うんかん〔雲間〕(名)雲の絶え間。雲の中。

うんかん〔雲漢〕(名)あまのがは。㊁大空。

うんき〔雲氣〕(名)㊀氣象變化の爲に雲の動くさま。㊁空に立ちのぼる異樣の氣。

うんき〔運氣〕(名)自然現象を人の運命に當てて「こと。吉凶を判斷する術。

うんき〔溫氣〕(名)㊀あたたまり。㊁むしあつい

うんきゃく〔雲脚〕(名)㊀雲の垂れ下ったやうに見えるもの。㊁風に吹かれて雲の動くさま。雲のゆき。

うんきゅう(きゅう)〔雲級〕(名)【地】雲形の種類。卷雲・卷層雲・卷積雲・積卷雲・層卷雲・層積雲・亂雲・積亂雲・層雲の十種類の名。

うんきょう(きょう)〔雲鏡〕(名)〔Nephoscope〕雲の進行・方向・速度を測る器械。雲速計。

うんけい〔運慶〕(名)【人】鎌倉時代の彫刻家。定朝の玄孫。康慶の子。剛健の精神を表現した寫生の作風を有し、鎌倉佛師の祖と稱せられた。東寺南大門の二王・東大寺多聞天等は共の傑作である。

うんけい(けい)〔雲髻〕(名)女の髮を高く結んだ形容。

うんけい〔雲竟〕(名)雲とにじ。雨の降らうとする前兆。

うんげん〔縹纈・暈纈〕(名)㊀染色の名。同じ色で、濃淡を數段にわけて彩色したもの。㊁縹纈の境なくまどって織った綾織物。**—くもがた**〔縹纈雲形〕(名)うんげん彩色でかいた雲形。**—ざいしき**〔縹纈彩色〕(名)奈良朝・平安朝の建築の裝飾・佛像の着衣の模樣に用ひられ、淡から濃へ、濃から淡へと反復する手法の彩色。**—にしき**〔縹纈錦〕(名)赤地に、黃・綠・紫・青などの色で菱形・花菱・鱗などの模樣を織り出した綾織物。**—べり**〔縹纈縁〕(名)うんげんにしきを用ひた疊又は茵の縁。

うんご〔雲居〕(名)【人】鎌倉時代の奇僧。伊達政宗に寵せられ、陸前國松島瑞巌寺に住した。

うんこう(こう)〔運行〕(名)㊀運轉しながら進行すること。㊁【天】〔Revolution〕天體がその軌道を運動すること。公轉。

うんこう(こう)〔芸香〕(名)【植】ヘルウダ。

うんごう(ごう)〔雲合〕(名)雲の如く集合すること。**—むしゅう**(しゅう)〔雲合霧集〕(名)數多の人が四方から集まること。

うんこくは〔雲谷派〕(名)雪舟の衣鉢を傳へた雲谷等顔の創めた日本畫の一派。

うんごじ〔雲居寺〕(名)【佛】京都市東山區の高臺寺の地にあった寺。承和四年(一四九七)菅原道眞桓武天皇菩提の爲、建立、本尊の阿彌陀は、高さ八丈、奈良の大佛と併稱されたが應仁の兵火に焼失した。

うんこん〔雲根〕(名)(雲は石から生ずるとの說)がら出る)山中の岩石の異稱。

うんさ〔運座〕(名)【文】多人數集まって各人各題に就いて俳句を作り、互選する食合。又、多人數集まり、一定の題によって各自俳句を詠出して互選する食合。文政年間に始まったが、今日も行はれる。

うんさい〔雲際〕(名)雲のあるあたりのそら。「と。

うんさい〔運載〕(名)船や車に載せて運送すること。

うんさい〔雲彩〕(名)雲や虹の樣に入り亂れたいろどり。支那乾隆時代磁器の釉色に用ひられた。

うんさい〔雲齋織〕(名)地があらく斜交に織った厚い綿布(雲齋織の略)。雲齋とはいふ人の織り出したもの。

うんざい(名)人を罵っていふ語。のろま。まぬけ。

うんざり(名・副)物事に厭き果てるさま。

うんさん〔雲散〕(名)雲の散るやうにちりぢりになること。**—しむ**〔雲散霧消〕(名)ちりぢりになって消え失せること。

うんさん〔雲棧〕(名)山中にある高いかけはし。

うんさん〔運算〕(名)【數】數字で式の示す通りに「げ。

うんざん〔雲山〕(名)雲のかかってゐる山。

うんし〔紙籽〕(名)くまぎりつちかふこと。

うんしゃ〔運者〕(名)幸運人。しあはせもの。

うんじゃ〔蘊藉・醞藉〕(名)おだやかで奥ゆかしいこと。

うんじゃ〔雪蛇〕(名)㊀雲の中を翔けるといふ蛇。

ウンシャン〔獨 Unschon〕(名)蝕女。

うんしゅう(しゅう)〔溫州〕(名)㊀【地】支那浙江省の地名。㊁【植】〔うんしゅうみかん〕。**—みかん**〔溫州蜜柑〕(名)【植】普通の蜜柑より大きく、果皮薄く、種子なくして味がよい。もと溫州から渡ったものといふ。**—の旦那**(句)(溫州蜜柑には種がないかいふ)金のない客。

うんしゅう(しゅう)〔雲岫〕(名)雲のかかった山洞。

うんしゅう(しゅう)〔雲集〕(名)雲のやうに多く集まること。**—むさん**〔雲集霧散〕(名)多くのものが集まったり散ったりすること。

うんしょう(しょう)〔雲霄〕(名)㊀雲のある空。㊁高「い地位。

うんじょう(じょう)〔運上〕(名)〔運送上納の意〕江戸時代に商工業の營業者及び運搬物品に課した稅金の一種。**—がた**〔運上方〕(名)江戸時代に運上を徵收した役人。**—しょ**〔運上所〕(名)江戸時代に運上を取扱ひ、不正の輸出入を監視した在港の役所。**—もの**〔運上物〕(名)江戸時代に運上として納めた物。**—りょう**(りょう)〔運上料〕(名)運送賃。

うんじょう(じょう)〔雲上〕(名)㊀雲の上。㊁禁中。

—びと〔雲上人〕(名)公卿。殿上人。

うんじょう(じょう)〔雲樓〕(名)雲の入り亂れるやうに世の亂れること。

うんじょう(じょう)〔雲壇〕(名)㊀天と地。㊁相撲「甚しいことに譬へる語。

うんじょう(じょう)〔醞醸〕(名)㊀酒を醸し造ること。㊁天地間の萬物の熟成すること。

うんじょうりょうへん〔雲蒸龍變〕(名)㊀雲の蒸しのぼるにつれて、蛇が龍となって昇天すること。㊁英雄・豪傑が、機會に遭遇して立身すること。

うんしょく〔暈色〕(名)虹のやうな色の曲線狀なす模樣。**—ガラス**〔暈色硝子〕(名)光線を種種に反射して美麗な光彩を放つ硝子。

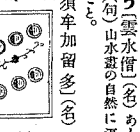
うんしん〔運針〕(名)裁縫の針を運ぶ動作。

うんしんげっせい〔雲心月性〕(名)利慾に恬淡な心。

うんず〔やがてしやすする〕〔倦す〕(自動・サ變) 倦む。いやになる。〔古語〕

うんすい〔雲水〕(名) ㊀雲と水と。㊁雲の如く行き水の如く流れる義から、所定めず遊歷する行脚僧の意に用ひる。**—そう**〔雲水僧〕(名) あんぎゃ僧の異稱。**—飛動す**(自)〔サ變〕山水畫の自然に逼るやうにいきいきしてゐること。

うんすんかるた〔字牟須牟加留多〕(名) 江戸時代の初期、ポルトガル人の傳へたカルタ。イスといふ飼ハウといふ背色の棍棒、コップといふ酒盃ポウルといふ、金貨の四種の絵に分ち、各十二枚、總計四十八枚からなり、用法は花ガルタに似て博奕用のもの。


〔たるかんすんう〕

うんせい〔運性〕(名) 干支によって、人の天與の運命を定めること。

うんせい〔運勢〕(名) めぐりあはせ。運。

うんせい〔芸生〕(名) 陰屠十一月の異名。

うんせい〔暈渣〕(名) ぼかし。いろどり。**—しき**〔暈渣式〕(名) 地圖で、地表の高低を彩色の濃淡で現すもの。

うんせんぐ〔雲箋〕(名) 他人の手紙の美稱。

うんせんがたけ〔温泉岳・雲仙岳〕(名)【地】長崎縣南高來(たか)郡島原半島にある噴火山。その西部の九千部岳は海拔一〇六一米。その東部の普賢岳は海拔一三六〇米。種種の地獄(噴氣孔)噴出し、西南の山麓に硫黄泉の溫泉がある。國立公園の一。

うんそ〔運祚〕(名) ㊀しあはせ。天運。㊁天子の御位。天運を受けて帝位にお登りになること。

うんそう〔芸圃〕(名) 芸閣の雅。書窩。書齋。

うんそう〔運漕〕(名) 船で物を運ぶこと。

うんそう〔運送〕(名) ㊀物品を運び送ること。㊁貨物及び旅客を運送又は船舶によって一定の場所から他の場所に送り移すこと。**—ぎょう**(ぎょう)〔運送業〕(名) 運賃又は手數料を受けて旅客や貨物の運送をなす營業。**—けいやく**〔運送契約〕(名) 運送人が運送する一定の荷送人が之に對して運賃を支拂ふことを保證する契約。**—じょう**(じょう)〔運送狀〕(名) ㊀運送人が荷受人に對して、物品と共に發送する通狀。㊁荷送人が荷受人に對して、貨物の運送について法定事項を記載して、交附する證書。**—せん**〔運送船〕(名) ㊀運送に用ひる船舶。㊁軍事の輸送に用ひる船。**—ちん**〔運送賃〕(名) 貨物又は旅客の運送の報酬として受ける賃金。**—とりあつかい**(あつかい)〔運送取扱〕(名) 旅客又は荷送人と運送人との間に立って、運送營業をなす人。**—にん**〔運送人〕(名) 運送の目的たる物品。**—ほけん**〔運送保險〕(名)【經】運送する貨物に對し、災害の爲、荷主の受ける損害を償ふ爲の保險。**—や**〔運送屋〕(名) 運送業を營む人又はその家。**—りょう**(りょう)〔運送料〕(名) 運送賃。

うんそん〔雲孫〕(名)(仍孫(じょうそん))の子で、己を去ること、の遠きこと浮雲の如しの意八代目の孫。

うんちく〔蘊蓄〕(名) ㊀積みたくはへること。又、その物。㊁知識や學問の深いこと。

うんちゅう〔雲中〕(名) 雲の中。**—の白鶴**(句) 俗氣を抜け離れた人。

うんちん〔運賃〕(名) 運送賃。**—さきばらい**……〔運賃先拂〕(名) 運送した貨物の到着した時、荷受主からその運賃を支拂ふこと。**—どうめい**〔運賃同盟〕(名)【經】運送業者が同業者間の競爭を避ける爲、相互間及び鐵道當事者と各貨物の最低運賃を協定すること。**—ひょう**(ひょう)〔運賃表〕(名) 旅客又は貨物の運賃を種別に記載した表。**—ほけん**〔運賃保險〕(名)【經】運送人が事故の爲、運送を繼續する能はずして運賃を失ふ場合の損害を補ふ爲の保險。**—まえばらい**(まえ)……〔運賃前拂〕(名) 貨物の運送を委託した場合にその運賃の前に支拂ふこと。

うんつく(名) ぼんやり者。うっかりもの。

うんてい〔雲梯〕(名) ㊀昔、城攻に用ひた長いはしご。くものかけはし。㊁柴窟殿北廂東階の別稱。

うんでい〔雲泥〕(名) 相違することの甚だしい譬。**—ばんり**〔雲泥萬里〕(名) 天地の差の如く懸隔の甚だしいこと。**—の差**(句) 甚だしいちがひあること。

ウンテル〔獨 Unter〕(名) 地下鐵道。

うんてん〔運轉〕(名) ㊀めぐりあはせ。くること。㊁ころがすこと。

うんてん〔運轉〕(名) ㊀めぐりあはせ。くること。㊁運用。利用。ぐりあはせ。**—けいとう**〔運轉系統〕(名) 汽車・電車・バスなどの運轉が、次第順序を追うて統一してゐること。**—し**〔運轉士〕(名) 船舶の運轉を掌る海員。一等運轉士と二等運轉士とがあり、一等運轉士は船長代理權を行使し得る。**—しほん**〔運轉資本〕(名)【經】(りゅうと)どうしほん)流動資本。**—しゅ**〔運轉手〕(名) 電車・自動車・エレベーターなどの運轉を掌る者。

うんと(副) 多く。たくさん。

ヴント〔Wilhelm Max Wundt〕(名)【人】イツの心理學者。心理學に生理的實驗法を用ひ、又心理學を精神科學の基礎の上におき、民族心理學を確立した。「生理學的心理學の根本」「民族心理學」等の著がある。(一八三二)

うんどう〔運動〕(名) ㊀めぐり動くこと。物體が其の位置を變ずること。㊁奇生の爲に身體を動かすこと。㊂歩行。散歩。㊃或目的を達するが爲に奔走盡力すること。**—いん**(いん)〔運動員〕(名) うんどうしゃ。**—かい**(かい)〔運動會〕(名) 多人數集合して種種の競技や遊戯をすること。**—がく**〔運動學〕(名)【理】物理學力學の一分科で、物體の運動に就いて幾何學的性質を研究する學。**—かんかく**〔運動感覺〕(名)【心】身體の全部又は一部を靜態から動態に移す時に生ずる感覺。**—き**〔運動器〕(名)【動】動物が移動を行ふ爲の器官で、手・足・翼・鰭・纖毛・原形質等の總稱。**—きょうぎ**(きょう)〔運動競技〕(名) 一定の規則に從って、速力・持久力・技能等の熟練を競爭する運動。競技。スポーツ。**—ぐつ**〔運動靴〕(名) 各種の運動競技用の靴で、野球・ランニング・フットボール等、それぞれ特殊の型がある。**—しっちょう**(ちょう)〔運動失調〕(名)【醫】運動をしようとする時、身體各部の調和を缺、故障から來る。**—しゃ**〔運動者〕(名) 或目的を達せんが爲に奔走盡力する人。**—じょう**(じょう)〔運動場〕(名) 運動競技や遊戯をする爲に諸種の器具や其の他の設備を施した廣場。**—しん**〔運動神經〕(名)【生】神經中樞から末梢へ興奮を傳達する神經。**—せいしつごしょう**(しょう)〔運動性失語症〕(名)【醫】言語を發表し得ぬ疾患。**—せん**〔運動戰〕(名) 遭遇戰・追擊・退却・防禦陣地の攻防のやうに、兵團の運動中に發生し、永く一箇所に固着しない戰鬪。**—ちゅうすう**〔運動中樞〕(名)【生】運動に關する遠心性神經を支出する神經細胞の中樞で、大腦・延髓・脊髓等の總稱。**—ひ**〔運動費〕(名) 或目的を達せんが爲に要する費用。**—ふく**〔運動服〕(名) 諸種の運動競技に適應した型の服裝。野球用・ランニング用・フットボール用・ラグビー用・蹴人用・體操用・テニス用・排球用・籠球用等、種種の種類がある。**—ぼう**(ぼう)〔運動帽〕(名) 運動競技に便利なやうにした特製の帽子。**—まひ**〔運動麻痺〕(名)【醫】運動機能が消失すること。**—りょう**(りょう)〔運動量〕(名)【理】運動體の質量とその速度との相乘積である。一物體或は一體系内の運動量は、其の内部同志が働く力では變化されないこと。質量と速度との何れも大なる程、運動量の大であることが特性である。物體が運動する爲に有するエネルギー。質量をm瓦、一速度をv秒とすれば、その運動エネルギーはmv^2である。**—の定律**(句)【理】イギリス人ニュートンの物體運動に關する三法則。(1)物體は之に外力を加へない限りは、靜止の狀態にあるか、若しくは一直線上に等速運動をなす。(2)物體に力が作用する時は、その力の方向とその力の大、

さに正比例して、物質の運動が變化する。(3)力の作用する所には、常にそこに等しくして方向の正反對な作用がある。

うんどう[雲堂](名)僧堂の異稱。

うんとん[雲屯](名)㊀雲の如く多く集まること。㊁水滸。支那流の抹茶道具の一。

うんどん[饂飩](名)小麥粉に鹽をまぜて水でかためゐくのばし、細く切つたもの。うどん。

うんぬん[云云](名)㊀しかじか。これ、これ。連續した文を中途で切り、後の意をかくかくと言ひとどめる時に用ひる語。㊁いはれぬ事情。

うんのう[暈滃](名)ぼかし。—**しき**[暈滃式](名)地圖上に於ける高低などを陰影の濃淡によつて表はし示すもの。

うんばん[雲版](名)寺院で合圖に打鳴らす樂器。青銅又は鐵の板のまはりに雲形の模樣をつけたもの。

うんぱん[運搬](名)㊀貨物などを運ぶこと。㊁[地]河水、風などが、土砂・砂礫等を流轉せしめること。—**ぎょう**[運搬業](名)(うんそうぎょう)運送業。—**ぜい**[運搬税](名)[法]消費税の一。消費物が取引賣買の爲、運搬せられた時賦課せられる消費税。關税・營業税・貯藏税はそこに屬する。

うんぴつ[運筆](名)筆のつかひ方。字の書き方。

うんぴょう[雲表](名)雲の上。雲外。

うんぴょうざっし[雲萍雜志](名)[文]柳澤淇園の和漢混淆文の隨筆で、平易暢達、自由な筆致で志士・仁人の言行を掲げ、世態・人情を描いてゐる所に特色がある。四卷。天保十四年(一八四三)刊。

うんぷ[雲鬢](名)耳の毛の美稱。

うんぷてんぷ[運否天賦](名)人の運の吉凶は、天の定める所であること。うんまかせ。

うんぺい[雲平](名)雲平糖で種種の形に作りあげた干菓子。—**とう**[雲平糖](名)白砂糖に糯粉をまぜ、少量の水を流して捏ね固めた干菓子。

うんぼ[雲母](名)【蘚】板狀又は片狀の硅酸鹽物で、花崗岩中に多く含まれ、剝離する性を有する。白と黑との二種がある。自雲母は瑠璃の代用・ストーヴの窓・電氣の絶緣體等に用ひられる。うんも。きらら。

うんぼう[雲夢](名)【地]支那の里數で、方九百里。

うんぼう[雲房](名)高く聳えたいらか。

うんぼう[雲甍](名)高く聳えたいらか。

うんぼう[雲袍](名)わたいれ。ぬのこ。たんぱう。

うんまかせ[運任](名)運に任せて事を行ふこと。

うんむ[雲霧](名)㊀雲と霧。㊁深い疑の譬。㊂奸臣が君主の明を蔽ふ譬。—**を披いて青天を觀る**(句)(晉書の樂廣傳に出る)心のはれやかで快いさま。

うんめい[運命](名)人の身にめぐり來る善惡・吉凶の事情。人生諸般の出來事が、必然の超人間的な力によつて支配せられてゐるといふ信仰又は思想。めぐりあはせ。まはりあはせ。—**しん**[運命神](名)運命の神格化されたもの。エジプトのシャイ、ギリシャのモイラ、ローマのフォルトゥナ等はその代表的のもの。—**ひげき**[運命悲劇](名)[文]個人の意思と其の境遇及び運命との葛藤を主題として其の悲惨な解決を示した劇。—**ろん**[運命論](名)【哲]Fatalism]あらゆる自然現象及び人間界の出來事は、先天的に定まつてゐて、決して吾人の意思によつて支配し得られないといふ說。吾人の努力生活を否定する退嬰主義に陷り易い。宿命論。

うんめい-でん[温明殿](名)內裏御殿の一。神鏡を安置し奉る殿。綾綺殿と宣陽殿との間にあつた。賢所。內侍所。

うんめん[饂麪](名)汁で煮たうどん。

うんも[雲母](名)うんぼう。きらら。

うんも[雲母片岩](名)【蘚]雲母を主成分とする片岩。—**へんがん**[雲母片麻岩](名)【蘚]雲母を主成分とする片麻岩。片麻岩とは長石等を含む結晶質の變成岩である。

うんもん[雲門](名)【人]支那後漢の禪僧。雲門宗の開山。

うんもんちく[雲紋竹](名)【植]斑竹の一種。皮に雲形の斑紋ある竹。

うんやだい[雲屋臺](名)雲中に樓閣・臺榭などを現はした模樣。

うんゆ[運輸](名)(正しくは「うんしゅ」)貨物を運び送ること。—**きかん**[運輸機關](名)貨物運搬に關する機關で、湖・海・川・街路・鐵道・バス等の運輸線路と、人力車・馬車・荷車・汽車・電車・バス・船舶・トラック等の運輸具との二つに分れる。—**きょく**[運輸局](名)[法]主として國有鐵道の運輸に關する事務を掌る役所で、鐵道省七局の一。

うんよう[運用](名)はたらかし用ひること。活用。—**じつ**[運用術](名)船舶を操縱する技術。—**の妙は一心に存す**(句)(唐書岳飛傳の句)法を活用する妙機は、其の人の心に存する。

うんら[雲羅](名)明樂・清樂に用ひる一種の樂器。銅製の鉦を縱橫三箇づつ、更に上に一箇を水架にかけて小槌でうつもの。

うんらん[雲蘭]柳穿魚(名)【植]玄參(Figwort)科の多年生草本。全株無毛で粉白。莖は直立し高さ三〇糎位。葉は三箇輪生し、笠狀或針形で全緣。十月頃稍頭に總狀花を著け、自色薔薇の假面狀花を密生する。海岸の砂地に生ずる。

うんり[雲裏](名)雲の中。

うんりゅう[雲龍](名)【地]雲の中の龍。

うんりゅう-すい[雲龍水](名)昔の消火器。

うんりょう[雲量](名)雲が空を覆ふ分量で、全く雲なきを零とし、全空を覆へる十位として觀測する。

うんりょう[雲龍](名)㊀雲中の龍。㊁龍が雲に乘つて昇天する狀を描いた模樣。

うんりん[雲林](名)雲のかかつてゐる靜かな林。

うんりん[雲林院](名)(うりんいん)。「長くつづいてゐる廊下。

うんろう[雲廊](名)雲のたなびいたやうに

え(恵)

え㊀五十音圖「あ」行第四の音。㊁「あ」と「を」の中間母音。「い」よりも、口を稍、低くして發音する。㊂「衣」の草體。

え㊀五十音圖「わ」行第四の音。㊁昔は「う」を從音とし、「え」を主音とした綴音であつた。㊂「惠」の草體。

え(江)(名)海又は湖が陸地に入り込んだところ。いりえ。

え(兄)(名)兄又は姉の古語。「大—」「—姫」(第)

え(疫)(名)はやりやむひとやみ。時疫・疫病(古語)

え(柄)(名)手に持つて便ならしめる爲につけた器物の細長い部分。

え(枝)(名)えだ。(古語)

え(肢)(名)手足。(古語)

え(胞)(名)えな。(古語)

え(荏)(名)【植]えごま(荏胡麻)。

え(榎)(名)えん(榎)の略。

え(宴)(名)よく。あへて。(下に打消の助動詞か反語の助詞を伴なふを例とする)「—行かず」(古語)

え(得)(副)「語]

え(役)(名)えだち。ぶやく。(古語)

え(縁)(名)えん(縁)の古語。

え(感)㊀歎く時の發聲。(古語)㊁然諾の發聲。㊂疑問の場合の發聲。

え(助詞)方向を示す語。「東—行く」。

え(重)(接尾)かさなり。「一—」「八—」。

え(方)(接尾)方角位置・時を表はす語。「ゆく—」「しり—」「いにし—」。

え(上)(名)うへ(上)の古語。

え(會)(名)㊀佛]多くの人の集まつて行ふ佛事又は祭事。法—」「放生—」。㊁集會。—**ざ**[會座](名)【佛]法會の時、來集者の列する座席。

え(慧)(名)事理を分別する精神作用。

え(笑)(名)わらひ。ゑみ。—**がお**[笑顏]